美浜町埋蔵文化財調査報告第 10 集

美浜町内遺跡発掘調査報告書４

興道寺廃寺(第 17～19 次調査)

高善庵遺跡(第2・3次調査)

興 道 寺 遺 跡

藤 ノ 木 遺 跡

中 長 浜 遺 跡

丹 生 砦 跡

２０２０

美浜町教育委員会

美浜町埋蔵文化財調査報告第 10 集

美浜町内遺跡発掘調査報告書４

興道寺廃寺(第 17～19 次調査)

高善庵遺跡(第2・3次調査)

興 道 寺 遺 跡

藤 ノ 木 遺 跡

中 長 浜 遺 跡

丹 生 砦 跡

２０２０

美浜町教育委員会

興道寺廃寺第 17 次調査全景

興道寺廃寺第 18 次調査 1 トレンチ SZ180101-SD1 土層断面

巻頭図版２

高善庵遺跡から興道寺廃寺跡を望む（南から撮影）

興道寺廃寺第 19 次調査１トレンチ SZ190101-SD1 埋土出土の
ネコ科と考えられる動物の足跡が付いた須恵器杯（内面）

例　言

1．本書は、美浜町教育委員会が国庫補助金（文化庁　国宝重要文化財等保存整備費補助金・国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金）の交付を受けて実施した、美浜町内所在の埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．興道寺廃寺第17～19次調査、高善庵遺跡第２・３次調査、および町内遺跡の発掘調査等に関する現地調査および整理作業、報告書作成は、平成28年度(2016)から同30年度(2018)、令和元年度(2019)までの４年間において実施し、その成果を本書に収録した。

3．発掘調査、整理作業、および発掘調査報告書の作成は、美浜町教育委員会の直轄事業として実施した。美浜町教育委員会教育長が調査主体者となり、文化財保護執行課である教育政策課が事務局となっている。以下に、調査に関する体制を列記する。

調査主体者

大同　保　（美浜町教育委員会教育長、平成28・29年度）

森本克行　（美浜町教育委員会教育長、平成29・30年度、令和元年度）

調査事務局

渡辺直史　（美浜町教育委員会事務局　教育政策課　課長、平成28～30年度、令和元年度）

河合政志　（美浜町教育委員会事務局　教育政策課　歴史文化館　館長、平成28～30年度）

塩浜洋一　（美浜町教育委員会事務局　教育政策課　歴史文化館　館長、令和元年度）

松葉竜司　（美浜町教育委員会事務局　教育政策課　歴史文化館　主査（学芸員）
平成28～30年度、令和元年度）

調査作業員

石丸晴夫、伊藤キヨ子、大畑和代、奥村憲昭、北村八千代、小坂美喜、小林幸男、坂田尚子、谷川陽子、伊達泰子、手倉森由起、中山俊一郎、西野律子、桧木等、原田吉雄、平城美智子、町野和彦、三田昭治、道下匠、箕山千恵(平成28～30年度、令和元年度)

4．現地調査は松葉が担当した。

5．本書の構成は、興道寺廃寺第17～19次調査報告、高善庵遺跡第２・３次調査報告、および町内遺跡発掘調査等の報告からなる。

6．遺物実測図の縮尺は本文中に示す。図中の遺物断面は須恵器を黒塗り、陶磁器をトーン、土師器・製塩土器・瓦を白抜きとした。

7．本書収録の第１～３・５図は、国土地理院発行の２万分１正式図および数値地図 25000（地図画像）を使用した。また、第21・34・40・44図は、美浜町発行の２千５百分１地形図を使用した。

8．興道寺廃寺、高善庵遺跡の過去の発掘調査については調査報告書が刊行されている。煩雑となるため、以下に掲出し、本文では略書名を記す。

『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（平成15年３月発行。本文では『2003年報告』と略す。）

…興道寺廃寺第１次調査を収録

『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（平成18年３月発行。本文では『2007年報告』と略す。）

…興道寺廃寺第２～８次調査、高善庵遺跡第１次調査を収録

『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』（平成 24 年３月発行。本文では『2012 年報告』と略す。）

…興道寺廃寺第９～13 次調査を収録

『興道寺廃寺発掘調査報告書』（平成 28 年３月発行。本文では『2016 年総括報告』と略す。）

…興道寺廃寺第 14～16 次調査および興道寺廃寺発掘調査総括編を収録

９．本書の執筆、編集は松葉が行った。

10．現地調査・報告書作成で下記の個人・機関にご指導、ご協力を賜った。（敬称略）

文化庁文化財第二課、福井県教育庁生涯学習・文化財課、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、若狭考古学研究会、美浜町文化財保護委員会

荒井秀規（藤沢市教育委員会）、諫早直人（京都府立大学）、今村昌子（美浜町文化財保護委員会）、上野晃（若狭考古学研究会）、海野聡（東京大学）、近江俊秀（文化庁）、梶原義実（名古屋大学）、門井直哉（福井大学）、金田久璋（美浜町文化財保護委員会）、腰地孝大（野々市市教育委員会）、栄原永遠男（大阪市立大学）、清水孝之（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）、神野恵（奈良文化財研究所）、清野孝之（奈良文化財研究所）、清野陽一（奈良文化財研究所）、高島英之（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、竹内亮（花園大学）、田辺信義（元　美浜町文化財保護委員会）、堂野前彰子（明治大学）、中川佳三（福井県教育庁生涯学習・文化財課）、中西紘子（美浜町文化財保護委員会）、中野知幸（羽咋市教育委員会）、中原義史（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）、中村友一（明治大学）、永井邦仁（愛知県埋蔵文化財センター）、西島伸彦（小浜市教育委員会文化課）、林正憲（奈良文化財研究所）、馬場基（奈良文化財研究所）、菱田哲郎（京都府立大学）、古川登（株式会社四門）、本多達哉（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）、水野和雄、三舟隆之（東京医療保健大学）、三好清超（飛騨市教育委員会）、森井守（美浜町文化財保護委員会）、山口悦子（元　美浜町文化財保護委員会）、山口遥介（岡崎市教育委員会）、山崎健（奈良文化財研究所）、渡辺丈彦（慶應義塾大学文学部）（所属は本報告刊行時のものである）

11．出土遺物・記録類は、美浜町教育委員会　教育政策課　歴史文化館が保管している。

12．本書掲載の調査資料は、貸し出しの用意がある。また、本書の複製は、文化財の保護、教育普及、公開活用、学術研究が目的の場合に限り、著作権者の承認を得ずに利用することができる。ただし、出典を明記する必要がある。

目　　次

巻頭図版

例　　言

目　　次

第１章　興道寺廃寺(第17～19次調査) ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ **1**

第１節　興道寺廃寺周辺の地形と土地利用 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 1

第２節　遺跡からみた興道寺廃寺周辺の歴史 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 7

第３節　調査に至る経緯と経過 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 11

第４節　発掘調査の方法 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 12

第５節　興道寺廃寺第４期調査(第17～19次調査)の概要 ‥‥‥‥‥‥‥ 15

第６節　興道寺廃寺第17次調査 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 18

第７節　興道寺廃寺第18･19次調査 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 26

第８節　興道寺廃寺第17～19次調査の総括 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 41

第２章　高善庵遺跡(第２・３次調査) ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ **43**

第１節　高善庵遺跡周辺の環境 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 43

第２節　調査に至る経緯と経過 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 45

第３節　高善庵遺跡第２・３次調査の概要 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 47

第４節　高善庵遺跡第２・３次調査 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 47

第５節　高善庵遺跡発掘調査の総括 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 59

第３章　町内遺跡試掘調査 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ **61**

第１節　興道寺遺跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 61

第２節　藤ノ木遺跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 63

第３節　中長浜遺跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 70

第４節　丹生砦跡 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 75

写真図版

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図	興道寺廃寺周辺地形分類図	2
第２図	興道寺廃寺周辺地質分類図	3
第３図	興道寺廃寺周辺地形図	4
第４図	興道寺廃寺現況地形測量図	５・６
第５図	興道寺廃寺周辺遺跡分布図	9
第６図	興道寺廃寺発掘調査位置図	13
第７図	興道寺廃寺第17次調査トレンチ配置図	16
第８図	興道寺廃寺第18・19次調査トレンチ配置図	17
第９図	興道寺廃寺第17次調査１トレンチ遺構平面図	19・20
第10図	興道寺廃寺第17次調査１トレンチ遺構土層断面図	21
第11図	興道寺廃寺第17次調査１トレンチ出土遺物実測図	25
第12図	小字狐塚周辺の地籍図	26
第13図	興道寺廃寺第18次調査１トレンチ遺構平面図	29・30
第14図	興道寺廃寺第18次調査１トレンチ遺構土層断面図	31
第15図	興道寺廃寺第18次調査１トレンチ出土遺物実測図	32
第16図	興道寺廃寺第19次調査１・２トレンチ遺構平面図	35
第17図	興道寺廃寺第19次調査１トレンチ遺構土層断面図	36
第18図	興道寺廃寺第19次調査１トレンチ出土遺物実測図	37
第19図	興道寺廃寺第19次調査２トレンチ遺構土層断面図	39
第20図	興道寺廃寺第19次調査２トレンチ出土遺物実測図	40
第21図	高善庵遺跡位置図	44
第22図	高善庵遺跡第２・３次調査トレンチ配置図	46
第23図	高善庵遺跡第２次調査１トレンチ遺構平面図	49
第24図	高善庵遺跡第２次調査１トレンチ遺構土層断面図	50
第25図	高善庵遺跡第２次調査１トレンチ出土遺物実測図	51
第26図	高善庵遺跡第２次調査２・３トレンチ遺構平面図	52
第27図	高善庵遺跡第２次調査２トレンチ遺構土層断面図	53
第28図	高善庵遺跡第２次調査２トレンチ出土遺物実測図	53
第29図	高善庵遺跡第２次調査３トレンチ遺構土層断面図	55
第30図	高善庵遺跡第２次調査３トレンチ出土遺物実測図	55
第31図	高善庵遺跡第３次調査１トレンチ遺構平面図	56
第32図	高善庵遺跡第３次調査１トレンチ遺構土層断面図	57
第33図	高善庵遺跡第３次調査１トレンチ出土遺物実測図	58
第34図	興道寺遺跡試掘調査位置図	62
第35図	興道寺遺跡試掘調査土層断面模式図	63
第36図	藤ノ木遺跡試掘調査位置図	64
第37図	藤ノ木遺跡2017年試掘調査出土遺物実測図	65
第38図	藤ノ木遺跡試掘調査土層断面模式図	68
第39図	藤ノ木遺跡試掘調査出土遺物実測図	69
第40図	中長浜遺跡試掘調査位置図	71
第41図	中長浜遺跡（丹生小学校遺跡Ａ地区）採集遺物実測図	72
第42図	中長浜遺跡試掘調査土層断面模式図	73
第43図	中長浜遺跡試掘調査出土遺物実測図	74
第44図	丹生砦跡試掘調査位置図	75

表　目　次

第１表	興道寺廃寺周辺遺跡一覧	10
第２表	興道寺廃寺第17～19次調査出土遺物観察表	42
第３表	興道寺廃寺第17次調査出土瓦観察表	42
第４表	高善庵遺跡第２・３次調査出土遺物観察表	60
第５表	町内遺跡試掘調査出土遺物観察表	77

写　真　目　次

巻頭図版１　上　興道寺廃寺第17次調査全景
　　下　興道寺廃寺第18次調査１トレンチSZ180101-SD1土層断面
巻頭図版２　上　高善庵遺跡から興道寺廃寺跡を望む
　　下　興道寺廃寺第19次調査１トレンチSZ190101-SD1埋土出土の
　　ネコ科と考えられる動物の足跡が付いた須恵器杯（内面）

本文写真１	興道寺廃寺空中写真(南から)	4
本文写真２	興道寺廃寺空中写真(北から)	4
本文写真３	高善庵遺跡の山間部に見られる平坦面	59
本文写真４	高善庵遺跡の山間部平坦面に見られる建物礎石	59

写　真　図　版　目　次

写真図版１　興道寺廃寺第17次調査　１トレンチ全景、北壁土層断面、南壁土層断面
写真図版２　興道寺廃寺第17次調査　１トレンチ西端北壁土層断面、整地面、
整地面断割土層断面、SD170101、SA170101、P170101土層断面、
P170102土層断面、P170103土層断面
写真図版３　興道寺廃寺第18次調査　１トレンチ全景、南半・北半、東壁土層断面
写真図版４　興道寺廃寺第18次調査　１トレンチSZ180101北側、SZ180101-SD1検出状況、
SZ180101-SD1、SZ180101-SD1礫出土状況、SZ180101-SD1土層断面、
SZ180101-SD1断割土層断面
写真図版５　興道寺廃寺第18次調査　１トレンチSK180101・SK180102、
SK180102土層断面・検出状況、SK180102礫・土壁出土状況、SA180101、
P180101土層断面、P180102土層断面
写真図版６　興道寺廃寺第19次調査　１トレンチ全景、北壁土層断面、SZ190101-SD1
写真図版７　興道寺廃寺第19次調査　１トレンチSZ190101-SD1、SZ190101-SD1礫出土状況、
SZ190101-SD1土層断面、SZ190101-SD1断割土層断面、SK190101土層断面、
SK190103土層断面、P190101土層断面、P190102土層断面
写真図版８　興道寺廃寺第19次調査　２トレンチ全景、北壁土層断面、SH190201、
SH190201-SD2、SH190201焼土
写真図版９　高善庵遺跡第２次調査　１トレンチ全景、南半、西壁・南壁土層断面、SE020101、
SE020101土層断面
写真図版10　高善庵遺跡第２次調査　２トレンチ全景、西半・東半、北壁土層断面、
P020204・P020205土層断面
写真図版11　高善庵遺跡第２次調査　３トレンチ全景、西半・東半、南壁土層断面、
SK020301・P020305土層断面、P020301・P020302土層断面、
高善庵遺跡第３次調査地全景
写真図版12　高善庵遺跡第３次調査　１トレンチ全景、西半・東半、南壁土層断面、SA030101、
P030101土層断面、P030102土層断面、P030103土層断面

写真図版13　興道寺遺跡試掘調査　調査前現況、１トレンチ遺構検出状況、東壁土層断面、
２トレンチ遺構検出状況、東壁土層断面、
藤ノ木遺跡試掘調査　９トレンチ土層断面、17トレンチ土層断面
写真図版14　藤ノ木遺跡試掘調査　21トレンチ遺構検出状況、21トレンチ土層断面、
23トレンチ遺構検出状況、28トレンチ遺構検出状況、
中長浜遺跡試掘調査　１トレンチ土層断面、10トレンチ土層断面、
丹生砦跡試掘調査　２トレンチ、６トレンチ
写真図版15　第11図掲載遺物１～21
写真図版16　第11図掲載遺物22～30、第15図掲載遺物１～９、
SK180102出土チャノキ近似種の種子、SK180102出土土壁
写真図版17　第18図掲載遺物１～７、第20図掲載遺物１・２、第25図掲載遺物１～５、
第28図掲載遺物１～７
写真図版18　第30図掲載遺物１～６、第33図掲載遺物１、第37図掲載遺物１～５、
第39図掲載遺物１・３～５
写真図版19　第39図掲載遺物２～12・17・18
写真図版20　第39図掲載遺物14～16・19～22、第43図掲載遺物１～３、
中長浜遺跡１トレンチ灰褐色砂層出土製塩土器

第１章　興道寺廃寺(第 17～19 次調査)

第１節　　興道寺廃寺周辺の地形と土地利用

興道寺廃寺（福井県遺跡番号 30071）は福井県三方郡美浜町興道寺４号観音１番ほかに所在する古代仏教寺院遺跡である。遺跡のおよその中心は、北緯 35 度 35 分 52 秒、東経 135 度 56 分 39 秒。

興道寺廃寺周辺の地理的環境については、『2016 年総括報告』で詳述しているため、本書では概略のみを述べる。

興道寺廃寺が所在する耳川流域は、標高約 40ｍの美浜町野口付近から北に向かって下流域となり、標高約６ｍのあたりまで扇状地性の沖積地が広がっている。一方で、野口から興道寺にかけての左岸の下流域には興道寺面と呼ばれる低位河岸段丘が北に向けて細長く延び、耳川に対して比高差５～10ｍの段丘崖を向けている。この段丘は第四紀堆積物にあたる花崗岩、緑色岩などの砂礫層によって構成され、最上部に約 29,000 年前の広域テフラの AT（姶良 TN 火山灰）が分布する。この低位段丘は美浜町郷市付近でラグーン（潟湖）状の低地面と交差して埋没し、洪水山まで至る。

興道寺廃寺は、この耳川下流域の左岸の低位河岸段丘の上にある。標高約 23～25m付近、興道寺小字渕ノ上・観音のあたりに広がっている段丘東縁の微高地に立地している。遺跡の東側は河岸段丘崖に面し、寺域のすぐ東側は後世の大規模な削平によって段丘崖が浸食され、急峻な崖となっているが、寺域の北東側には元々の段丘地形が残っており、東に向かって緩やかに傾斜し、耳川の扇状地性の沖積地に至っている。寺域のすぐ西側は南北に延びる町道１号に面し、さらに西側には水田が広がっている。寺域の北側は畑地が広がり、また南側にも畑地が広がっていたが、昭和 50 年代前半の圃場整備事業で南側は水田化した。

興道寺廃寺の西方にも河岸段丘の広がりがあり、低地面を挟んで興道寺古墳群が立地する段丘西縁の微高地へと緩やかに続き、西側の段丘崖を経て後背湿地へと至る地形となっている。

興道寺廃寺の現況は基本的には畑地である。第３図、大日本帝国陸地測量部が明治26 年(1893)測図、同 28 年(1895)に製版した地形測量図「三方」を確認すると、遺跡の周囲は水田で、一方で遺跡が所在する部分は空白となっているため、明治時代には遺跡の場所が畑地であったことがうかがえる。また、耳川下流域の左岸における主要幹線道の一つが遺跡のすぐ西側を通過していたこともわかる。

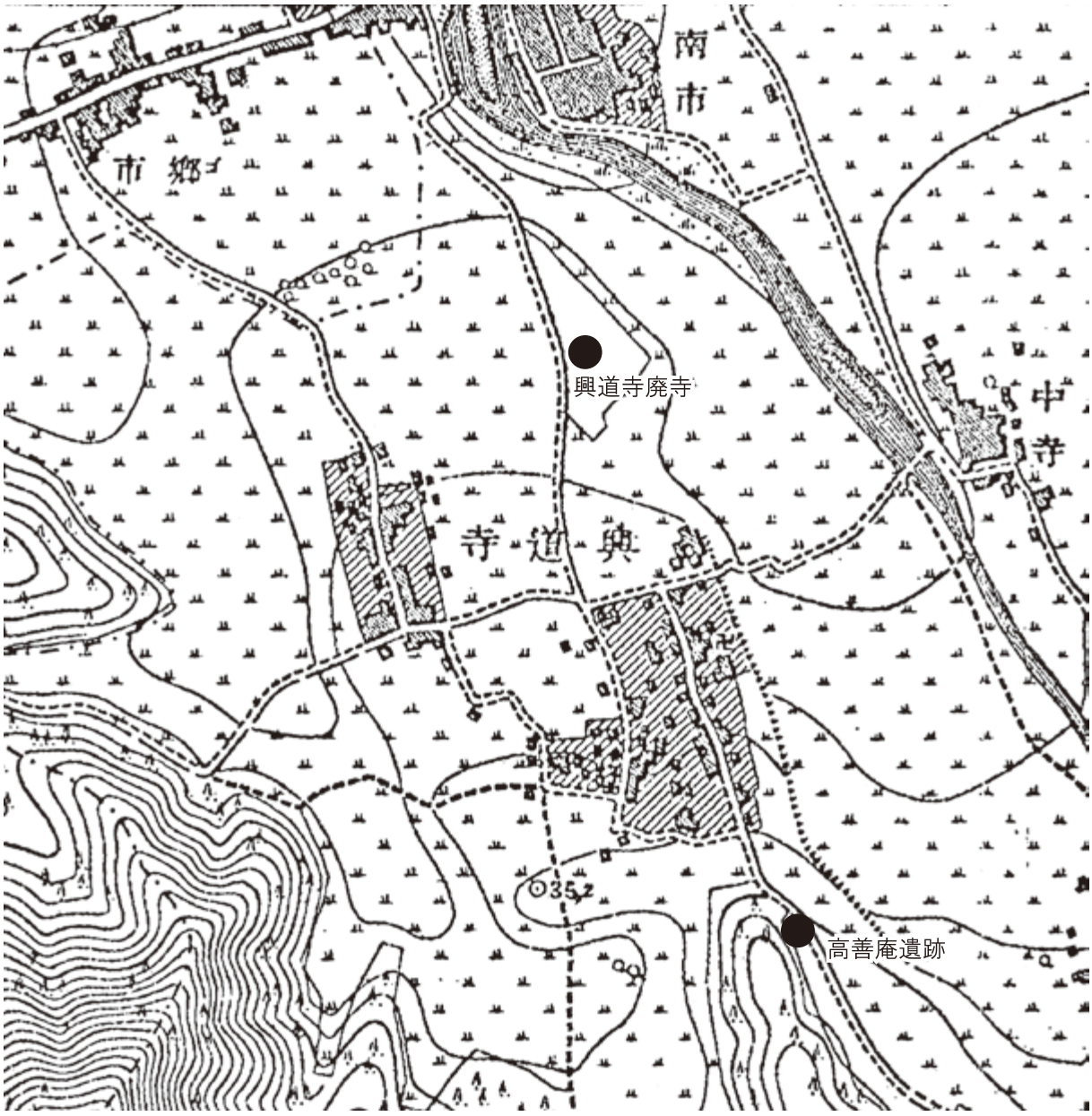
第４図は、平成19 年(2007)冬に興道寺廃寺が所在する畑地の現況を地形測量した際の測量図に広域農道の北側を補足したものである。興道寺廃寺一帯が微高地であるが、南東隅の標高 25m付近が最も標高が高く、北に向かって緩やかに標高が低くなり、21～23m付近で広域農道に至り、さらに北側にも標高 22mほどの微高地が続いている。図中、畑地の南西あたりに道路（町道１号）に面して１軒の住宅が建つが、この建物の東側で中門基壇が確認されており、これより北側に伽藍があり、基壇の微起伏を反映した等高線の乱れが確認できる。標高 24～25m付近に見られる地形の微起伏は金堂や塔などの主要堂塔の建物基壇を反映している可能性が漠然と指摘され、付近一帯は寺院推定地として認識されていたのが、一連の調査に着手する前の状況であった。

第１図　興道寺廃寺周辺地形分類図（縮尺 1/25,000）〔国土地理院発行　数値地図 25000「鳥取」を元に作図〕

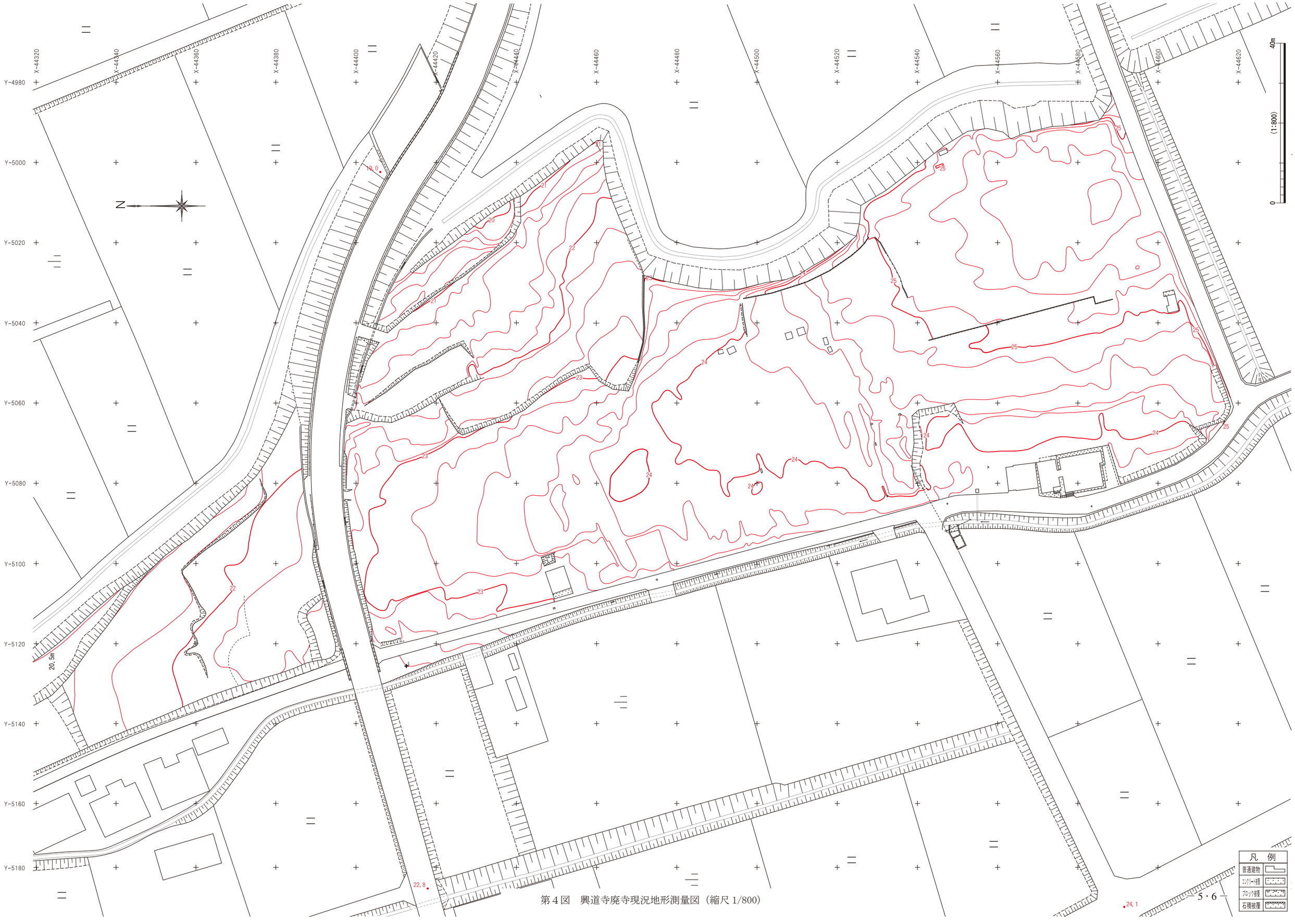
第２図　興道寺廃寺周辺地質分類図（縮尺 1/25,000）〔国土地理院発行　数値地図 25000「鳥取」を元に作図〕

写真１　興道寺廃寺空中写真(南から)

写真２　興道寺廃寺空中写真(北から)



第３図　興道寺廃寺周辺地形図（縮尺 1/10, 000）〔国土地理院　明治 26 年測図・同 28 年製版 1/20, 000 地形図「三方」〕



第４図　興道寺廃寺現況地形測量図（縮尺 1/800）

第２節　　遺跡からみた興道寺廃寺周辺の歴史

遺跡の動向から興道寺廃寺が所在する耳川下流域の歴史的環境を詳述した『2016 年総括報告』を要約して概略を述べる(第５図・第１表)。

旧石器時代から古墳時代前期にかけての興道寺廃寺周辺での遺跡の動向は低調で、南伊夜山遺跡(銅鐸出土地)(24) から弥生中期後半の扁平鈕式六区袈裟襷文銅鐸が１口、寄戸遺跡 (57) から弥生時代と考えられる石剣が１点、不時発見されている〔福井県埋蔵文化財調査センター 2005、廣嶋 1986 など〕。興道寺遺跡 (18) では河岸段丘の縁辺部から弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器が出土している〔福井県埋蔵文化財調査センター 2003、山口 1984 など〕。

古墳時代中期においても興道寺遺跡で土師器甕・椀がわずかに出土するに留まり〔美浜町教育委員会 2003〕、尾根上に５基の墳丘状の盛土が並ぶ木野古墳群 (41)、尾根上に前方後円形の墳丘状の盛土をもつ土井山古墳 (23) が古墳時代前期・中期に伴う古墳の可能性がある。

興道寺遺跡、藤ノ木遺跡 (16) などは古墳時代後期の集落遺跡である。

興道寺遺跡では、興道寺廃寺北方の遺跡北縁部付近を中心に６世紀前半、TK10～TK209 型式並行期の掘立柱建物跡５棟、竪穴建物跡３棟が検出されている〔美浜町教育委員会 2016〕。藤ノ木遺跡は獅子塚古墳の南西に立地し、６世紀前葉、MT15～TK10 型式並行期の竪穴建物跡１棟が断片的に検出され、須恵器杯蓋・甕、浜禰ⅡA 式に類する製塩土器容器などが出土した〔美浜町教育委員会 2003 など〕。

耳川流域での土器製塩の開始は浜禰ⅡA 式の並行期、５世紀後半から６世紀前半頃と考えられ、土器製塩遺跡自体は未発見であるが、内陸部の興道寺遺跡や藤ノ木遺跡から浜禰ⅡA 式に類する製塩土器が出土している。古墳時代後期の土器製塩遺跡として松原遺跡 (11) などがある。松原遺跡は耳川左岸河口部の浜堤に立地し、敷石炉２基、土器溜３か所９基、配石帯１基、土製模造品集中分布域などが検出され、土器溜から須恵器、土師器とともに器壁１㎝前後の厚手の浜禰ⅡB 式新段階に類する丸底で深椀形の製塩土器容器が出土している。７世紀前半、TK209～TK217 型式並行期が主体の時期であり、８世紀前半まで続くものと考えられる〔網谷 1995 など〕。

興道寺窯跡 (27) は耳川流域唯一の古墳時代後期の須恵器窯である。地下式の窖窯１基が検出され、窯床面から７世紀前葉、TK209 型式並行期の杯・杯蓋・高杯・短頸壺などが、灰原から MT15 型式並行期以後の杯・杯蓋・高杯・瑞・甕・提瓶・短頸壺・筒形器台・装飾付台付壺・角杯、円筒埴輪、土錘などが出土している。６世紀前半に開窯し、７世紀前葉まで断続的に操業されたことが判明している〔美浜町教育委員会 1978、入江 1986・2009 など〕。

古墳、古墳群として、獅子塚古墳 (15)、群集墳の興道寺古墳群 (19) などがある。

獅子塚古墳は全長 32.5m、後円部径約 17m、前方部幅約 15m、前方部が西面する前方後円墳で、周濠をもち、墳丘に円筒埴輪を備える。全長 6.0m、玄室長 4.5m、奥壁幅 2.5m、不整形な羽子板状の平面形態を呈し、北部九州に系譜をもつ横穴式石室を埋葬施設にもつ。石室内から MT15 型式並行期の須恵器杯・杯蓋・高杯・瑞・壺・台付子持壺・筒形器台・角杯、装身具の勾玉・管玉・ガラス製小玉、工具の金鉗・鹿角装刀子・鉄斧、武器の鹿角装鉄剣・鉄鏃、武具の盛矢具、馬具の鉄地金銅張の剣菱形杏葉・楕円形鏡板、これ以外にも三環鈴、二条線引手、兵庫鎖、雲珠、鉸具、農具の曲刃鎌が出土した。６世紀前葉の耳川下流域の在地小首長墳と考えられる〔入江 1986・2009 など〕。

獅子塚古墳の北西に長塚古墳 (14) など７基の古墳の存在が伝えられており、獅子塚古墳を盟主墳として南方の興道寺古墳群と同一の古墳群を形成していたものと考えられる。長塚古墳は横穴式石室

を埋葬施設にもち、須恵器杯・高杯・堤瓶・瑞・蓋、勾玉、滑石製紡錘車などが採集されている。６世紀中葉から７世紀前葉、TK10～TK209 型式期の造営である〔入江 2009 など〕。

興道寺古墳群は 10 基以上からなる群集墳で、昭和 50 年代の土地改良事業で周溝を伴う墳丘下部や横穴式石室が複数基発見されており、また近年の発掘調査によって６世紀後葉、TK43 型式並行期の、周溝を伴う円墳２基と小石室を埋葬施設にもつ小円墳１基が検出された〔美浜町教育委員会 2002 など〕。６世紀前葉から７世紀前葉、MT15～TK209 型式並行期の古墳造営が考えられる〔入江 2009〕。

古墳時代後期の祭祀遺跡として松原遺跡がある。７世紀前葉、TK209 型式並行期に土器製塩の場に転用される以前、海上を前面に臨む浜堤上で土製模造品による継続的な祭祀が行われている。土製模造品の分布は、製塩土器が出土した土器溜と一部重複し、その下から鏡、管玉、勾玉、船、釧、容器、短甲など、５世紀後半から６世紀末葉に伴う７器種総数 148 点の模造品が出土した〔網谷 2009 など〕。

耳川下流域の左岸には、古墳時代後期、６・７世紀の集落形成、土器製塩や須恵器生産などの生産部門の掌握、海上祭祀の執行、古墳造営など、流域を支配領域とした在地小首長層の動態の痕跡が色濃く残っており、後の白鳳寺院、興道寺廃寺（21）建立の素地は既に養われていたものと理解できる。

興道寺廃寺周辺の律令期の集落遺跡として、興道寺遺跡、上野遺跡（31）などがある。

興道寺遺跡では興道寺廃寺の北方から北西方にかけて８世紀前半を主体とする竪穴建物跡、掘立柱建物跡などが検出され、須恵器・土師器の食膳具・煮炊具、製塩土器、鉄釘や鉄製紡錘車などの鉄器、鞴羽口や鉄滓などの鍛冶関連遺物などが出土する〔美浜町教育委員会 1998・松葉 2009 など〕。

上野遺跡は８～９世紀の須恵器、土師器、製塩土器が採集され、秋名古遺跡(48)は８世紀中葉の須恵器、９～10 世紀の須恵器、土師器などが採集されている。

耳川下流域の条里地割は『福井県史』の絵図・地図編などで復元されており〔田中・大森 1992、田中 1992〕、耳川下流域の右岸によく残り、北 20 度西の方位を基本として美浜町木野から宮代にかけての沖積地や、東山、麻生、中寺、佐柿などの微高地や自然堤防などに、約 55 町と比較的よく残っている。また、左岸では郷市から松原にかけての低位河岸段丘の末端から浜堤背後のラグーンにかけて約 60 町の地割が残っているが、古代のどの段階にラグーンなどの低地帯を水田として整備したものか、明らかではない。

古代の交通関係施設として弥美駅家がある。弥美駅家は『延喜式』、『和名類聚抄』に記載が見られ、『延喜式』兵部式 81 北陸道条駅伝馬条には、「若狭国駅馬〈弥美。濃飯各五疋。〉」とある。耳川下流域を占める三方郡弥美郷に所在が考えられており、特に歴史地理学研究の立場から郷市の「馬作」「早子」、河原市の「大道ノ下」「駒ヶ田」など駅、駅路をイメージさせる小字地名が遺存することを根拠にこの付近に駅の所在が想定され、旧丹後街道、あるいは国道 27 号の付近に駅路が復元されている〔真柄 1978〕。

しかし、近年、高橋美久二氏は美浜町佐柿の椿峠から木野の南、そして土井山の北端を通過するルートを駅路に想定しており〔高橋 2000〕、美浜町興道寺に見られる「縄手」「南街道」「東街道」「前田」など駅路に関係すると考えられる小字地名に注目して、高橋説よりさらに南方の東西の地方主要道が駅路である可能性を門井直哉氏が指摘した〔門井 2011・2014〕。

興道寺廃寺や興道寺古墳群では13 世紀の遺構、遺物が断片的に確認されている。この時期の掘立柱建物跡２棟、土坑、小穴、旧河道に沿う柱列が検出され、柱穴から土師器皿４枚が積み重なって出土するなど、建物廃棄に伴う地鎮痕跡も確認されている。掘立柱建物の周辺や古墳の周溝内、興道寺廃寺の寺域内の溝から越前焼の甕や土師器皿・甕・鍋などが出土するなど、興道寺古墳群、興道寺廃寺などの古代遺跡は埋没し、集落形成を促したものと推測される〔美浜町教育委員会 2002 など〕。

1 久々子遺跡　2 耳塚遺跡　3 野添遺跡　4 西堂林遺跡　5 口背湖遺跡　6 竜沢寺遺跡　7 硲遺跡　8 坊の谷遺跡　9 大藪古墳群　10 上田遺跡
11 松原遺跡　12 郷市遺跡　13 洪水山前遺跡　14 長塚古墳　15 獅子塚古墳　16 藤ノ木遺跡　17 馬作遺跡　18 興道寺遺跡　19 興道寺古墳群
20 西沢遺跡　21 興道寺廃寺　22 観音遺跡　23 土井山古墳　24 南伊夜山遺跡（銅鐸出土地）　25 土井山砦跡　26 金山八幡神社跡　27 興道寺窯跡
28 高達古墳群　29 谷ノ口遺跡　30 高善庵遺跡　31 上野遺跡　32 殿ノ下遺跡　33 西野遺跡　34 和田弁天台場跡　35 和田台場跡　36 和田古墳群
37 国吉城址　38 粟屋勝久居館跡　39 佐柿奉行所跡　40 佐柿流田遺跡　41 木野古墳群　42 木野神社古墳　43 木野遺跡　44 穴田遺跡
45 町田遺跡　46 茶屋ノ上遺跡　47 麻生砦跡　48 秋名古遺跡　49 麻生古墳群　50 猿橋遺跡　51 末国遺跡　52 麻生流田遺跡　53 七反田遺跡
54 宮代砦跡・宮代中世墓群　55 宮代遺跡　56 五十谷遺跡　57 寄戸遺跡　58 坂尻遺跡

第５図　興道寺廃寺周辺遺跡分布図（縮尺 1/25, 000）〔国土地理院発行　数値地図 25000「鳥取」を元に作図〕

No	遺跡名	種別	時期								遺構・遺物	備考 （指定・現況・文献など）
			弥生	古墳	奈良	平安	鎌倉	室町	戦国	江戸		
1	久々子遺跡	製塩		■	■	■	■	■			須恵器・土師器・製塩土器	
2	耳塚遺跡	経塚									不明	消滅
3	野添遺跡	散布地		■		■					須恵器・土師器	
4	西堂林遺跡	散布地		■	■	■	■	■			須恵器・土師器・陶器	
5	口背湖遺跡	集落跡	■	■	■	■					竪穴住居址、土師器・砥石	一部が町史跡
6	竜沢寺遺跡	集落跡	■	■							竪穴住居址・土坑・小穴、土師器	
7	硲遺跡	散布地		■		■					陶器	
8	坊の谷遺跡	寺院跡									不明	
9	大薮古墳群	古墳		■							金属製遺物か	
10	上田遺跡	散布地		■							土師器	
11	松原遺跡	製塩		■	■						石敷炉・土器溜まり・配石帯 須恵器・土師器・製塩土器・土製模造品	一部消滅
12	郷市遺跡	散布地		■	■	■	■	■			須恵器・土師器	
13	洪水山前遺跡	散布地		■	■	■	■	■			須恵器・土師器・陶器	
14	長塚古墳	古墳		■							円墳(横穴式石室)、須恵器・石製紡錘車	消滅
15	獅子塚古墳	古墳		■							前方後円墳(横穴式石室)、須恵器・鉄器・玉・埴輪	
16	藤ノ木遺跡	集落		■	■	■	■	■			竪穴建物・溝・土坑、須恵器・土師器・製塩土器	
17	馬作遺跡	散布地		■							不明	
18	興道寺遺跡	集落	■	■	■	■	■	■			竪穴建物・掘立柱建物・土坑・溝 須恵器・土師器・製塩土器・鉄器・瓦	
19	興道寺古墳群	古墳群		■							円墳(横穴式石室)、須恵器・土師器・製塩土器・鉄器	10数基の内、２基現存
20	西沢遺跡	散布地		■			■	■			須恵器・土師器	
21	興道寺廃寺	寺院			■	■					基壇・竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑 須恵器・土師器・製塩土器・瓦・塑像・鉄器	大部分が国史跡
22	観音遺跡	散布地		■	■	■	■	■			須恵器・土師器・製塩土器	
23	土井山古墳	古墳		■							前方後円墳か	
24	南伊夜山遺跡	埋納地	■								六区袈裟襷銅鐸	消滅
25	土井山砦跡	城郭							■		曲輪、堀切	一部消滅
26	金山八幡神社跡	寺院跡							■		不明	
27	興道寺窯跡	窯		■							須恵器窯・灰原、須恵器・埴輪・土錘	
28	高達古墳群	古墳群		■							基数・墳形・埋葬施設不明	
29	谷ノ口遺跡	散布地				■					須恵器・製塩土器・陶器	
30	高善庵遺跡	散布地		■	■	■					須恵器・土師器・瓦	
31	上野遺跡	散布地		■	■	■					須恵器・土師器・製塩土器	
32	殿ノ下遺跡	散布地		■	■	■	■	■			須恵器・土師器	
33	西野遺跡	散布地				■	■	■			須恵器・陶器	
34	和田弁天台場跡	台場								■	石積み	
35	和田台場跡	台場								■	土塁・台座	
36	和田古墳群	古墳群		■							横穴式石室	半壊
37	国吉城址	城郭							■	■	本丸・曲輪群・伝二ノ丸(土塁・虎口・堀切) 土師器・陶磁器・石仏・墓石	一部が町史跡
38	粟屋勝久居館跡	城館							■		礎石建物・石垣・虎口・石組水路、陶磁器・土師器・鉄器	一部が町史跡
39	佐柿奉行所跡	城館							■		礎石・石垣・石組水路・敷石・土塀、瓦・土師器・陶磁器	
40	佐柿流田遺跡	散布地				■	■	■			須恵器・製塩土器・陶器	
41	木野古墳群	古墳群		■							墳丘状盛土	
42	木野神社古墳群	古墳群		■							円墳(横穴式石室)	
43	木野遺跡	散布地		■	■	■	■	■			須恵器・土師器・製塩土器・陶器・鉄器	
44	穴田遺跡	散布地				■	■	■			須恵器・土師器・陶器	
45	町田遺跡	散布地					■	■			土師器	
46	茶屋ノ上遺跡	散布地		■			■	■			須恵器・土師器・製塩土器	
47	麻生砦跡	城郭							■		不明	
48	秋名古遺跡	散布地	■	■	■		■	■			弥生土器・須恵器・土師器・製塩土器・陶器	
49	麻生古墳群	伝承地		■							不明	全壊
50	猿橋遺跡	不明		■	■		■	■			須恵器・土師器・陶器	
51	末国遺跡	散布地		■			■	■			須恵器・土師器・陶器	
52	麻生流田遺跡	散布地		■	■	■	■	■			須恵器・土師器・陶器・土錘	
53	七反田遺跡	散布地		■			■	■			須恵器・土師器・陶器・土錘	
54	宮代砦跡 宮代中世墓群	城郭 墓地							■		帯曲輪群・竪堀・土塁・虎口 五輪塔・石仏・宝篋印塔	
55	宮代遺跡	散布地		■		■	■	■			須恵器・土師器・陶器	
56	五十谷遺跡	散布地				■					須恵器・土師器	
57	寄戸遺跡	出土地	■								石剣	
58	坂尻遺跡	散布地		■	■						不明	

第１表　興道寺廃寺周辺遺跡一覧

第３節　　調査に至る経緯と経過

第１項　　興道寺廃寺発掘調査の経緯と経過

興道寺廃寺における発掘調査の主な要因は、平成９年(1997)以後に興道寺廃寺の北方、北西方で開発事業が増加したことによる。特に遺跡北縁部で記録保存のための発掘調査や開発計画に伴う事前の試掘調査が美浜町教育委員会､福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによって継続的に行われており、これらの開発事業が興道寺廃寺にまで及ぶ可能性が予見された。このため、平成 14 年度(2002)、美浜町教育委員会は内容確認のための発掘調査に着手し、平成 26 年度(2014)の第 16 次調査まで、13 年におよぶ発掘調査を実施した。第 17～19 次調査地の位置と併せて、第６図にこれまでの調査区を示す。

これらの調査の概要については『2016 年総括報告』で詳述したが、第１期調査は平成 14～18 年度(2002～2006)の５年間における第８次までの調査が該当し、金堂、塔、中門の基壇を部分的に検出し、古代寺院の存在が明らかとなった。平成 19～23 年度(2007～2011)の５年間における第 13 次までの調査が第２期調査にあたり、伽藍域がほぼ明らかとなり、伽藍の寺院建物の時期別変遷が一定程度把握された。第３期調査は平成 24～26 年度(2012～2014)の３年間、第 16 次までの調査が該当し、寺域がほぼ明らかとなった。

本章で報告する調査は第４期調査に該当し、寺域外、特に寺院北方の様相確認を行うことを目的として、平成 28～30 年度(2016～2018)の３年間で第19 次までの調査を実施した。なお、調査地点は寺域外であり、厳密には興道寺廃寺の発掘調査とは言えないが、一連の調査の経緯を考慮し、興道寺廃寺第 17～19 次調査と位置付けた。第 17・18 次調査に関しては、興道寺廃寺等調査指導委員会に調査指導を仰いでおり、栄原永遠男、菱田哲郎、門井直哉、渡辺丈彦（以上、学識者)、宮邊邦明、澤田政一、西島健、一瀬繁紘（以上、地元住民)、中川佳三、中原義史（以上、行政）の各氏にご指導を賜っている。第19 次調査については、同委員会が解散しているため(平成 30 年度(2018)より史跡興道寺廃寺跡保存活用計画策定委員会に移行)、学識者による特段の調査指導は受けていない。

発掘調査では、土地所有者、関係者である髙城勲、髙城トキ子、高橋文代、畑中徳二の各氏のご理解、ご協力を賜った。

第２項　　興道寺廃寺における既往の調査研究

興道寺廃寺に関するこれまでの調査研究史は『2016 年総括報告』で詳述しているので、それ以後の調査研究について以下に箇条書きし、簡潔に記す。

- 三舟隆之「古代地方寺院の造営計画・技術の伝播　―伽藍配置を中心に―」『考古学ジャーナル』705　古代寺院の調査と研究　2017　ニューサイエンス社
- 三舟隆之、堂野前彰子、中村友一、宮﨑雅充、松葉竜司共著『美浜町歴史シンポジウム記録集 12 耳別氏、若狭に起つ　～若狭の古代豪族、耳別氏を考える～』　2018　美浜町教育委員会
- 松葉竜司「第６回企画展解説パンフレット　素描、興道寺廃寺跡　～山を越え、もたらされた古代仏教～」　2018　美浜町歴史文化館
- 三舟隆之、渡辺丈彦、門井直哉、梶原義実、海野聡、中野知幸、腰地孝大、松葉竜司共著『美浜町歴史シンポジウム記録集 13　復元！興道寺廃寺をとりまく景色　～古代寺院の景観を考える～』　2019　美浜町教育委員会
- 松葉竜司「古代若狭における寺院造営の一様相　―興道寺廃寺を中心―」『古代寺院史の研究』菱田哲郎・吉川真司編　2019　思文閣出版

第３項　　興道寺廃寺の国史跡への指定と遺跡の活用

平成 28 年(2016) ３月に『2016 年総括報告』を刊行したことで、興道寺廃寺の国史跡への指定に向けた学術的価値を明らかにする根拠資料が整った。このため、美浜町教育委員会は平成 28 年４月より興道寺廃寺の国史跡への指定を目指して土地所有者からの指定同意の取得、意見具申書の作成等の具体的な事務に取り掛かった。指定予定地の土地所有者が多く、また関係者も多岐にわたっていたため、長年、指定同意事務が停滞していたが、平成 28・29 年度(2016・2017)に専門員が配置されたことで、土地所有者等の指定同意の取得が大きく前進し、平成 29 年７月 25 日に意見具申書を提出するにあたり、同意取得率が 100%に達した。

平成29 年11 月 17 日に国文化審議会は文部科学大臣に「興道寺廃寺跡」を国史跡に指定するよう答申し、平成 30 年(2018) ２月 13 日、文部科学大臣が興道寺廃寺跡を国史跡に指定したことが官報告示された。同７月 30 日には美浜町が史跡の保存管理団体に指定されている。

興道寺廃寺が「史跡興道寺廃寺跡」として国史跡に指定され、保存管理団体に指定されたことを受け、美浜町教育委員会は保存活用計画の策定に取り掛かった。平成 30 年８月 24 日に学識者、地域住民などからなる興道寺廃寺跡保存活用計画策定委員会を設置し、令和元年度にかけて計４回の会議を行い、保存活用計画の審議を進め、令和２年(2020) ３月に保存活用計画書として刊行される予定である。

なお、平成 28 年４月に美浜町歴史文化館が開館し、町の歴史を網羅的に扱う郷土資料館として運営されている。展示室の導入部分は興道寺廃寺の紹介コーナーとなっており、既往の発掘調査で出土した多くの資料が展示されるなど、遺跡のガイダンス施設としても活用が図られている。

第４節　　発掘調査の方法

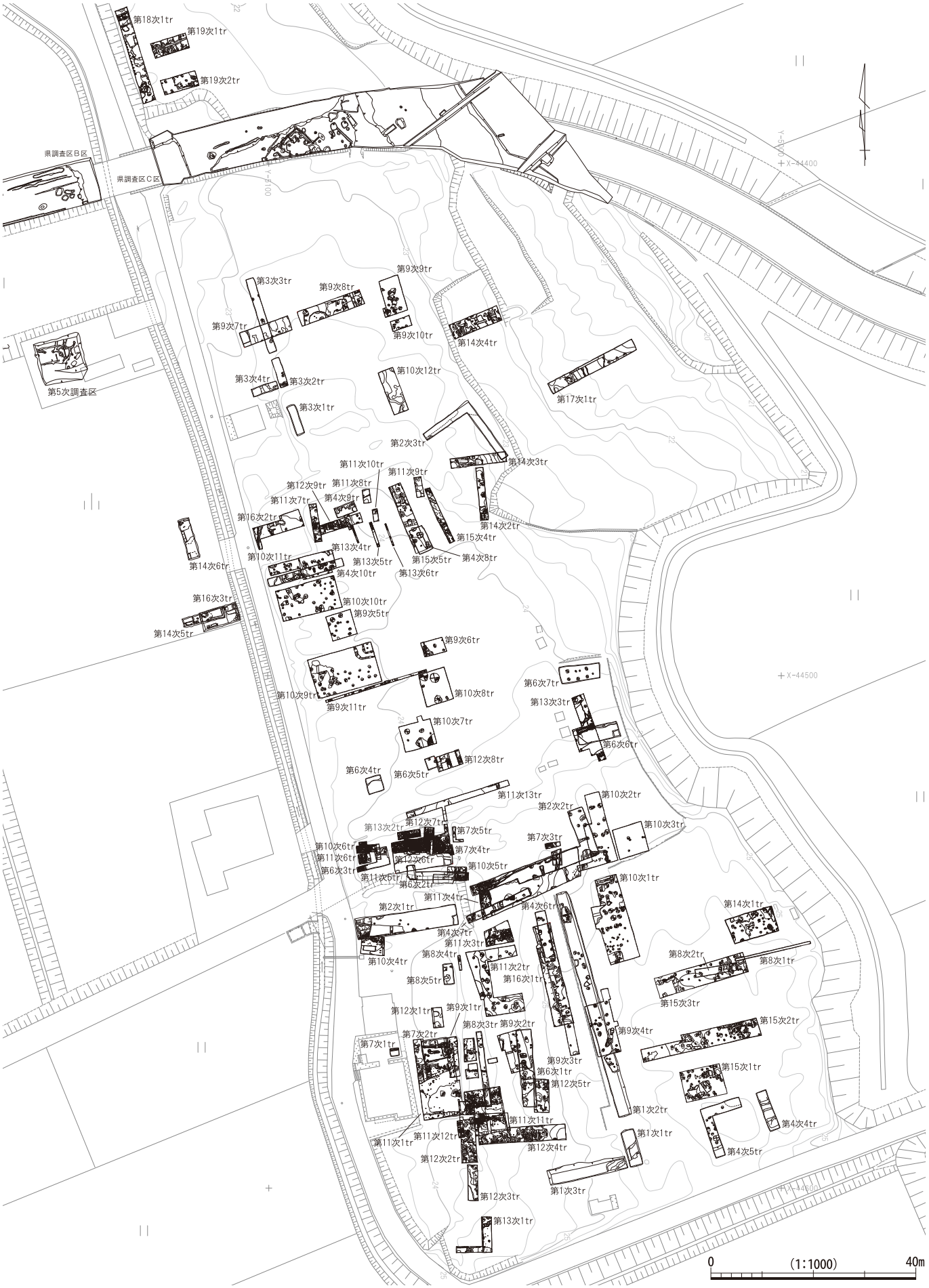
第１項　　現地調査の方法、遺構番号の割り付け

興道寺廃寺における一連の調査で、遺構深度が浅い場合は畑地の耕作土にあたる表土を除去した段階で地山面で遺構が検出され、黒褐色系の堆積土をもつ場合でもその直下の地山面で遺構が検出されることが明らかであった。このため、基本的には表土のある程度の深さまでは重機による表土掘削を慎重に行い、堆積層や地山面の直上からは人力による掘削、精査を行った。

調査区の設定は、畑地の地割に影響され、トレンチ調査を基本としたが、ある程度は東西、南北軸を意識したトレンチ設定を行った。遺構の性格、構築および廃絶年代を把握するために必要最小限度の断ち割りを行った場合もある。調査の性質上、将来へ遺構を残すことを考慮し、柱穴・小穴などの小規模遺構の掘削は半裁に留め、土坑、溝などもセクションベルトなどとして未掘部分を設けた。

調査終了時のトレンチの埋め戻しは、後の畑地での耕作に影響が出ないように、地山面、遺構検出面などの掘削で発生した土砂を下位にそのまま戻し、耕土が最上位となるよう配慮した。

遺構平面図、遺物等出土状況平面図、遺構土層断面図、トレンチ土層断面図など調査図面の作成については、調査担当者と作業員が協力して進めた。トレンチ内の遺構検出面に杭を直線状に複数本設定し、それを図根点として遣り方測量を基本として、一部は平板測量を併用して原則として 1/20 の縮尺で平面図を作成した。遺物等出土状況図の作成においては 1/10、1/20 の縮尺を併用し、土層断面図は 1/20 の縮尺で図面を作成した。なお、世界測地系に基づく３級基準点、４級基準点が遺跡内外に 10 点ほど設置されているため、調査で作成した平面図の図根点に座標を割り付け、測量平面図に合成



第６図　興道寺廃寺発掘調査位置図（縮尺 1/1, 000）

している。

写真は、記録用として35㎜一眼レフデジタルカメラを使用して撮影した。基本的にはトレンチごとに、遺構の検出段階、遺構の掘削（半裁）段階、調査の最終段階で全体の写真撮影を行い、必要に応じて、個別遺構の詳細写真、遺構の土層断面、遺物等出土状況の写真撮影を行った。

遺構の記号として、古墳…SZ、竪穴建物跡…SH、柱穴列…SA、土坑…SK、溝…SD、柱穴・小穴…Pなど、遺構種別ごとにそれぞれ略号を付した。本書収録の遺構図などは基本的に略号で表示した。

遺構番号は、調査図面には現地調査時に検出順に遺構番号を付しているが、『2012 年報告』刊行時に第１次調査から第 13 次調査までの全ての調査に関して遺構番号が振り直され、調査次数の２桁＋トレンチ番号＋遺構番号という６桁の遺構番号の表示とすることとしたため、本章での報告においてもこれに基づく。

第２項　　調査の手続き、遺跡名の呼び分け

文化財保護法に関する手続きについて、それぞれの調査の実施にあたっては文化財保護法第 99 条の規定に基づき、関係書類を添えて埋蔵文化財発掘調査通知書を福井県教育委員会に提出した上で調査に着手した。調査終了後は、遺失物法第 13 条の規定により敦賀警察署長に対して埋蔵文化財発見届を速やかに提出するとともに、福井県文化財保護条例第 57 条の２第１項の規定により福井県教育委員会に対して埋蔵文化財保管証を提出した。福井県教育委員会から敦賀警察署長に対する文化財認定を経た後、随時、福井県教育委員会から埋蔵文化財の譲与を受けている。

『福井県遺跡地図』では周知の埋蔵文化財包蔵地「興道寺廃寺」として収録され、周知が図られているが、国史跡としての名称は「興道寺廃寺跡」であるため、国史跡の指定地を指す場合は興道寺廃寺跡、遺跡名としては興道寺廃寺と呼び分けている。本書では興道寺廃寺で統一しているため、了知されたい。

第３項　　整理作業の方法と発掘調査報告書の作成

例言で示したように、興道寺廃寺における一連の発掘調査については、『2003 年報告』、『2007 年報告』、『2012 年報告』、『2016 年総括報告』において報告されている。このため、本書では既刊の発掘調査報告書と重複する記述は極力避け、第 17～19 次調査の調査内容が反映されるよう発掘調査報告書の作成を進めた。興道寺廃寺の調査、成果、評価に関する内容は現時点で『2016 年総括報告』以後、訂正事項はない。

第 17～19 次調査の整理作業は、福井県三方郡美浜町河原市８－８の美浜町歴史文化館で実施した。第17 次調査以後の各次調査終了後、出土遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測、採拓の諸作業を随時進め、令和元年度の発掘調査報告書の作成に備えた。

遺物の観察、実測図・拓影の収録にあたっては、以下のとおりとした。

・瓦の報告に際して、「横ナデ」としたものは側縁間の方向にナデ調整を施すもの、「縦ナデ」としたものは狭端と広端の方向にナデ調整を施すものを示し、同様に瓦の凸面叩き調整に関して側縁部に平行、直交して施すものは「直交する」ものとし、側縁部に対して斜めに施すものは「斜交する」ものと記述した。また、瓦の側面、側縁、狭端・広端面の調整については煩雑になるため本文では逐一触れていない。遺物観察表を参照されたい。

・瓦の報告にあたっては、『2012 年報告』までの収録実測図・拓影は縮尺 1/6 を基本としたが、本報告では実測図・拓影は 1/3 の縮尺とした。

・土器、その他の遺物のうち破片資料は、口径、器形復元が可能な資料を極力抽出し、図化した。また、細片資料であっても遺構の構築および廃絶年代を示すと思われる資料についても極力図化した。なお、表土出土遺物については原則、図化を行っていない。なお、これらの出土点数には同一個体を構成すると考えられるものを含んでいるが、接合関係にあるものは接合後の状態で、また肉眼観察上、明らかに同一個体と考えられるものはそれらを一括して１点とカウントした。
・土器、金属製遺物、動物遺物（骨片）の実測図、拓影は 1/3 の縮尺とした。
・第 17 次調査１トレンチ出土の鉄片（第 11 図収録の 29)、第 18 次調査１トレンチ出土の鉄製遺物（第 15 図収録の６）の実測図は、後述の保存処理業務を実施した株式会社イビソク福井営業所において作成したものを使用した。また、第 18 次調査１トレンチ出土の植物性遺物についても同社によって示された観察所見、樹種同定結果を本書に収録した。
・第 18 次調査１トレンチ出土の動物遺物（骨片）の観察所見については、独立行政法人奈良文化財研究所　埋蔵文化財センター主任研究員、山崎健氏にご教示を賜り、本書に収録した。

発掘調査で出土した上記の金属製遺物、植物性遺物は、美浜町事業として専門業者である株式会社イビソク福井営業所に委託の上、随時、保存処理業務を行っている。

本書を作成するにあたり、遺構・遺物の製図（トレース図）および遺構・遺物などの図版作成は Adobe 社　Illustrator. ver10 を使用し、デジタルデータとして作成した。

なお、以上の整理作業の方法と発掘調査報告書の作成については、次章で述べる高善庵遺跡についても同様であり、次章では再述しない。

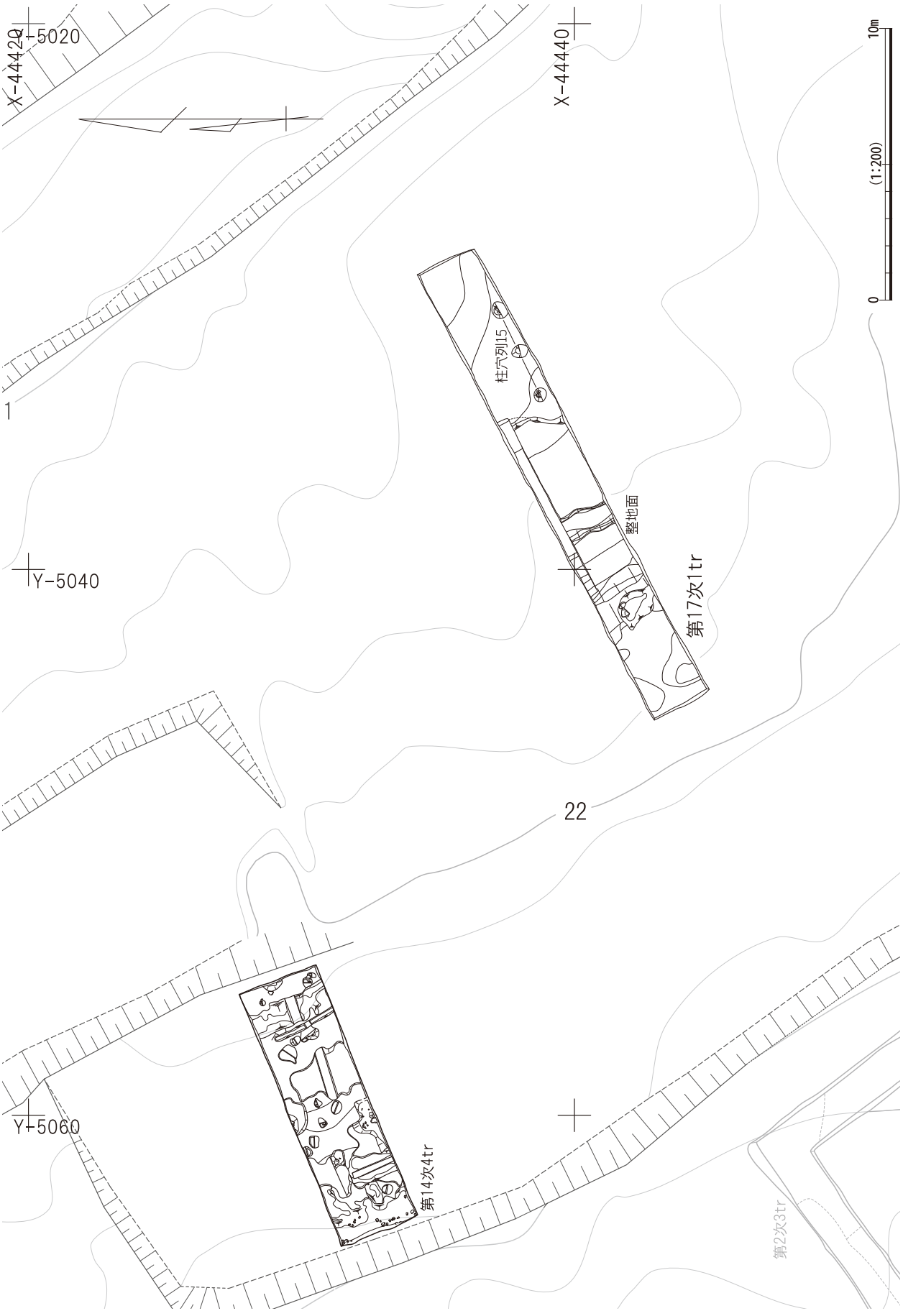
第５節　　興道寺廃寺第４期調査（第 17～19 次調査）の概要

第 16 次調査を終え、興道寺廃寺の寺域、伽藍域についてはある程度、その様相が明らかになった一方で、寺域外の様相は不明な点も多く、平成 28～30 年度（2016～2018）までの間、興道寺廃寺の寺域外の様相を確認し、寺院との関係性を明らかにすることを目的として、寺域外の北方における発掘調査を興道寺廃寺の第４期調査として位置づけ、継続的な内容確認調査を計画した。

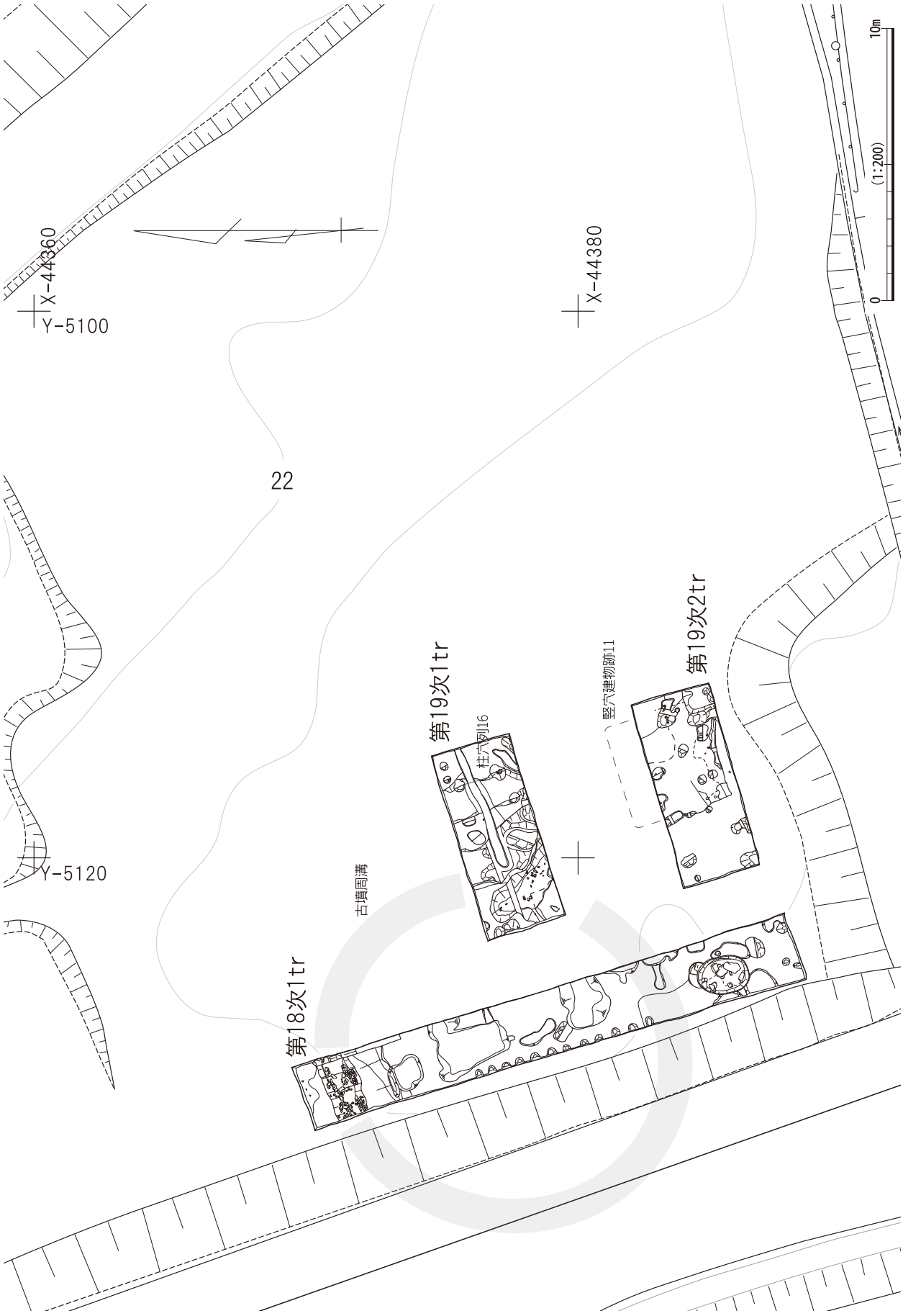
第 17 次調査では美浜町興道寺４号観音 24 番に１か所のトレンチを設定し、平成 29 年（2017）２月７日から同３月 14 日まで面積 42. 2 ㎡の発掘調査を行った。第 18 次調査は美浜町興道寺３号狐塚 31 番に１か所のトレンチを設定し、平成 30 年１月 31 日から同３月 23 日まで面積約 46. 2 ㎡の発掘調査を行った。また、第 19 次調査は美浜町興道寺３号狐塚 31 番に２か所のトレンチを設定し、平成 30 年 10 月 16 日から同 12 月 13 日まで面積 41. 7 ㎡（１トレンチ 21. 0 ㎡、２トレンチ 20. 7 ㎡）の発掘調査を行った。

第 17～19 次調査の調査面積は 130. 1 ㎡である。第１～16 次調査の面積が 2, 201. 6 ㎡であり、合算して約 2, 331. 7 ㎡の調査面積となる。第７図に第 17 次調査地周辺の、第８図に第 18・19 次調査地周辺の検出遺構平面図を縮尺 1/200 で示した。

なお、第１次調査から第 16 次調査の内容、成果と課題については、『2016 年総括報告』に詳述している。



第７図　興道寺廃寺第 17 次調査トレンチ配置図（縮尺 1/200）



第８図　興道寺廃寺第 18・19 次調査トレンチ配置図（縮尺 1/200）

第６節　　興道寺廃寺第 17 次調査

第１項　　興道寺廃寺第 17 次調査の目的

これまでの調査が寺域内に偏っていたため、寺域外の様相に関しては不明なことが多い。興道寺廃寺外の北方エリアのうち、寺域北限に隣接するあたりでは７～８世紀の竪穴建物跡なども検出されていたが、寺院との関係性は明らかではなかった。また、興道寺廃寺が所在する河岸段丘東縁の微高地は段丘崖に沿って大幅な削平を受けている一方で、第17 次調査地付近、遺跡の北東側では元々の河岸段丘縁辺の旧地形が現存しており、東に向けて緩やかに傾斜している。この段丘崖の付近では広域農道の敷設に伴う福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによる発掘調査が行われており、多くの遺物を包含する厚い堆積層と砂礫土からなる地山層が検出されているが、それ以外に遺跡の様相ははっきりしない。

このため、第17 次調査は①旧地形の把握、②遺構・遺物の存否および様相確認を目的として調査を行った。

①について、調査地の付近では畑地の造成によって段々の地形となるなど、一部に地形の改変も認められるが、東側に流れる耳川に向かって緩やかに標高が低くなるなど、段丘崖の元来の地形が比較的よく残っている。当時の旧地形を把握することで、寺院造営主体や経営主体の土地利用のあり方の一端を明らかにすることを目指した。

②については、今回の調査地の西側、標高が一段高い場所で一部、発掘調査が行われており（第14 次調査４トレンチ)、古墳時代の遺構、遺物が検出されている一方で、奈良・平安時代の遺構、遺物は希薄であった。さらに標高が低くなる段丘崖付近での遺構・遺物の存否、様相を確認することで、寺院造営主体や経営主体の存否を確認し、また例えば旧耳川の河道に接続するような護岸遺構といった物資運搬施設の存否などを確認することで、寺院と附属集落との関係性の一端を明らかにすることを目指した。

第２項　　第 17 次調査１トレンチの調査（第９～11 図）

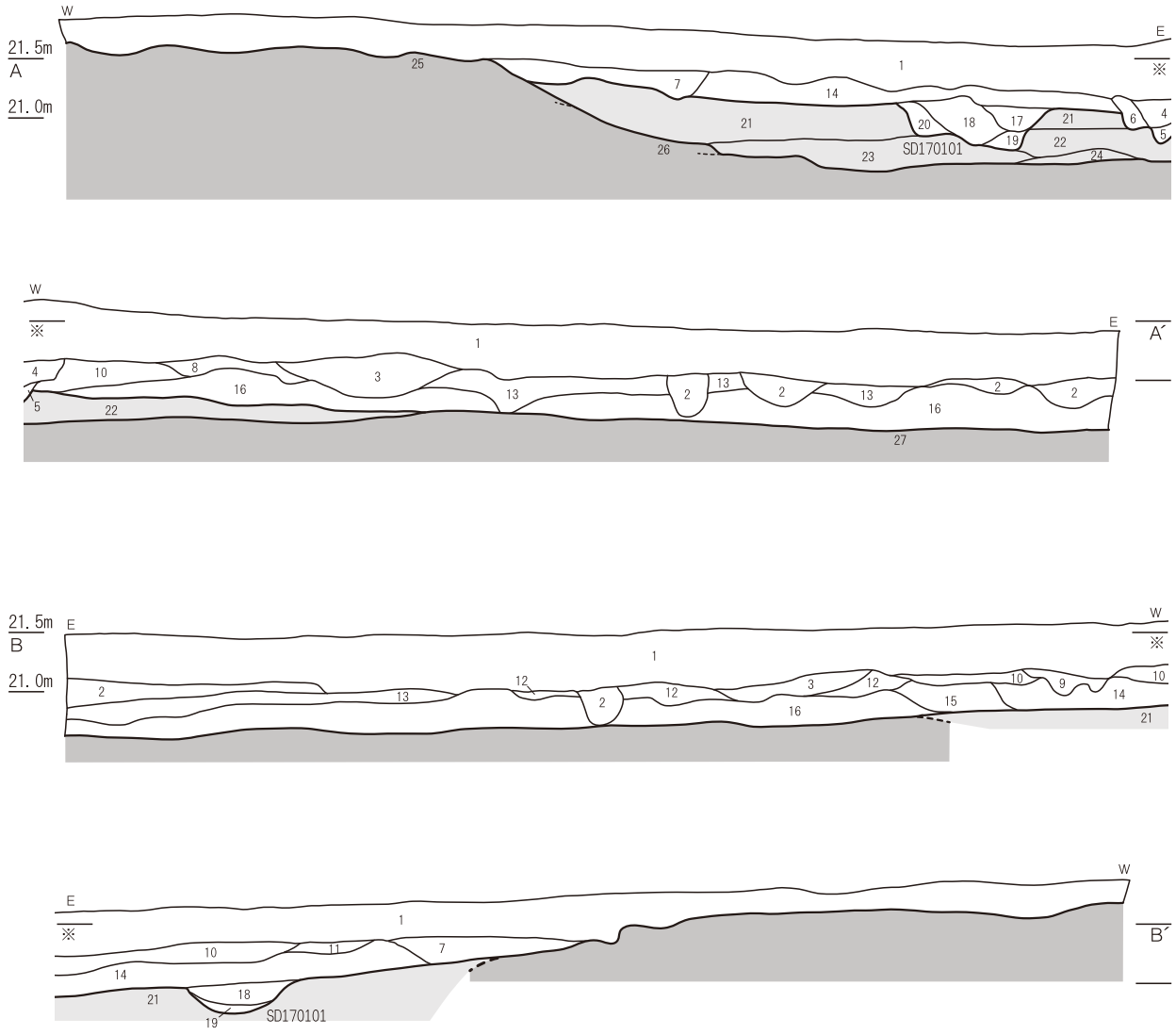
（１）基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 21.38～21.88ｍである。興道寺廃寺が所在する段丘の高位面から二段ほど低くなる地形であるが、調査地から東に向かっては緩やかに傾斜する。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚 0.2～0.5m）下、トレンチの西端では標高 21.7m付近で地山面となる褐色砂礫土層の上面に、トレンチの東端では標高 20.55m付近で地山面の暗褐色土の上面に至る。

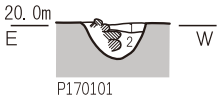
トレンチの東側 2/3 には表土下に黒褐色土（層厚 0.2mほど）からなる近世の堆積層、黒色土・黒褐色土（層厚 0.2～0.3m）からなる中世の堆積層が順に上から分布する。近世堆積層の黒褐色土層から須恵器杯蓋片５点（第 11 図５・８）・杯類の破片３点・皿（灯明皿）片１点・高杯脚部片２点（同６）・甕片９点（同７）・瓶片２点・須恵器の細片２点、土師器甕片 17 点、製塩土器片５点、土錘１点（同９)、丸瓦片１点（同 10)、中世の土師器皿片１点、近世以後の陶磁器細片２点が出土した。また、中世堆積層の黒色土・黒褐色土層からは弥生土器片２点、須恵器杯蓋片 35 点（同 11～15)・杯片６点（同 16)・杯類の破片３点・杯Ｂ蓋片２点（同 17)・椀片１点（同 18)・甕片 22 点（同 19・20)・壺類の破片１点・瓶片１点・須恵器の細片６点、土師器甕片 132 点（同 21・22)、製塩土器片 66 点、平瓦片１点(同 23)、中世の土師器皿片 12 点（同 24～28）が出土した。

第９図　興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ遺構平面図（縮尺 1/60）

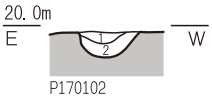


1　黒褐色土 10YR2/2
2　黒褐色土 10YR2/2（径1cmまでの礫含む）
3　暗褐色土 10YR3/3（径10cmまでの礫少し含む）
4　黒褐色土 10YR3/2
5　黒色土 10YR2/1（黒褐色土混じる）
6　黒褐色土 10YR2/2（地山土混じる）
7　黒褐色土 10YR2/2（茶根の撹乱）
8　黒色土 10YR2/1（地山土小ブロック混じる）
9　黒褐色土 10YR2/3（径5cmまでの礫含む、あまり締まりなし）
10　黒褐色土 10YR2/2（あまり締まりなし）
11　黒褐色土 10YR2/2（地山土小ブロック混じる）
12　黒褐色土 10YR2/2（径1cmまでの礫含む）
13　黒褐色土 10YR2/3（径10cmまでの礫やや含む）
14　黒色土 10YR2/1（地山土小ブロック混じる）
15　黒褐色土 10YR2/2（径1cmまでの礫含む）
16　黒色土 10YR2/1（土器多く含む）
17　黒褐色土 10YR2/2（地山土混じる）
18　黒色土 10YR2/1（地山土小ブロック混じる）
19　黒褐色土 10YR2/2（地山土細ブロック混じる）
20　黒褐色土 10YR2/2
21　黒褐色土 10YR2/2（地山土が部分的に混じる）
22　黒色土 10YR1.7/1（地山土混じる）
23　黒色土 10YR1.7/1（地山土細ブロック混じる）
24　黒色土 10YR1.7/1（径3cmまでの礫含む）
25　褐色砂礫土 10YR4/4（径20cmまでの礫含む）
26　暗褐色土 10YR3/3（砂質）
27　暗褐色土 10YR3/3（径20cmまでの礫多く含む）

1・2　耕作土
2～8　撹乱
9～12　近世堆積層
13～16　中世堆積層
17～20　SD170101埋土
21～24　古代の整地層
25～27　地山土



1　黒色土 10YR2/1
2　黒褐色土 10YR2/2
（径20cmまでの礫含む）



1　黒色土 10YR2/1
2　黒褐色土 10YR2/2
（径2cmまでの礫多く含む）

1　黒褐色土 10YR2/2
（径2cmまでの礫多く含む）

古代の整地層
地山層
0　(1:60)　2m

第 10 図　興道寺廃寺第 17 次調査 1 トレンチ遺構土層断面図（縮尺 1/60）

トレンチの東側 1/3 では中世の堆積層の下で地山層の上面に至るが、トレンチの中央付近ではこの堆積層の下に黒色土からなる古代の整地層（層厚 0.4～0.5m）が認められ、その下で地山層の上面に至る。

地山面は東に向かって大きく傾斜し、１m以上の比高差をもつが、これは古墳時代後期の段階に地山面を人為的に削平し、平坦面を造り出していることに起因する。

調査区の排土から須恵器杯類の破片２点・高杯脚部片１点（第 11 図１）・甕片３点・須恵器の細片３点、土師器甕片１点、陶磁器細片３点が出土した。

（２）検出遺構の概要

地山面で柱穴３基（P170101～P170103）で構成する柱穴列（SA170101）１基、古代の整地層、この整地層の上面から掘り込まれた溝１条（SD170101）を検出した。トレンチの西側では耕作などに伴う撹乱６基が確認され、地山面や近世の堆積層の上面に掘り込まれている。これらの攪乱土から破片で須恵器杯２点（第 11 図２・３）・杯類３点・壺１点（同４）・甕１点、土師器甕２点、製塩土器５点が出土。また、近世堆積層の上面から掘り込まれた撹乱溝からは破片で須恵器杯１点・杯類１点、土師器甕３点、製塩土器６点、緑釉陶器皿１点が出土した。

（３）整地面

トレンチの中央付近、地山面の上に東西約 6.6mの範囲において盛土を施す整地層を検出した。南北の広がりは不明。整地層は 0.4～0.5mほどの厚みをもち、東に向かって傾斜する。整地土は地山土や小礫が混じる黒色土・黒褐色土で、ある程度水平に盛土されている。整地土には地山土の細ブロックや微細遺物が混じる。整地層の上面で須恵器杯Ｂ蓋１点（第 11 図 30）が破片で出土した。

トレンチの北壁に沿って整地層を断ち割ったところ、この整地層の下部に地山層を人為的に削平し、西からの地山面を急激に傾斜させ、平坦面を造り出して東側に広がる様相を確認した。ただし、この地山層に対する削平痕跡は整地層に先行するものと考えられ、トレンチの東端付近で検出された柱穴列 SA170101 との関連が強いものと考えられる。整地層の上面で出土した須恵器杯Ｂ蓋のおよその年代から、８世紀後半以後に盛土による整地が施されたものと考えられる。

（４）溝

SD170101 は南北に延びる。古代の整地層の上面から掘り込まれており、平面形態は不定形で、南北検出長 2.15m、東西 0.92m、深さ 0.28m。断面形状は弧状をなし、底面まで浅い。黒色土・黒褐色土を埋土にもち、地山土の細ブロックが混じる。埋土から土師器甕片２点、鉄滓と考えられる鉄片（第 11 図 29）が出土した。

（５）柱穴列

柱穴列１基（SA170101）を検出した。P170101～P170103 の３基の柱穴が東西に並んで柱穴列を構成し、いずれも調査地東端付近の地山面で検出された。東側では P170103 の柱穴の続きが検出されず、西側に関しても整地層の一部を断ち割って確認したが、同様に P170101 の西側に柱穴の延長は認められなかった。ただし、調査地外を含めて南北棟の掘立柱建物跡の一部を構成している可能性はある。

P170101 の柱穴掘り方に柱固めの礫が含まれ、P170103 の底面に根固め石の可能性がある礫が認められる。SA170101 の柱筋の柱間は 1.8m前後、柱穴の掘り方の径は 0.5mほどである。底面まで浅く、

断面形状は弧状をなす。底面の標高は 20.5m前後にあり、それぞれが若干の高低差をもつ。P170102の埋土から須恵器杯Hの底部または杯H蓋の天井部と考えられる破片が出土しているので、８世紀には降らない時期の遺構と考えられる。

（６）柱穴・小穴

P170101～P170103 の３基の柱穴は柱穴列 SA170101 を構成する。

P170101 の平面形態は円形で、南北 0.50m、東西 0.50m、深さ 0.29m。断面形状は半円形。掘り方の部分に拳大の礫が密にみられ、柱の柱固めの石の一部と考えられる。P170102 の平面形態は楕円形で、南北検出長 0.62m、東西 0.48m、深さ 0.20m。断面形状は半円形。埋土から須恵器杯類１点、製塩土器２点が破片で出土した。P170103 の平面形態は楕円形で、南北検出長 0.54m、東西 0.67m、深さ 0.09m。断面形状は弧状をなす。

（７）出土遺物

第 11 図１は調査区排土、２～４は表土下の撹乱土から出土した。

１は須恵器高杯の脚部。脚端部の復元径は 8.5 ㎝で、脚端部は下方に鈍く折り返す。脚部の内外面に自然釉が付着する。２・３は須恵器杯H。２の復元口径は 13.1 ㎝。口縁部は内上方に弯曲し、端部を丸く収める。受部は水平に短く作る。底部は浅く、外面にヘラ削りを施す。３の復元口径は 13.6 ㎝。口縁部は内上方に短く立ち上がり、口縁端部と受部は鋭く収める。底部外面は回転ヘラ削りの後、ヘラ切りを施す。４は須恵器壺。体部外面に回転ヘラ削りを施し、肩部にカキメを残す。体部の上半には自然釉が付着する。

同５～10 は近世の堆積層から出土した。

５は須恵器杯H蓋。復元口径は 12.2 ㎝。天井部は平らで、口縁部は下外方に強く屈曲し、端部を鋭く収める。天井部外面は摩耗のため成形ははっきりしないが、口縁部外面から内面にかけて横ナデを施す。６は高杯の脚部。脚端部の復元径は 9.7 ㎝。脚部はまっすぐ立ち、脚端部は外方に張り出す。脚部外面にカキメを施す。７は須恵器甕の口縁部。復元口径は 18.9 ㎝。口縁部は外反し、口縁端部は肥厚する。口縁部の外面にカキメを施す。８は須恵器杯Ｂ。口縁部は上方にまっすぐ立ち上がり、高台は外方に張り出す。９は土錘。長さ 7.8 ㎝、最大幅 2.7 ㎝の大型品で、表面にヘラ状工具によるナデのような痕跡が残り、外面の一部に煤が付着する。10 は無段式丸瓦。凸面に縦方向の平行叩きの後、横方向にナデを施し、叩き目をナデ消す。凹面に型枠痕と布綴じ合わせ目が残る。

同 11～28 は中世の堆積層から出土した。

11～15 は須恵器杯H蓋。11 は天井部外面に回転ヘラ削りを施す。12 の復元口径は 12.2㎝、器高 3.5㎝。天井部がややくぼみ、鈍い稜をもつ。口縁端部は外方に鋭く収め、内面に沈線をもつ。天井部外面には左回りの回転ヘラ削りを施す。13 の復元口径は 13.3㎝。天井部は丸みを帯び、口縁端部の外面に沈線をもつ。14 は器高が高く、天井部は平ら。稜の痕跡がわずかにあり、口縁端部の内面に沈線がかろうじて残る。天井部外面に左回りの回転ヘラ削りを施す。15 の復元口径は 13.4㎝。器高は高く、わずかに稜が残る。口縁端部の内面に面をもち、天井部外面には回転ヘラ削り調整を施す。16 は須恵器杯H。復元口径は 12.9㎝。口縁部は上方に高く立ち上がり、口縁端部の内面に沈線をもつ。受部は外方に鋭く作る。17 は須恵器杯Ｂ蓋。口縁端部は下方に鋭く折り返す。18 は須恵器椀。底部の復元口径は 7.9㎝。高台の内側で接地する。19・20 は須恵器甕の胴部で、ともに外面には平行叩きを施す。19 の内面は同心円文の当て具痕をナデ消すが、20 の内面は当て具痕が残るものの、一部にナデ消し痕が認

められる。21・22 は土師器甕。21 は口縁部で、復元口径は 10.8㎝。上方にわずかに外反し、内外面に強いナデを施す。22 は胴部の把手。一部に刷毛目が残り、胴部内面の部分に横方向の刷毛目が残る。

23 は平瓦。凸面は縦方向に叩き目をナデ消す。凹面は模骨痕がわずかに残り、凸面、凹面ともに側縁部と側面に削りを施す。

24～28 は中世の土師器皿。いずれも口縁部の内外面に丁寧な横ナデを施す。24 の復元口径は 8.5㎝。底部外面は未調整で、内面は一定方向にナデを施す。25 の復元口径は 8.6㎝。器壁は薄く、全体的にゆがむ。底部外面は未調整で指頭圧痕が残り、内面は一定方向にナデを施す。26 は器壁がやや厚い。27 の口縁部は肥厚し、口縁端部は丸く収める。口縁部外面に段をもつ。

29 は SD170101 埋土から出土した鉄片。長径 6.4㎝、短径 3.8㎝、厚さ 1.8㎝、重量 44.0g。板状をなし、表面には泥土が強く付着し、表面観察は困難であるが、X線透過画像で内部を確認すると複数の気泡状の空隙が認められることから鉄滓と考えられる。

30 は整地層の上面から出土した須恵器杯Ｂ蓋。口縁端部は鋭く収める。

第３項　　第 17 次調査の成果と課題

（１）古墳時代後期集落の展開

興道寺廃寺の既往の発掘調査では、後に寺院が建立された微高地の安定面から東側の段丘崖に向かって、地山面が元々の傾斜と同じように緩やかに傾斜する地形があり、古墳時代後期の遺構、遺物が広く展開する様相が確認されていた。今回の調査で、７世紀以前に遡ると考えられる柱穴列１基と地山層を削平して平坦面を造り出した痕跡を検出した。柱穴埋土から須恵器H類が出土し、明確な時期は明らかにできないが、６世紀後半から７世紀前半のいずれかの時期に伴うと考えられる。

興道寺廃寺周辺では、寺域の南側と寺域外の北方の２か所を中心に、６世紀後半から７世紀前半に伴うと考えられる竪穴建物跡３基（棟）、掘立柱建物跡・柱穴列９基（棟）が第 16 次調査までに検出されている。建物方位や柱並びの方位は南北軸に対して全体的に西に振れるという特徴があり、７世紀後半から８世紀前半の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、柱穴列の方位についても同様に西には振れるが、その振れ幅はあまり大きくないので、今回、検出された柱穴列の年代観に矛盾はないと判断される。

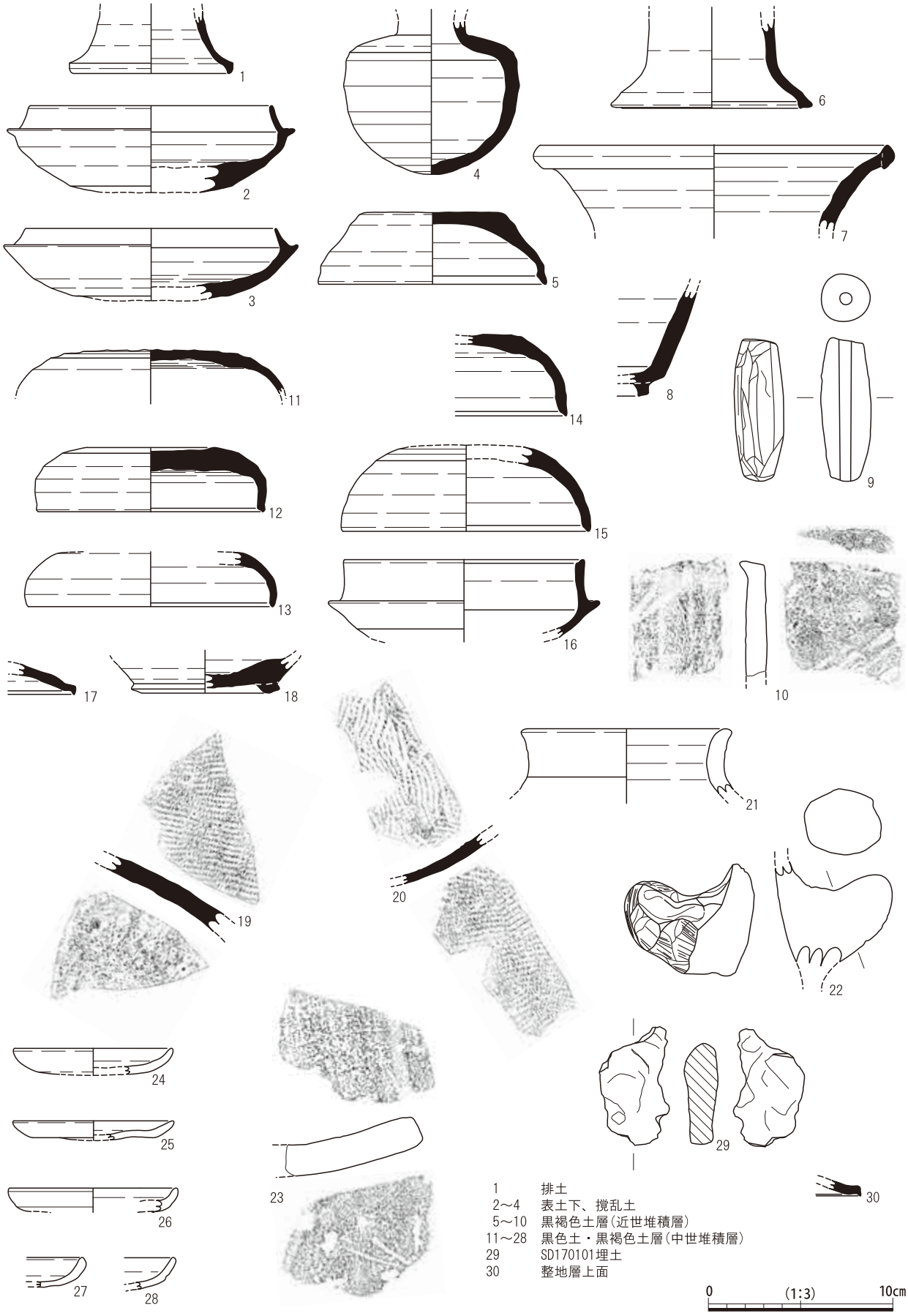
今回、柱穴列が確認されたことで、思いのほか古墳時代後期の集落が段丘面から段丘崖にかけて、標高が低いところまで広がっていたものと考えられる。

（２）寺域外での整地層の検出

今回の調査で、地山面（段丘面）の上に盛土を伴う整地を施していることを確認した。地山面に対する整地については、寺域外の南方（南門の南側）の第 13 次調査１トレンチで寺院再建期に伴う黒色系の土砂による盛土整地が確認されており、それ以外にも再建期の寺院建物の基壇周囲で地山土の細ブロックや微細遺物が混じる黒色系の土砂による盛土造成が認められている。

今回の調査で検出された整地層は、広く興道寺廃寺全体を覆う寺院再建期の整地層にあたるものと判断され、同様の盛土整地が８世紀後半以後に顕在化し、寺院南方に留まらず興道寺廃寺周辺に及んでいる可能性が高まった。今回、寺域北側の段丘崖付近で整地が認められたことで、例えば耳川支流の小河川を用いた物資の輸送などに伴う段丘崖に対する何らかの造営行為があった可能性も考えられる。

段丘崖付近において古墳時代後期から古代にかけての遺跡形成があったことが明らかとなったことで、今後、より具体的な遺跡、遺構の性格付けを視野に置いた発掘調査の継続が求められる。



第 11 図　興道寺廃寺第 17 次調査 1 トレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3）

第７節　　興道寺廃寺第 18・19 次調査

第１項　　第 18・19 次調査の目的

平成 29・30 年度(2017・2018)に実施した第 18・19 次調査の目的は、興道寺廃寺の寺域外の北方エリアのうち、広域農道を挟んだ北側の旧地形と遺構・遺物の様相を明らかにすることであった。

この広域農道の北側は小字「狐塚」であり、墳墓の存在をうかがわせるが、畑地の一部に茶の木が植栽されており、この垣根が円弧状を呈していることから、かつては円墳があり、この墳丘に沿って畑地の地割が制限されており、その境界に茶の木が植栽されていた可能性も考えられた。これは明治初期の地籍図にも表現されており（第 12 図)、江戸時代以前の境界、植生を反映しているものと考えられた。

また、大正 12 年(1923) 4 月に耳村役場が例言を記した『耳村誌稿』には「第三章　大字誌」の興道寺の項に「(前略)。明治四十四年四月、河原市より興道寺に至る里道、水害の為めに破損せしを以て、之を変更して興道寺より郷市に達する村道を設けたり。該工事中小字観音の隣接地小字狐塚の地より刀剣の破片等を発掘せり。是古墳なりしなるべし。(後略)」との記述がある。明治 44 年(1911)の里道改修時に鉄剣が出土したことが記されており〔美浜文化叢書刊行会 2014〕、今回の調査地が小字狐塚であるなど、古墳が所在する可能性が高いものと考えられた。

寺域外の北側での既往の調査や、第 18・19 次調査地の南側を東西に延びる広域農道の敷設に伴う発掘調査においても確認されているように、興道寺廃寺の寺域外の北方エリアでは古墳時代後期に伴う遺構が広範囲に分布しており、また 7 世紀後半以後に属すると考えられる竪穴建物跡や、第 17 次調査では古代の整地層も検出されている。

第 12 図　小字狐塚周辺の地籍図

これらのことから、第18・19次調査では過去に発掘調査が行われていない小字狐塚のうち、かつて古墳の墳丘があったものと考えられる地点において、①旧地形の把握、②遺構・遺物の存否および様相確認を目的として、平成29年度(2017)は南北方向に１か所のトレンチ、平成30年度(2018)は東西方向に２か所のトレンチを設けて、それぞれ調査を行った。

①について、興道寺廃寺が所在するあたりから北に向かって緩やかに標高が低くなり、段丘地形が比較的よく残っている。往時の旧地形を把握することで、寺院造営主体や経営主体の土地利用のあり方の一端を明らかにすることを目指した。

②については、寺院造営集団やその前身集団の集落形成などがさらに北方、つまり興道寺廃寺の発掘調査では最北端にあたる今回の調査地付近まで展開しているかを確認するとともに、前述のとおり古墳の墳丘や周溝を確認することを目指した。

なお、第19次調査においては、第18次調査１トレンチで検出された古墳周溝と考えられる溝の伸張を確認するために、この東側に南北に並列する形で２つのトレンチを設定した。

第２項　　第18次調査１トレンチの調査（第13～15図）

（１）基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は22.35～22.5mである。調査地付近はやや微高地で、北と東に向かって標高が低くなる。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.2～0.4m）下、トレンチの南端では標高22.2m付近で地山面となる褐色砂礫土層の上面に、トレンチの北端では標高21.95m付近で地山面の褐色土層の上面に至る。地山面はトレンチの両端で約0.25mの比高差をもつが、トレンチの北端は古墳周溝の外側にあたるため、地山面が相対的に低くなっており、地山層の上面はほぼ平坦である。

表土から須恵器杯類の破片１点、土師器甕片１点、陶磁器細片１点が出土した。

（２）検出遺構の概要

地山面で周溝（SZ180101-SD1）と墳丘の盛土を伴う古墳１基(SZ180101)、土坑２基（SK180101・SK180102)、柱穴２基（P180101・P180102)、小穴14基（P180103～P180116）を検出した。地山面に掘り込まれた撹乱15基が確認されており、撹乱土から須恵器杯類の破片１点、土師器壺片１点・甕片４点、土師器の細片７点、製塩土器片１点、陶磁器細片11点、鉄片１点、鉄釘１点、プラスティック２点が出土した。

（３）古墳

地山面を掘り込む古墳北側の周溝（SZ180101-SD1）を検出した。周溝の幅は2.9m、深さ0.30m。平面形態はわずかに弧状を呈し、断面形状は船底状をなす。溝底面の標高は約21.8m、溝の外側の立ち上がりで標高約21.95m、内側の立ち上がりで標高約22.1mである。周溝の埋土は黒褐色土であるが、下位に拳大の礫が埋没し、上部には石室構成材であったと思われる大型の自然礫が多く含まれている。

トレンチの東壁に沿って周溝を断ち割ったところ、周溝幅において最深0.5mほど地山層を大規模に掘削し、その上に黒褐色土、灰黄褐色土、黄褐色土、褐色土などの土砂を細かく水平に埋めながら締め、周溝の底面を造り出した様相が明らかとなった。この周溝下の盛土整形は墳丘裾部の構築と一

体的になされたものと考えられる。周溝内側の立ち上がりの地山面の上で、墳丘裾部の盛土の一部をかろうじて検出した。

周溝から出土した遺物として、底面付近の最下層から須恵器杯類の破片２点・壺類片１点、土師器甕片３点・土師器の細片６点、土壁状製品１点が出土した。また、底面から若干浮いた状態で下層から土師器甕片４点・土師器の細片２点が出土した。また表土下、周溝の上方にあたる堆積土からは石室構成材と考えられる大きな自然礫とともに、破片で弥生土器壺１点（第 15 図１）・甕２点（同２）・弥生土器４点、須恵器杯Ｈ１点（同４）・杯類５点・壺類１点（同５）、土師器甕 34 点（同３）、陶磁器２点、鉄製遺物１点（同６）が出土している。断ち割りを行った際、墳丘土にあたる部分から弥生土器１点が出土した。

埋葬施設は未確認である。SZ180101-SD1 が北側の周溝に当たるとすれば、埋葬施設はトレンチの南側で検出される可能性もあったが、地山面自体が大幅に削平されているものと考えられ、既に石室墓壙を含めて失われているものと考えられる。

（４）土坑

SK180101・SK180102 はともに平面形態が円形であるが、SK180101 はほぼ正円形で、SK180102 は楕円形を呈する。どちらも側面の内側に厚さ５㎝ほどの土壁を塗り固めるなど防水の処理が施されており、SK180102 は底面にも同様の造作が認められることから、水溜めとして機能した土坑と考えられる。SK180102 が SK180101 を切っており、最初に造られた土坑がやや小さく、ほぼ同じ場所で規模を大きくして造り替えられている。

SK180101 の平面形態はほぼ正円形で、南北検出長が 0.30m、東西径 0.93m、底面までは検出していない。断面形状は箱形。埋土は暗褐色土からなる。遺物は出土していない。

SK180102 は南北径 1.87m、東西径 1.24m、深さ 0.78m。断面形状は箱形で、底面は中心に向かってややくぼむ。埋土は上位は暗褐色土、下位は黒褐色土をもち、底面付近には人頭大ほどの自然石や土坑内側側面に塗られた土壁が多く堆積していた。また、底面付近からは未炭化のチャノキ近似種の種子 10 数点が出土している。これらをサンプリングし、土壁 133 点、種子８点ほどを回収した。埋土からは破片で土師器甕３点、磁器丸椀１点（第 15 図７）、磁器細片２点、天目椀１点、イノシシの骨１点（同８）が出土した。

（５）柱穴列

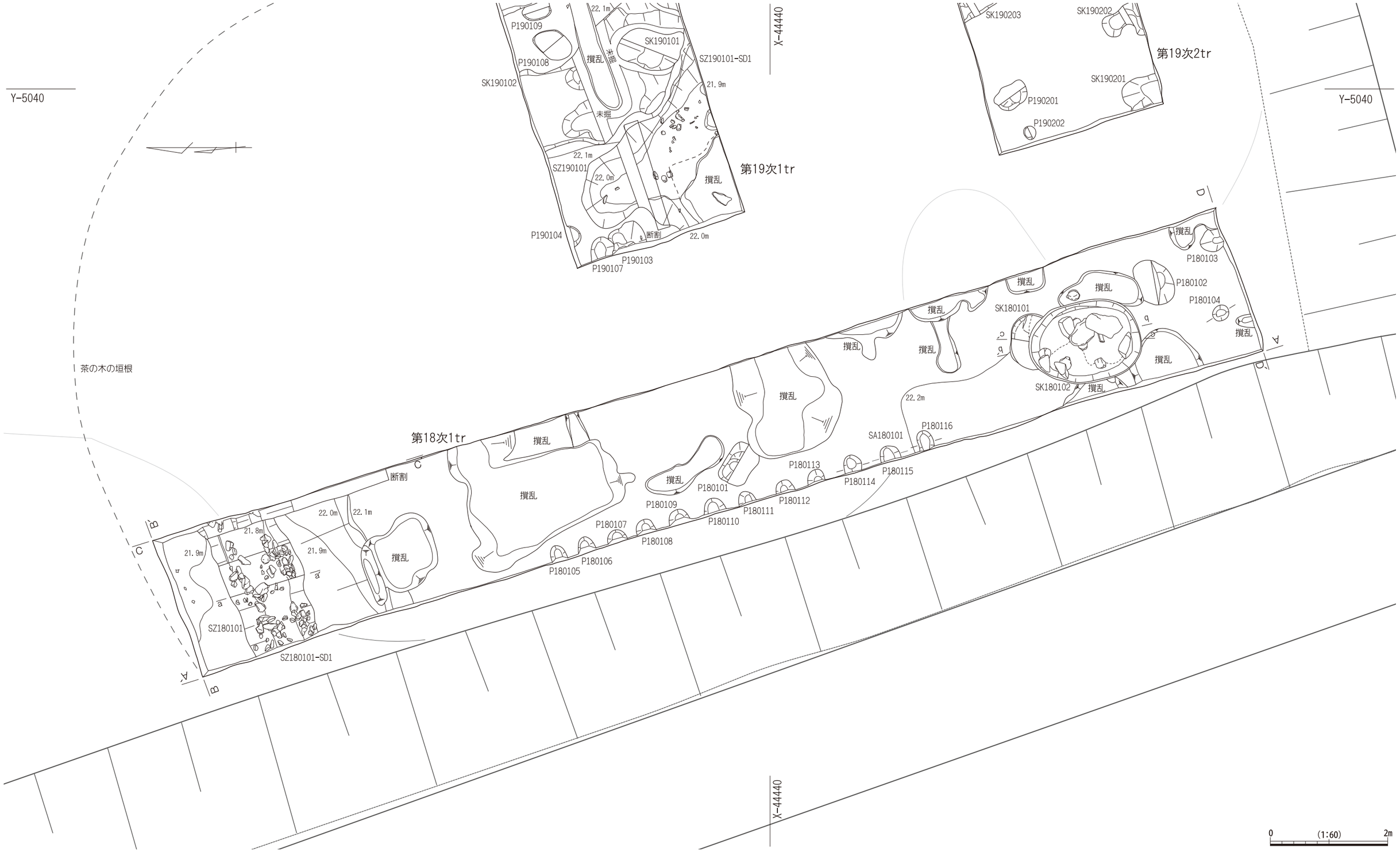
柱穴列１基（SA180101）を検出した。P180105～P180116 の 12 基の小さな柱穴が狭い間隔で南北に並んで柱穴列を構成する。トレンチの西壁に沿って 6.5mが検出された。柱穴の間隔は 0.5mと細く、小規模な柵、杭が並んでいたものと考えられる。

柱穴の深さは総じて浅く、埋土は上位に暗褐色土、下位に黒褐色土をもち、土坑 SK180102 と近い埋土をもつ。底面の標高は多少の高低差があるが、ほぼ標高 22.0mで揃う。埋土から出土した遺物はない。

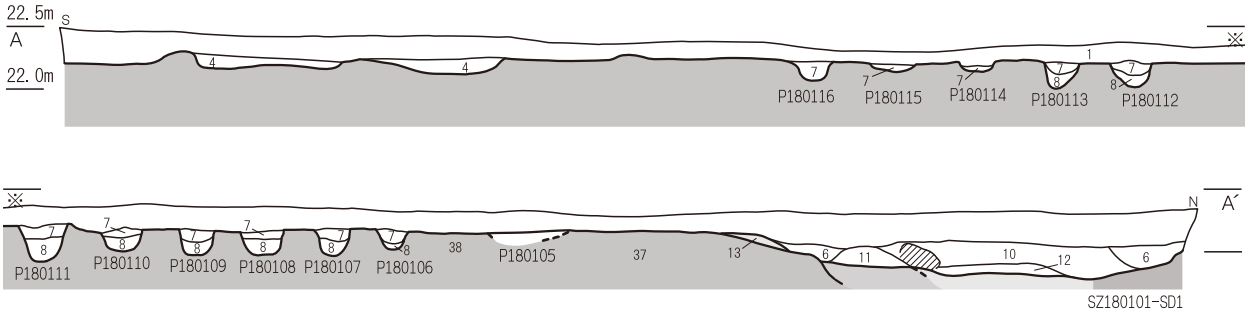
（６）柱穴・小穴

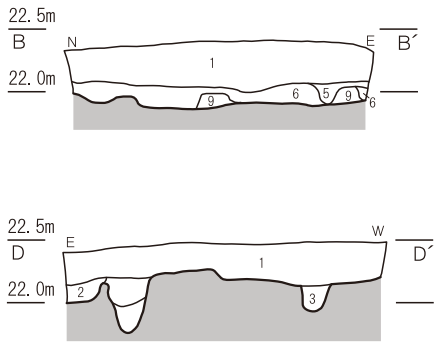
建物を構成するか不明であるが、P180101～P180104 の４基の柱穴がある。

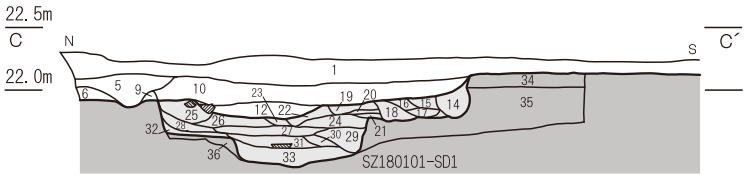
P180101 の平面形態は楕円形で、北西－南東の検出長 0.75m、北東－南西 0.50m、深さ 0.42m。断面形状は尖底状をなす。埋土の下部に掘り方と柱あたりが残る。弥生土器の細片２点、土師器甕片

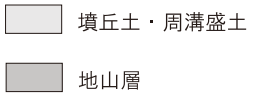


第 13 図　興道寺廃寺第 18 次調査 1 トレンチ遺構平面図（縮尺 1/60）





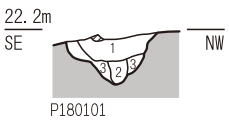




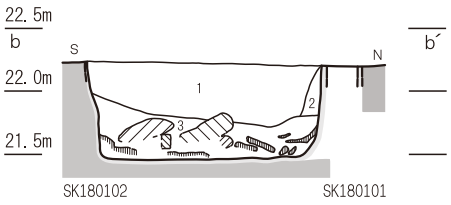
1　耕作土
2～6　撹乱
7・8　P180106～P180116埋土
9～11　堆積土
12　周溝埋土
13　墳丘土
14～33　墳丘・周溝構築土
34～38　地山土

1　黒褐色土 10YR3/2
2　黒褐色土 10YR3/1
3　黒褐色土 10YR3/1（地山土混じる）
4　暗褐色土 10YR3/3
5　黒褐色土 10YR3/2
6　黒褐色土 10YR3/2（地山土混じる）
7　暗褐色土 10YR3/3
8　黒褐色土 10YR2/2（径2cmまでの礫含む）
9　暗褐色土 10YR3/3（地山土多く混じる）
10　黒褐色土 10YR2/3
（径30cmまでの礫多く含む、石室構成材か）
11　黒褐色土 10YR2/3（地山土・墳丘土混じる）
12　黒褐色土 10YR2/2
13　褐色砂質土 10YR4/4
14　黒褐色土10 YR3/2（地山土少し混じる）
15　黒褐色土10 YR3/2（地山土細ブロック多く混じる）
16　灰黄褐色土 10YR4/2
（地山土細ブロック少し混じる）
17　にぶい黄褐色土 10YR5/4（黒褐色土混じる）
18　褐色砂質土 10YR4/4（灰質褐色土混じる）
19　灰黄褐色土 10YR4/2（地山土少し混じる）
20　黄褐色土 10YR5/6
21　褐灰色土 10YR4/1
22　黒褐色土 10YR3/2（地山土が縞状に混じる）
23　黒褐色土 10YR3/1（地山土少し混じる）
24　褐色土 10YR3/3（地山土少し混じる）
25　黒褐色土 10YR3/2
26　黒褐色土 10YR3/2（地山土少し混じる）
27　褐色砂質土 10YR4/4
（灰黄褐色土が縞状に混じる）
28　黒褐色土 10YR3/2
29　黒褐色土 10YR3/2（地山土小ブロック混じる）
30　黒褐色土 10YR3/2（地山土混じる）
31　黒褐色土 10YR2/2
32　黒褐色土 10YR3/2（径2cmまでの礫多く含む）
33　黒褐色土 10YR2/2（径5cmまでの礫多く含む）
34　褐色土 10YR4/6
35　にぶい黄褐色砂質土 10YR4/6
36　にぶい黄褐色砂礫土 10YR4/3
（径10cmまでの礫が主体）
37　褐色土 10YR4/6
38　褐色砂礫土 10YR4/4（径10cmまでの礫含む）

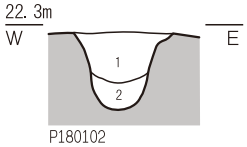
1　黒褐色土 10YR2/2



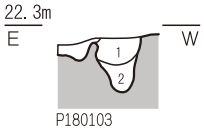
1　黒褐色土 10YR2/3
2　黒褐色土 10YR2/2
3　黒褐色土 10YR2/2
（地山土混じる）



1　暗褐色土 10YR3/3（土壁少し含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（土壁多く含む）
3　黒褐色土 10YR3/2（土壁ブロック多く含む）

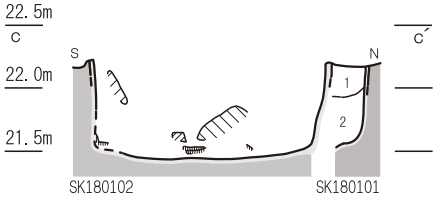


1　黒褐色土 10YR2/2
2　黒色土 10YR2/1

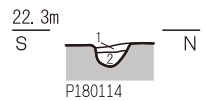


1　黒褐色土 10YR3/2
2　黒褐色土 10YR2/2

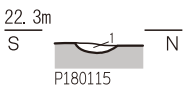
1　黒褐色土 10YR2/2



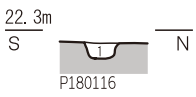
1　暗褐色土 10YR3/3（土壁少し含む）
2　暗褐色土 10YR3/3（土壁多く含む）



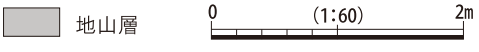
1　暗褐色土 10YR3/3
2　黒褐色土 10YR2/2
（径2cmまでの礫含む）



1　暗褐色土 10YR3/3



1　暗褐色土 10YR3/3



第 14 図　興道寺廃寺第 18 次調査 1 トレンチ遺構土層断面図（縮尺 1/60）

７点が破片で出土。うち１点は胴部外面に叩き痕をもつ。P180102 の平面形態は楕円形で、南北 0.58m、東西 0.82m、深さ 0.63m。断面形状は半円形。弥生土器細片１点、土師器甕片１点が出土。P180103 の平面形態は楕円形で、南北検出長 0.37m、東西検出長 0.38m、深さ 0.45m。断面形状は尖底状をなし、一部が深くなる。埋土から土師器甕２点・椀１点（第 15 図９）、製塩土器１点が破片で出土。P180104 の平面形態は円形で、南北検出長 0.28m、東西検出長 0.25m、深さ 0.10m。断面形状は箱形。

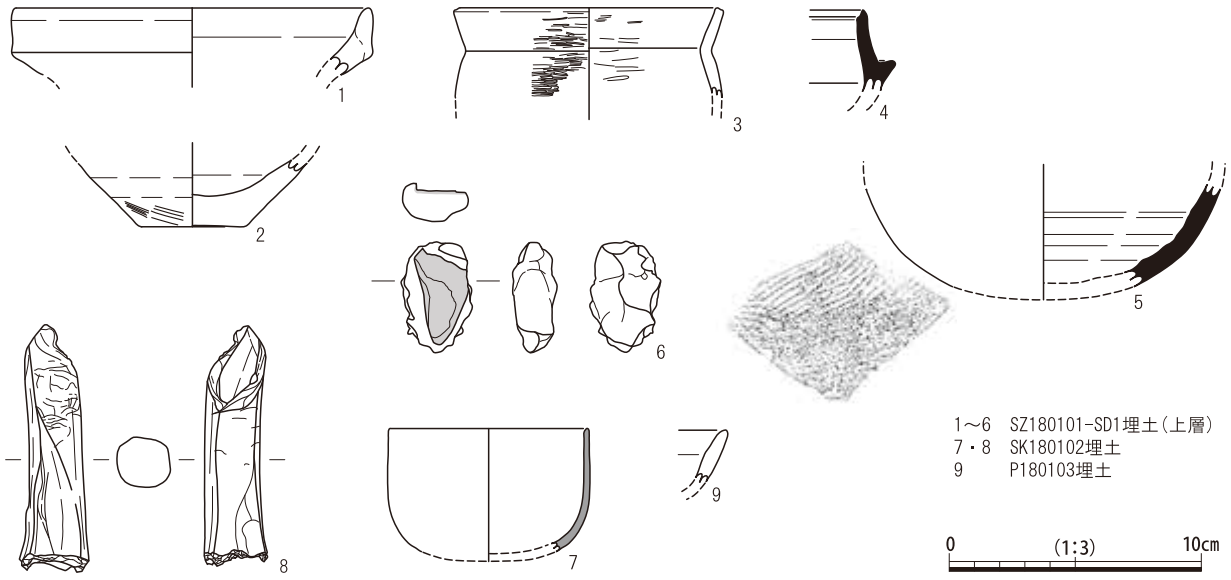
P180105～P180116 の 12 基の小柱穴は柱穴列 SA180101 を構成する。平面形態は円形または楕円形を呈するが、いずれも柱穴の西側が調査区外にあるため、はっきりしない。

P180105 は南北 0.27m、深さ 0.16m。断面形状は半円形。P180106 は南北 0.28m、深さ 0.21m。断面形状は半円形。P180107 は南北 0.35m、深さ 0.21m。断面形状は船底状をなす。P180108 は南北 0.32m、深さ 0.21m。断面形状は半円形。P180109 は南北 0.36m、深さ 0.20m。断面形状は半円形。P180110 は南北 0.37m、深さ 0.30m。断面形状は尖底状をなす。P180111 は南北 0.31m、深さ 0.24m。断面形状は半円形。P180112 は南北 0.33m、深さ 0.21m。断面形状は半円形。P180113 は南北 0.30m、深さ 0.22m。断面形状は尖底状をなす。P180114 は南北 0.30m、深さ 0.08m。断面形状は浅い箱形。P180115 は南北 0.35m、深さ 0.06m。断面形状は浅い箱形。P180116 は南北 0.26m、深さ 0.16m。断面形状は半円形。

（７）出土遺物

第 15 図１～６は SZ180101-SD1 の埋土上層、７・８は SK180102 埋土、９は P180103 埋土から出土。

１は弥生土器の壺。口縁部の復元径は 14.0cm。口縁部は屈曲し、口縁端部を上方に収める。口縁部の内外面に強い横ナデを施す。２は弥生時期の甕の底部。底部の復元径は 2.5cm、平底で、体部外面に刷毛目を施す。３は土師器甕。口縁部の復元口径は 10.2cm。口縁部は上方にまっすぐ立ち、口縁端部に面をもつ。口縁部と胴部の外面に赤彩を施し、口縁部から頸部にかけての外面に精緻な細かいミガキを施す。４は須恵器杯H。口縁部は上方に短く立ち上がり、口縁端部は段をなす。受部は鈍く作り、体部は強く丸みを帯びる。５は須恵器壺類。胴部下半の外面は平行叩きの後、横ナデを施し、内面は横ナデを施す。６は鉄製遺物。長径 4.4cm、短径 2.8cm、厚さ 1.7cm、重量 19.8g。土の塊に厚さ２㎜程度の金属の剥離面が固着する。種別は不明で、何らかの鉄製遺物が土中環境にある中で剥離し、



第 15 図　興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3）

周囲の土と一緒に固形化したものと考えられる。

７は磁器丸椀。口縁部の復元口径は 7.9㎝。口縁部は上方にまっすぐ立ち上がり、口縁端部は鋭く収める。８はイノシシの大腿骨(右)の骨幹部。野生イノシシであるか、家畜のブタであるかは判断できない。近位側は螺旋状に割れており、人為的に割って骨髄を利用したものである。遠位側はかじられており、浅い溝状の痕跡も集中することから、犬の咬み跡と考えられる。

９は土師器椀。器壁は厚く、口縁端部は丸く収める。

図化は行っていないが、チャノキ近似種の種子について、樹種同定分析の結果を以下に収録する。

チャノキ近似種　c.f. Camellia sinensis (L.) Kuntze　種子　ツバキ科

直径1.4～1.6㎝程度の大きさで、中空で脆弱であったため、埋土掘削時に破損したものがある。黄褐色で、背・腹面観は楕円形、側面観は半円形、上面観は扇形。腹面が鈍稜となる。全体的に丸みを帯びている。扇形の上面観から果実に３個程度入っていた種子の１つであると推定される。形態からツバキ科の中でもチャノキに似るが、着点やその周囲の窪みなどの特徴的な部分は残存していない。また現生チャノキ種子よりもやや扁平である。全体的に丸みを帯び、背面上下方向には放射状のごく低い隆線がみられる。上端に直径約 0.5㎜ の穴が、下端に直径約 1.0㎜ の穴が空く。

第３項　　第 19 次調査１トレンチの調査（第 16～18 図）

（１）基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 22.35ｍである。第 18 次調査１トレンチの東側に位置し、第19次調査地付近から東に向かって標高が低くなる。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚 0.15～0.25ｍ）下、トレンチの西端では標高 22.15ｍ付近で、トレンチの東端では標高 22.1ｍ付近で地山面の褐色土層の上面に至る。地山面はトレンチの両端で約 0.05ｍの比高差しかない。

表土から須恵器杯片１点・甕片２点、土師器甕片４点・土師器の細片２点、越前焼擂鉢片１点、陶磁器細片５点が出土。また、排土から弥生土器片１点、須恵器杯片４点・杯類の破片４点、土師器甕片７点・土師器の細片３点、陶磁器細片３点が出土した。

（２）検出遺構の概要

地山面で周溝の一部（SZ190101-SD1）を伴う古墳１基（SZ190101)、柱穴列１基（SA190101)、土坑５基（SK190101～SK190105)、柱穴・小穴 10 基（P190101～P190110）を検出した。撹乱３基が確認されているが、土坑、柱穴・小穴に底面まで極めて浅いものもあり、この中には耕作撹乱に伴うものもあるかも知れない。

（３）古墳

地山面を掘り込む古墳東側の周溝（SZ190101-SD1）を検出したが、第18 次調査１トレンチで検出されたように整った平面形状ではなく、崩れて不定形の形状をなす。大幅に耕作撹乱を及んでいるとともに、もっと古い段階にも一定の改変があったようで、周溝の形状が墳丘の裾部にあたるかは疑わしい。周溝の幅は 1.95ｍ、深さ 0.13ｍ。断面形状は船底状をなす。溝底面の標高は約 21.85ｍ、溝の外側の立ち上がりで標高約 22.1ｍ、内側の立ち上がりで標高約 22.05ｍである。溝の底面と内側の立ち上がりの標高は第 18 次調査１トレンチで検出した周溝と近似値である。周溝の埋土は黒褐色土、暗褐色土である。

周溝の一部を断ち割ったところ、北側と同様に周溝の底面を最深 0.3mほど地山層を掘削し、その上に黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土などの土砂をやや厚くブロック状に埋めながら、周溝の底面を造り出す。周溝の北側と東側では盛土の単位に相違があるが、周溝下に盛土整形を施す点で共通している。

周溝の埋土から、須恵器杯H蓋片２点（第18図１・２）・杯片２点（同３）・杯類の破片２点・有蓋高杯片１点（同４）・杯Ａ片１点（同５）・皿片１点（同６）・甕片１点、土師器甕片 59 点、土師器の細片９点、製塩土器片１点が出土した。

（４）土坑

SK190101 の平面形態はいびつな楕円形で、南北 1.07m、東西 0.65m、深さ 0.25m。断面形状は船底状をなし、一部が深くなる。黒褐色土、暗褐色土を埋土にもつ。須恵器細片１点、土師器甕片１点が破片で出土。SK190102 の平面形態は幅が広い溝状をなし、北西－南東の検出長 3.00m、北東－南西 1.78m、深さ 0.20m。底面まで浅い。暗褐色土を埋土にもつ。須恵器甕１点、土師器甕６点が破片で出土。SK190103 の平面形態は崩れた楕円形で、南北検出長 0.45m、東西 1.41m、深さ 0.06m。断面形状は浅い箱形。黒褐色土、暗褐色土を埋土にもつ。SK190104 の平面形態は幅の広い溝状をなし、北西－南東検出長 2.87m、北東－南西 1.61m、深さ 0.06m。断面形状は浅い船底状をなし、SK190101 と同様、底面まで浅い。暗褐色土を埋土にもつ。土師器甕片１点が出土。SK190105 の平面形態は細い溝状を呈し、北東－南西検出長 1.15m、北西－南東 0.39m、深さ 0.06m。断面形状は浅い船底状をなす。暗褐色土を埋土にもつ。須恵器杯蓋１点、土師器碗１点・甕２点が破片で出土。

SK190101 以外は総じて浅く、近世以後に伴う遺構である可能性も否定できない。

（５）柱穴列

柱穴列１基（SA190101）を検出した。P190101・P190102 の２基の柱穴が南北に並ぶが、西へは展開しない。２基の柱穴ともに埋土に掘り方と柱当たりが見られ、P190101 の底面には根固め石がある。SA190101 の柱筋の柱間は 1.6m前後、柱穴の掘り方の径は 0.5mほどである。底面の標高は 21.8～21.9mにあり、高低差をもつ。柱穴埋土からの出土遺物はない。

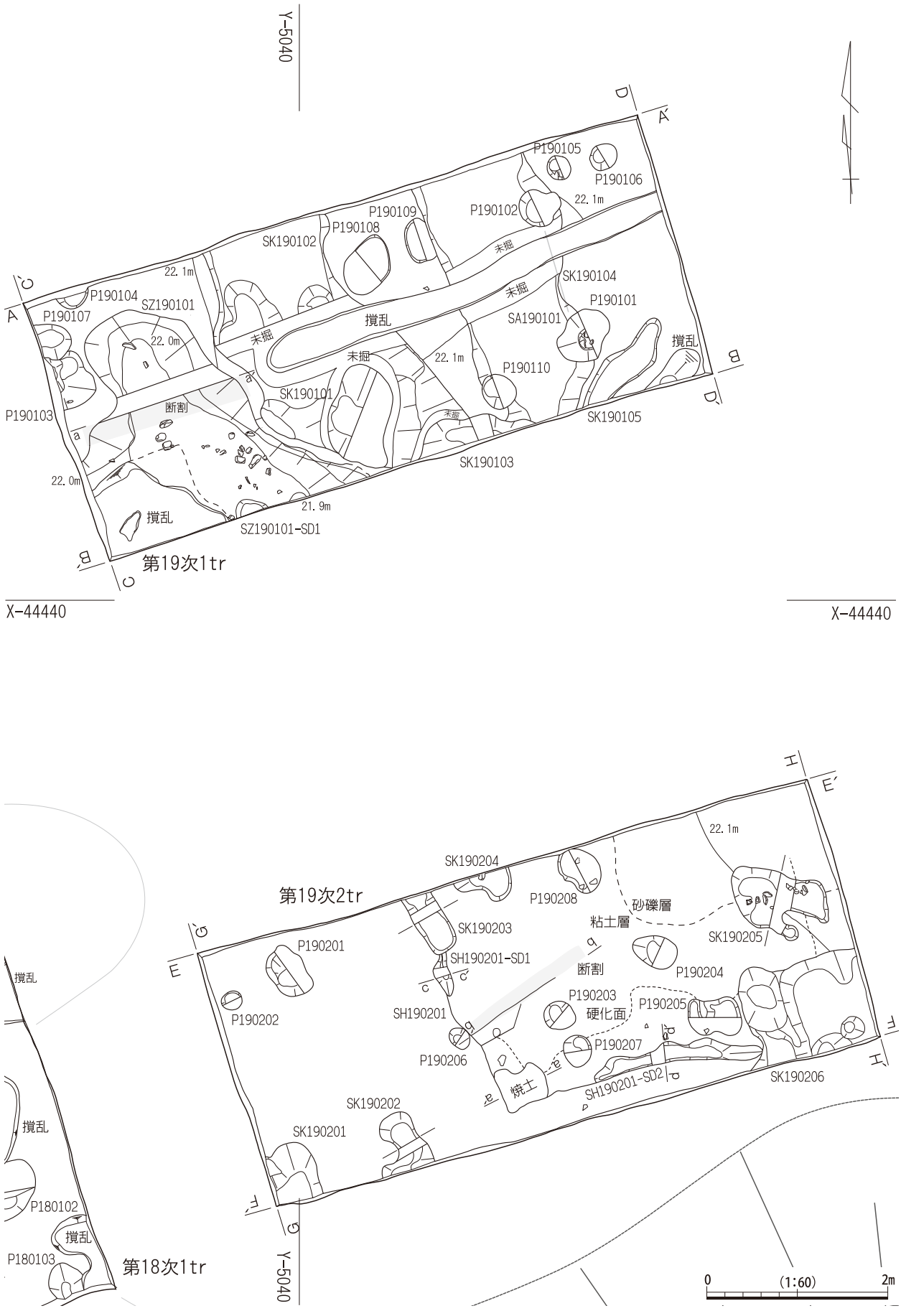
（６）柱穴・小穴

P190101・P190102 の２基の柱穴は柱穴列 SA190101 を構成する。

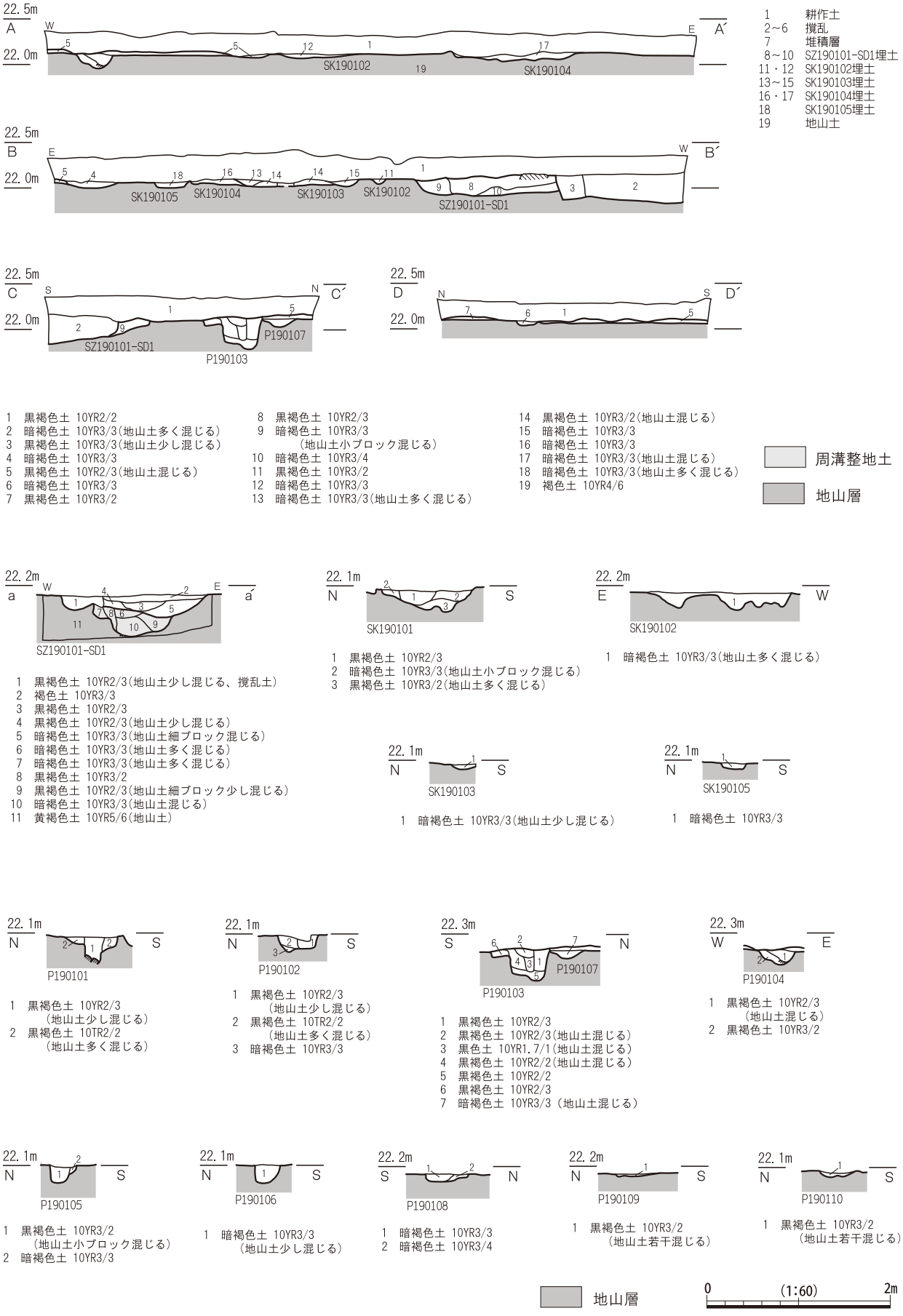
P190101 の平面形態は崩れた楕円形で、北東－南西 0.64m、北西－南東 0.46m、深さ 0.26m。断面形状は箱形で、柱あたりの部分が一段深くなり、底面に根固め石をもつ。P190102 の平面形態は崩れた円形で、南北 0.43m、東西 0.47m、深さ 0.19m。断面形状は箱形で、一部が深くなる。

P190103 の平面形態は崩れた円形で、南北 0.60m、東西検出長 0.40m、深さ 0.35m。断面形状は箱形。掘り方と柱あたりをもつが、周囲で柱穴の並びは確認できない。埋土から製塩土器支脚１点（第18図７）が破片で出土。

P190104 の平面形態は円形で、南北検出長 0.13m、東西 0.37m、深さ 0.21m。断面形状は半円形。P190105 の平面形態は円形で、北東－南西 0.25m、北西－南東 0.28m、深さ 0.20m。断面形状は半円形。P190106 の平面形態は円形で、北東－南西 0.32m、北西－南東 0.29m、深さ 0.20m。断面形状は半円形。P190107 の平面形態は楕円形で、南北 0.42m、東西検出長 0.34m、深さ 0.08m。断面形状は弧状をなす。P190108 の平面形態は楕円形で、北東－南西 0.61m、北西－南東 0.48m、深さ 0.08m。



第 16 図　興道寺廃寺第 19 次調査１・２トレンチ遺構平面図（縮尺 1/60）



第 17 図　興道寺廃寺第 19 次調査 1 トレンチ遺構土層断面図（縮尺 1/60）

断面形状は船底状をなす。埋土から土師器甕片１点が出土。P190109 の平面形態は楕円形で、南北 0.49ｍ、東西検出長 0.28m、深さ 0.04m。断面形状は弧状をなす。P190110 の平面形態は円形で、北東－南西 0.35m、北西－南東 0.40m、深さ 0.06m。断面形状は弧状をなす。埋土から土師器甕１点が破片で出土。

（７）出土遺物

第 18 図１～６は SZ190101-SD1 埋土、７は P190103 埋土から出土した。

１・２は須恵器杯Ｈ蓋。１の復元口径は 8.8 ㎝。天井部は丸く、口縁部の立ち上がりは低い。口縁端部は強く屈曲し、下方に鋭く収める。天井部外面にヘラ削りの痕跡を残し、口縁部の内外面は横ナデを施す。２の復元口径は 10.7 ㎝。口縁部から天井部にかけて丸みを帯び、天井部と口縁部の境は不明瞭である。口縁端部は面をなす。３は須恵器杯Ｈ。復元口径は 11.1 ㎝。底部は浅く、口縁部は短く、口縁端部を鋭く収める。受部は薄く作る。底部外面は回転ヘラ削りを施し、口縁部外面から底部内面にかけて横ナデを施す。底部内面には、ネコ科と思われる小動物の足跡が残り、肉眼で肉球の跡６か所を観察できる。４は有蓋高杯。杯部の口径は 10.3 ㎝。杯部は内弯し、口縁部は内方に短く立ち上がり、口縁端部を鋭く収める。受部は厚く作る。底部外面は回転ヘラ削りを施す。脚部は太く、八の字状に開く。脚部に透かしは見られない。５は須恵器杯Ａ。復元口径は 12.4 ㎝。口縁部は上外方にまっすぐ立ち上がり、口縁端部は丸く、鋭く収める。６は須恵器皿。復元口径は 8.7 ㎝。口縁部は強く内弯して立ち上がり、口縁端部は外方に引き伸ばして鋭く収める。口縁端部の内外面に強い横ナデを施す。灯明皿。

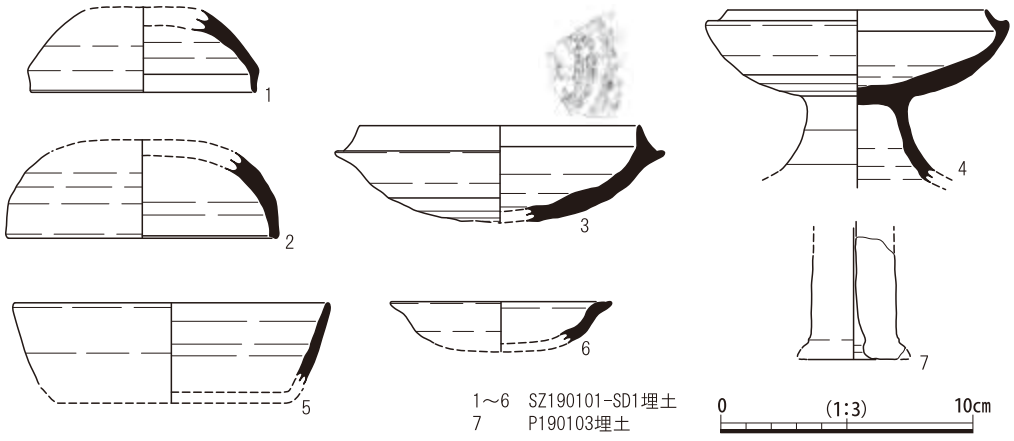
７は製塩土器の支脚で、中空。脚柱部は細く作る。

第４項　　第 19 次調査２トレンチの調査（第 16・19・20 図）

（１）基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 22.35m。第 18 次調査１トレンチの東側、第 19 次調査１トレンチの南側に位置する。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚 0.20～0.25m）下、トレンチの西端では標高 22.15m付近で、トレンチの東端では標高 22.1m付近で地山面の褐色土層の上面に至り、トレンチの両端で地山面の比高差が約 0.05ｍしかないのは１トレンチと同様である。トレンチの北東隅では地山面が粘土層から砂礫層となる。



第 18 図　興道寺廃寺第 19 次調査１トレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3）

表土から須恵器杯蓋片１点、須恵器杯類の破片２点、土師器甕片８点、越前焼甕片２点、陶磁器細片３点、現代の瓦片１点が出土。また、排土から弥生土器片１点、土師器の細片５点、陶磁器細片１点が出土した。

（２）検出遺構の概要

地山面で竪穴建物跡１棟（SH190201）、土坑６基（SK190201～SK190206）、柱穴・小穴８基（P190201～P190208）を検出した。

（３）竪穴建物跡

SH190201 は竪穴建物跡の南側を検出した。平面形態は方形を呈し、東西約４ｍほどの規模に復元できる。床面の標高は約 22.1m前後、建物跡の掘り方のほとんどが削平されており、床面までの深さは１cmあるかないかで、床面を検出したことでかろうじて竪穴建物跡であるものと認識できる。

床面の断面形状は平らで、貼り床などは確認できないが、中央寄りに地山面の粘土層の硬化が認められる。この硬化面はよく締まっており、貼り床と同等の機能をもつものと思われる。埋土は黒褐色土であったものと思われるが、基本的には表土直下で床面に至っている。床面直上付近で土師器甕１点、製塩土器１点（第 20 図１）が破片で出土した。

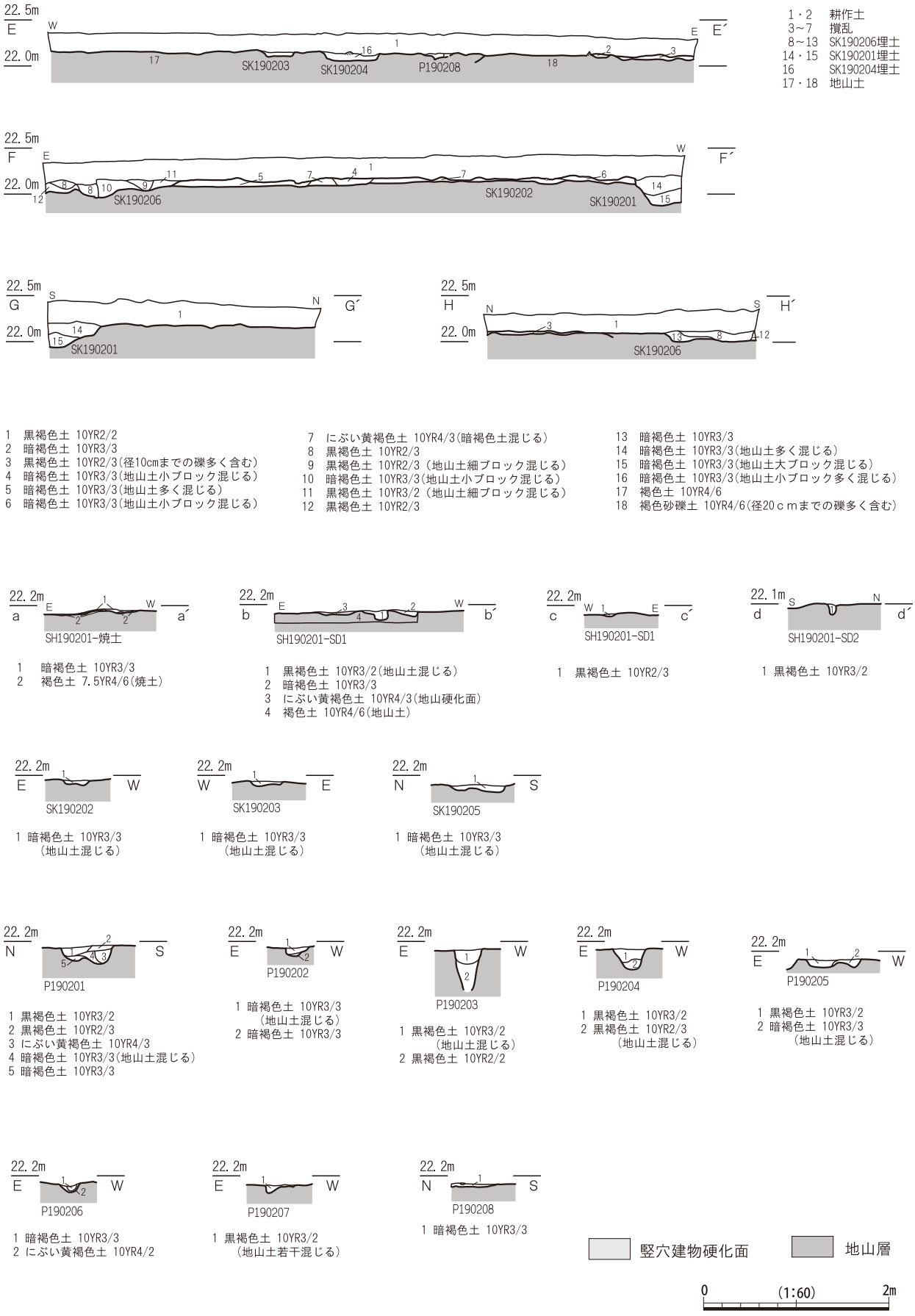
建物の南西隅付近に焼土の堆積があり、暗褐色土、褐色土とととも数cmほど堆積するが、造り付けカマドの痕跡は認められない。建物の南側と西側の縁辺には幅 20cm ほどの細い溝が部分的に廻り、建物壁溝にあたる。西側の溝 SH190201-SD1 は南北検出長 0.49m、東西 0.18m、深さ 0.03mで、断面形状は浅いレンズ状をなす。南側の溝 SH190201-SD2 は南北 0.21m、東西 1.88m、深さ 0.12mで、断面形状は尖底状をなす。SH190201-SD2 の埋土から土師器甕２点が破片で出土。

建物床面で５基の柱穴（P190203・P190204・P190205・P190207・P190208）が検出されているが、確実に建物に伴う柱穴とは考えにくいため、竪穴建物の柱穴としては扱っていない。

建物の時期を決める出土遺物には恵まれないが、７世紀後半から８世紀前半に伴うものと考えられる。

（４）土坑

SK190201 の平面形態は崩れた円形で、南北検出長 0.64m、東西検出長 0.52m、深さ 0.28m。断面形状は箱形。暗褐色土を埋土にもつ。埋土から須恵器細片１点、土師器甕片２点が破片で出土。SK190202 の平面形態は溝状を呈し、南北検出長 0.65m、東西 0.60m、深さ 0.05m。断面形状は浅い船底状をなす。暗褐色土を埋土にもつ。SK190203 の平面形態は溝状をなし、北東－南西 0.35m、北西－南東検出長 0.69m、深さ 0.05m。断面形状は浅い船底状で、一部が深くなる。暗褐色土を埋土にもつ。SK190204 の平面形態は崩れた円形で、南北検出長 0.32m、東西 0.62m、深さ 0.10m。断面形状は浅い箱形。暗褐色土を埋土にもつ。SK190205 の平面形態は崩れた円形で、南北 0.66m、東西 1.09m、深さ 0.08m。断面形状は浅い弧状をなし、一部が深くなる。暗褐色土を埋土にもつ。SK190206 の平面形態は崩れた方形で、南北検出長 1.10m、東西検出長 1.37m、深さ 0.20m。断面形状は箱形をなす。黒褐色土、暗褐色土を埋土にもつ。埋土から須恵器壺類１点・甕１点、土師器甕７点、製塩土器１点、越前焼擂鉢１点が破片で出土。



1・2　耕作土
3～7　攪乱
8～13　SK190206埋土
14・15　SK190201埋土
16　SK190204埋土
17・18　地山土

1　黒褐色土 10YR2/2
2　暗褐色土 10YR3/3
3　黒褐色土 10YR2/3(径10cmまでの礫多く含む)
4　暗褐色土 10YR3/3(地山土小ブロック混じる)
5　暗褐色土 10YR3/3(地山土多く混じる)
6　暗褐色土 10YR3/3(地山土小ブロック混じる)
7　にぶい黄褐色土 10YR4/3(暗褐色土混じる)
8　黒褐色土 10YR2/3
9　黒褐色土 10YR2/3（地山土細ブロック混じる)
10　暗褐色土 10YR3/3(地山土小ブロック混じる)
11　黒褐色土 10YR3/2（地山土細ブロック混じる)
12　黒褐色土 10YR2/3
13　暗褐色土 10YR3/3
14　暗褐色土 10YR3/3(地山土多く混じる)
15　暗褐色土 10YR3/3(地山土大ブロック混じる)
16　暗褐色土 10YR3/3(地山土小ブロック多く混じる)
17　褐色土 10YR4/6
18　褐色砂礫土 10YR4/6(径20ｃｍまでの礫多く含む)

1　暗褐色土 10YR3/3
2　褐色土 7.5YR4/6(焼土)

1　黒褐色土 10YR3/2(地山土混じる)
2　暗褐色土 10YR3/3
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3(地山硬化面)
4　褐色土 10YR4/6(地山土)

1　黒褐色土 10YR2/3

1　黒褐色土 10YR3/2

1　暗褐色土 10YR3/3
（地山土混じる）

1　暗褐色土 10YR3/3
（地山土混じる）

1　暗褐色土 10YR3/3
（地山土混じる）

1　黒褐色土 10YR3/2
2　黒褐色土 10YR2/3
3　にぶい黄褐色土 10YR4/3
4　暗褐色土 10YR3/3(地山土混じる)
5　暗褐色土 10YR3/3

1　暗褐色土 10YR3/3
（地山土混じる）
2　暗褐色土 10YR3/3

1　黒褐色土 10YR3/2
（地山土混じる）
2　黒褐色土 10YR2/2

1　黒褐色土 10YR3/2
2　黒褐色土 10YR2/3
（地山土混じる）

1　黒褐色土 10YR3/2
2　暗褐色土 10YR3/3
（地山土混じる）

1　暗褐色土 10YR3/3
2　にぶい黄褐色土 10YR4/2

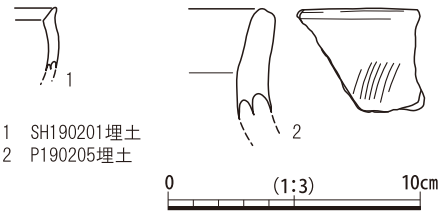
1　黒褐色土 10YR3/2
（地山土若干混じる）

1　暗褐色土 10YR3/3

第 19 図　興道寺廃寺第 19 次調査２トレンチ遺構土層断面図（縮尺 1/60）

（５）柱穴・小穴

P190201 の平面形態は崩れた楕円形で、北東－南西 0.41m、北西－南東 0.58m、深さ 0.26m。断面形状は半円形。P190202 の平面形態は円形で、北東－南西 0.24m、北西－南東 0.21m、深さ 0.11m。断面形状は弧状をなす。P190203 の平面形態は円形で、南北 0.32m、東西 0.35m、深さ 0.40m。断面形状は尖底状をなす。P190204 の平面形態は崩れた楕円形で、南北 0.36m、東西 0.51m、深さ 0.22m。断面形状は半円形。埋土から土師器甕２点が破片で出土。P190205 の平面形態は崩れた楕円形で、南北 0.44m、東西 0.59m、深さ 0.09m。断面形状は浅い弧状をなし、一部が深くなる。埋土から土師器甕３点（第 20 図２）が出土。P190206 の平面形態は円形で、北東－南西 0.21m、北西－南東 0.25m、深さ 0.10m。断面形状は浅い船底状をなす。P190207 の平面形態は円形で、南北 0.35m、東西 0.31m、深さ 0.08m。断面形状は浅い尖底状をなす。P190208 の平面形態は崩れた楕円形で、北東－南西 0.42m、北西－南東 0.53m、深さ 0.04m。断面形状は浅い弧状をなす。埋土から須恵器細片１点が破片で出土。



第 20 図　興道寺廃寺第 19 次調査
２トレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3）

（６）出土遺物

第 20 図１は SH190201 埋土、２は P190205 埋土から出土した。

１は製塩土器。体部は丸みを帯び、口縁端部は上外方に鋭く収める。

２は土師器甕の口縁部。器壁は厚く、口縁部は上方に立ち上がる。頸部の外面に刷毛目が残る。

第５項　　第 18・19 次調査の成果と課題

（１）旧地形の把握

今回の調査地の南側に隣接する広域農道では発掘調査後、地山面が大きく削平されているものと想定されるが、今回の調査地付近は地山面があまり削平されることなく残り、興道寺廃寺が所在する南方から緩やかに標高が低くなる旧地形であったことを確認することができた。

（２）埋没古墳の発見

今回の調査で、円弧状をなす茶の木の垣根に沿って、「狐塚」という小字名の由来となった円墳１基を確認した。『耳村誌稿』に記された明治 44 年(1911)の鉄剣出土を裏付ける成果である。

古墳の北側と東側で周溝にあたる溝をそれぞれ検出し、北側では周溝の内側で墳丘盛土の一部を検出した。東側の周溝は一定程度の改変を受けていたが、そのことを勘案しても径 10mほどの墳丘規模が復元できる。墳丘土のほとんどや埋葬施設が失われている中、周溝の構築にあたって地山層を古墳の墳形に沿って溝状に大幅に掘りくぼめて素掘りした後、この上に土砂を小ブロックごとに積み上げながら周溝の底面を造り出したことが判明した。当地における平野部の小円墳の造営過程を考える上で、例えば興道寺古墳群などに通有的に見られるものか、周辺での古墳調査に目を配る必要があろう。

埋葬施設も失われ、明確に古墳の時期を明らかにできないが、周溝埋土から出土した須恵器の年代を参考にすれば、TK209 型式併行期、７世紀前葉である可能性が高い。ただし第 18 次調査１トレンチから出土した須恵器杯Ｈ（第 15 図４）が TK10 型式併行期まで遡るものと考えられ、先行する時期の須恵器も出土していることから、６世紀から７世紀前葉までのある程度の年代幅を考えておく必要がある。

（3）興道寺廃寺北方集落の展開

興道寺廃寺存続期の遺構、遺物はあまり確認されなかった。ただし、第19次調査1トレンチでは古墳周溝から8世紀の須恵器杯A・皿が出土しており、トレンチ西端で検出した柱穴P190103の埋土からは11〜12世紀頃の製塩土器支脚が出土するなど、古代から中世初期には古墳自体が削平を受け、平地化していた可能性も少なからずあるものと考えられる。

また、明確な時期は不明であるが、竪穴建物跡1棟を検出した。興道寺廃寺の北方、北西方で確認されている8世紀前半の竪穴建物跡では壁面に沿って柱穴が並び、隅部に造り付けカマドを備える構造であることが明らかになっているが、今回、検出した竪穴建物跡にはそのような特徴は認められない。ただし、興道寺廃寺周辺における7世紀後半から8世紀前半の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、柱穴列では南北軸の方位が若干西に振れる程度であるので、この竪穴建物跡も7世紀後半代まで遡る可能性もある。今回の調査地のすぐ北側、県埋蔵文化財調査センター調査区（C区）で竪穴建物跡と考えられる遺構も検出されており、広域農道を越えてさらに北側に竪穴建物跡の分布が広がることが新たに判明し、興道寺廃寺に伴う付属集落がさらに北方に展開している可能性も浮上した。

（4）近世以後の遺構、遺物の確認

第18次調査1トレンチでは、土坑、柱穴列など近世以後に伴うと考えられる遺構群が検出された。土坑SK180101・SK180102の性格については、野溜め状の施設とも考えられたが、大規模に造り、内面は土壁状に塗り固めていること、SK180102底面付近から出土した土壁の中に曲線面をもつものもあり、導水のための施設を備えていた可能性があることなど、水溜め施設と想定される。発掘調査に従事された古老の話によれば、調査地付近には大正時代に馬の市があったという。これらの遺構が大正時代のものか、はっきりはしないが、柱穴列SA180101は馬を繋いでおく杭であった可能性も考えられる。

（5）ネコ科と思われる足跡を残す須恵器杯の出土

第18次調査1トレンチの古墳周溝から、底部内面に小動物の足跡が付着した須恵器杯Hが1点出土した。部分的ではあるが、肉球が認められ、足跡の形状からはネコ科の動物と考えられる〔小宮 2013〕。兵庫県姫路市の見野古墳群でも6号墳東石室からTK209型式の杯Hの底部内面にネコ科の可能性がある小動物の足跡が残る須恵器が出土している〔立命館大学文学部 2011〕。管見に触れる限り、この資料は土器の表面にネコ科と思われる動物の足跡が付着した最古例であり、今回の調査で新たに同時期の資料を蓄積したこととなる。

第8節　興道寺廃寺第17〜19次調査の総括

第17〜19次調査において、興道寺廃寺北方における古墳時代後期から古代にかけての土地利用のあり方や集落の展開について新たな知見を加えることができた。第3章で後述する興道寺遺跡での試掘調査成果を併せて考えると、この時期の集落が寺院北方に大規模に展開するものと考えられる。また、寺院北方で埋没古墳が発見されたことは寺院造営の前史を考える上で重要であり、古墳時代後期における当地の有力氏族の動向を探る上でも無視できないことを改めて確認しておきたい。

今回の調査は遺跡全体からすれば、ごく一部であるが、今後も継続的な発掘調査を実施することで、より興道寺廃寺をとりまく様相が明らかになるものと期待される。

遺跡名	調査次数 調査区	遺　構・層　位	挿図 番号	遺物 番号	種　別	器　種	法　量　(cm)			残存部位	製作技法・調整・施文・文様	焼　成	色　調	備　考
							口径	器高	その他					
興道寺 廃寺	第17次 1tr	排土	第11図	1	須恵器	高杯脚部		(3.3)	脚端部径 (8.5)	脚端部1/3	脚端部内外面：横ナデ、自然釉付着	良	灰色	
		表土下、攪乱土		2	須恵器	杯H	(13.1)	(4.7)	受部径 (15.6)	1/8	底部外面：回転ヘラ削り	良	灰色	
				3	須恵器	杯H	(13.6)	(3.8)	受部径 (16.0)	1/6	底部外面：回転ヘラ削りの後ヘラ切り	良	灰色	
				4	須恵器	壺		(8.3)	体部径 (9.5)	体部1/4	体部外面：回転ヘラ削り・カキメ、自然釉付着	良	灰色	
		黒褐色土層 (近世堆積層)		5	須恵器	杯H蓋	(12.2)	(3.9)		1/8	内外面：横ナデ	やや不良	灰白色	
				6	須恵器	高杯脚部		(4.8)	脚端部径 (9.7)	脚端部1/6	脚部外面：カキメ	良	灰色	
				7	須恵器	甕	(18.9)	(4.5)		口縁部1/8	口縁部外面：カキメ	良	灰色	
				8	須恵器	杯B		(5.6)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ、高台貼り付け	良	灰色	
				9	土錘				長さ7.8、最大幅2.7	ほぼ完形	表面に煤付着	良	橙色	
		黒色土層 黒褐色土層 (中世堆積層)		11	須恵器	杯H蓋		(2.1)		天井部1/4	天井部外面：回転ヘラ削り	良	灰色	
				12	須恵器	杯H蓋	(12.2)	3.5		2/3	天井部外面：回転ヘラ削り	良	灰色	
				13	須恵器	杯H蓋	(13.3)	(3.0)		口縁部1/4	口縁部内外面：横ナデ	良	暗灰色	
				14	須恵器	杯H蓋		(4.4)		1/8	天井部外面：回転ヘラ削り	良	灰色	
				15	須恵器	杯H蓋	(13.4)	(4.6)		口縁部1/8	天井部外面：回転ヘラ削り	やや不良	灰色	
				16	須恵器	杯H	(12.9)	(4.2)	受部径 (14.7)	口縁部1/6	口縁部内外面：横ナデ	良	灰色	
				17	須恵器	杯B蓋		(1.6)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	良	灰色	
				18	須恵器	椀		(1.9)	底部径 (7.9)	底部1/4	底部内外面：ナデ、高台貼り付け	良	灰色	
				19	須恵器	甕		(4.0)		胴部破片	胴部外面：平行叩き、胴部内面：当て具痕ナデ消し	良	灰色	
				20	須恵器	甕		(2.7)		胴部破片	胴部外面：平行叩き、胴部内面：当て具痕	良	灰色	
				21	土師器	甕	(10.8)	(3.6)		口縁部1/8	口縁部内外面：横ナデ	良	にぶい黄橙色	
				22	土師器	甕（把手）		(2.7)		把手	把手外面：刷毛目	良	にぶい橙色	
				24	土師器	皿	(8.5)	(1.4)		口縁部1/8	底部外面：未調整、口縁部内外面：横ナデ	良	にぶい黄橙色	
				25	土師器	皿	(8.6)	(1.0)		口縁部1/4	底部外面：未調整、口縁部内外面：横ナデ	良	にぶい黄橙色	
				26	土師器	皿		(1.3)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	良	橙色	
				27	土師器	皿		(1.6)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	良	にぶい褐色	
				28	土師器	皿		(1.7)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	良	にぶい橙色	
		SD170101		29	鉄	鉄滓			長径6.4、短径3.8	破片				重さ44.0g
		整地層上面		30	須恵器	杯蓋		(0.9)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	良	灰色	
	第18次 1tr	SZ180101- SD1埋土 (上層)	第15図	1	弥生土器	甕	(14.0)	(2.7)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	良	明黄褐色	
				2	弥生土器	壺		(2.5)	底部径 (3.0)	底部片	底部外面：刷毛目	良	にぶい褐色	
				3	土師器	甕	(10.2)	(3.6)		口縁部片	赤彩、口縁部～頸部外面：ミガキ、口縁部内面：横ナデ	良		
				4	須恵器	杯H	(10.0)	(3.2)	受部径 (12.5)	口縁部1/6	口縁部・底部内外面：横ナデ	やや不良	灰色	
				5	須恵器	壺類		(3.9)		体部片	底部外面：平行叩きの後、横ナデ	良	暗灰色	
				6	鉄製遺物	不明			長径4.4、短径2.8					重さ19.8g
		SK180102		7	磁器	丸椀	(7.9)	(4.9)		口縁部1/6	口縁部内外面：ロクロ成形	良	灰白色	
				8	獣骨	イノシシ			長さ9.6、最大幅2.1	大腿骨片（右）			にぶい黄橙色	
		P180103		9	土師器	椀		(2.1)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	やや不良	にぶい黄褐色	
	第19次 1tr	SZ190101 -SD1	第18図	1	須恵器	杯H蓋	(8.8)	(3.3)	立ち上がり高1.3	口縁部1/4	口縁部内外面：横ナデ、天井部外面：回転ヘラ削り	良	青黒色	
				2	須恵器	杯H蓋	(10.7)	(3.4)		口縁部1/8	口縁部内外面：横ナデ	良	緑黒色	
				3	須恵器	杯H	(11.1)	(3.8)	受部径 (13.0)	1/6	底部外面：回転ヘラ削り、底部内面・口縁部内外面：横ナデ	やや不良	灰色	
				4	須恵器	有蓋高杯	(10.3)	(6.8)	受部径 (12.1) 脚部基部径 (4.5)	1/6	底部外面：回転ヘラ削り、 口縁部外面・口縁部内面～底部内面：横ナデ、脚部：横ナデ	不良	灰白色	
				5	須恵器	杯A	(12.4)	(3.2)		口縁部1/8	口縁部内外面：横ナデ	良	青灰色	
				6	須恵器	皿	(8.7)	(1.7)		口縁部1/8	口縁部内外面：横ナデ	やや不良	灰白色	灯明皿
		P190103		7	製塩土器支脚			(4.8)		脚柱部片	中空	良	にぶい褐色	
	第19次 2tr	SH190201	第20図	1	製塩土器			(2.5)		口縁部片	口縁部内面：横ナデ	やや不良	にぶい褐色	
		P190205		2	土師器	甕		(4.4)		口縁部片	頸部外面：刷毛目	良	にぶい黄橙色	外面に煤付着

第２表　興道寺廃寺第 17～19 次調査出土遺物観察表

遺跡名	調査次数 調査区	遺　構・層　位	挿図 番号	遺物 番号	種　別	残存部位	法　量 (mm)	凸面叩き種別 本数/2cm・大きさ	凸面調整 (ナデ消し)	凹面布目 本数/2cm	凹面調整	断面・側面調整	色調	重量 (g)	備　考
興道寺 廃寺	第17次 1tr	黒褐色土層（近世堆積層）	第11図	10	無段式丸瓦	狭端部片	厚12	平行3	横ナデ	●18	枠板圧痕	狭端面の一部削り	黄灰色	85.1	
		黒褐色土層（中世堆積層）		23	平瓦	側縁部片	厚19		縦ナデ	●24	模骨痕	側面・凹凸面側縁削り	浅黄色	115.5	

第３表　興道寺廃寺第 17 次調査出土瓦観察表

第２章　高善庵遺跡(第２・３次調査)

第１節　　高善庵遺跡周辺の環境

第１項　　高善庵遺跡の位置と周辺の地形

高善庵遺跡（福井県遺跡番号 30068）は福井県三方郡美浜町興道寺 37 号高善庵、38 号小山、77 号高達ほかに所在する。遺跡のおよその中心は北緯 35 度 35 分 28 秒、東経 135 度 56 分 50 秒。

興道寺廃寺から南々東へ約900mに位置し、雲谷山(標高 786.6m)から北に派生する小支尾根先端付近(標高 70.50m)の東側斜面の山裾の畑地に所在する。遺跡から北方に興道寺集落や興道寺廃寺、耳川下流域の左岸に広がる低位河岸段丘を見下ろし、標高約 37.0～42m付近に立地する。

遺跡の現況は水田、山裾の緩斜面を開墾した畑地からなり、畑地の一部には茶の木がある。第１章の第３図で示した明治 26 年(1893)に大日本帝国陸地測量部が測図の地形測量図「三方」には高善庵遺跡、特に第１～３次調査地の付近を南北に通過する古道が示されており、明治時代には耳川左岸域の主要な南北道路の一つであったことがうかがえる。第 22 図には、第２・３次調査時に現地で略測した現況地形測量の成果を反映しているが、調査地周辺の畑地は大きく２段の平坦面をもつ。この平坦面の間にかつて道があり、人の往来があったことを発掘調査に従事されている古老より伝え聞いた。この道が明治 26 年の地形測量図に表現される道路と一致するものと考えられる。

第２項　　高善庵遺跡周辺の歴史的環境

第１章と重複する内容もあるが、高善庵遺跡周辺の歴史的環境を述べる(第１章　第５図・第１表)。

遺跡周辺で旧石器時代、縄文時代、弥生時代および古墳時代中期までの遺跡は確認されていない。

古墳時代後期の遺跡として、興道寺遺跡(18)、上野遺跡 (31) などがあり、高善庵遺跡の北側と南側にこの時期の集落が展開するようである。ただし、興道寺遺跡では遺跡の南側での調査事例が希薄であり、上野遺跡においてもこれまで調査事例がないことから、その具体相は不明である。

一方で、高善庵遺跡から支尾根を挟んだ西側斜面の山裾には興道寺窯跡 (27) が所在する。窯の構造、出土遺物、時期などは前章で概述したとおりであるが、耳川流域において唯一の古墳時代後期の須恵器窯である。

遺跡北方の低位河岸段丘には10 数基からなる興道寺古墳群の所在が知られる以外に、福井県教育委員会発行の『福井県遺跡地図　平成４年度』には高善庵遺跡から小支尾根を挟んだ西側の斜面に高達古墳群(28)がドットリングされているものの、現地に古墳が所在する痕跡は見い出せない。第21 図には『福井県遺跡地図』で示される古墳群の位置を示すに留めた。

周辺の律令期の集落遺跡として、興道寺遺跡、上野遺跡などがある。興道寺遺跡では遺跡北縁部の付近で竪穴建物跡や掘立柱建物跡など複数の建物遺構が検出されていること、上野遺跡では８～９世紀の須恵器、土師器、製塩土器が採集されていること以外に、周辺遺跡の動向が不明であることは古墳時代後期のあり方と同様である。

遺跡の北西縁部、支尾根先端には日枝神社が鎮座し、背後の斜面が法面化しているが、かつては弥美小学校西分校などの建物も建ち、一部で土砂掘削が行われているなど周辺では旧地形が変貌している。

第３項　　高善庵遺跡における既往の調査研究

高善庵遺跡ではこれまで瓦窯の存在が推定されてきた。昭和38年（1963）発行の『福井県遺跡台帳目録』、同39年（1964）発行の『美浜町文化財調査台帳』には遺跡に関する記載はなく、当然、地誌にあたる『三方郡誌』などにもその記述はない。平成５年（1993）、『福井県遺跡地図　平成４年度』46図に「遺跡番号30068　高善庵遺跡、種別　散布地、所在地　興道寺、時代　古墳・平安」と遺跡として掲載されたのが、周知の埋蔵文化財包蔵地としての初見である。これによれば、これまでに古墳時代と平安時代の須恵器・土師器片が採集されている。

しかし、高善庵遺跡の一部が瓦窯であることが水野和雄氏によって指摘されており〔北陸古瓦研究会1987、水野2006〕、興道寺廃寺に瓦を供給した瓦窯の所在が明らかではない中、有力な瓦窯推定地の一つとなっている。水野氏は弥美小学校西分校（現在は廃校）、西保育所（現在は子育て支援センター）の付近に瓦窯の存在を指摘しており、その根拠資料として昭和12年（1937）に小字高善庵から出土したことを墨書する瓦片４点（丸瓦３点、平瓦１点）を挙げている。小字高善庵は遺跡の東寄り、第１～３次調査地や弥美小学校西分校、西保育所の東隣に位置する。

第21図　高善庵遺跡位置図（縮尺1/2,500）

この伝世の瓦片に関しては『2007 年報告』、『2016 年総括報告』に実測図を収録し、観察所見を概述したが、製作技法や胎土が興道寺廃寺出土瓦と酷似し、平瓦が焼け歪んでいる。また、平成 10 年度（1998）に美浜町教育委員会が実施した分布調査で、子育て支援センター北側の興道寺 77 号３番の畑地（第１～３次調査地付近）から瓦片、底部に高台をもつ須恵器杯の破片を若干採集している。

興道寺廃寺の出土瓦に一枚作り技法のものが存在しないので、瓦窯自体も有畔式平窯の構造であるとは考えられず、おそらくは山裾の緩斜面に所在する登り窯で須恵器とともに焼成されていたものと推測される。これらのことからも、やはり付近に興道寺廃寺に瓦を供給した瓦窯が存在する可能性があり、興道寺廃寺の創建とその後の寺院造営のあり方を考える上でも重要な問題を含んでいる。

第２節　　調査に至る経緯と経過

第１項　　高善庵遺跡の発掘調査に至る経緯と経過

高善庵遺跡における初めての発掘調査は、瓦窯の検出を目的として平成 15 年度（2003）に実施した発掘調査である。この第１次調査の内容については『2007 年報告』で概述したが、調査では瓦窯の検出、瓦の出土に至らず、瓦窯の存否は不明の残ったままとなっていた。その後、興道寺廃寺の発掘調査が本格化し、高善庵遺跡の発掘調査が継続されることはなかったが、『2016 年総括報告』の刊行を経て、興道寺廃寺の寺域外で発掘調査が進む中で、高善庵遺跡で発掘調査を行う機運が高まった。

平成 29 年度（2017）は３か所のトレンチを設定して第２次調査を行い、令和元年度は１か所のトレンチを設定して第３次調査を行った。第 22 図に第１～３次調査の調査区の位置を示した。

第２次調査については、興道寺廃寺等調査指導委員会に調査指導を仰ぎ、前述の委員各位にご指導を賜った。その後、同委員会解散のため、第３次調査では学識者の調査指導は受けていない。発掘調査では、土地所有者である木村毅、澤田要一、西野民男の各氏のご理解、ご協力を賜った。

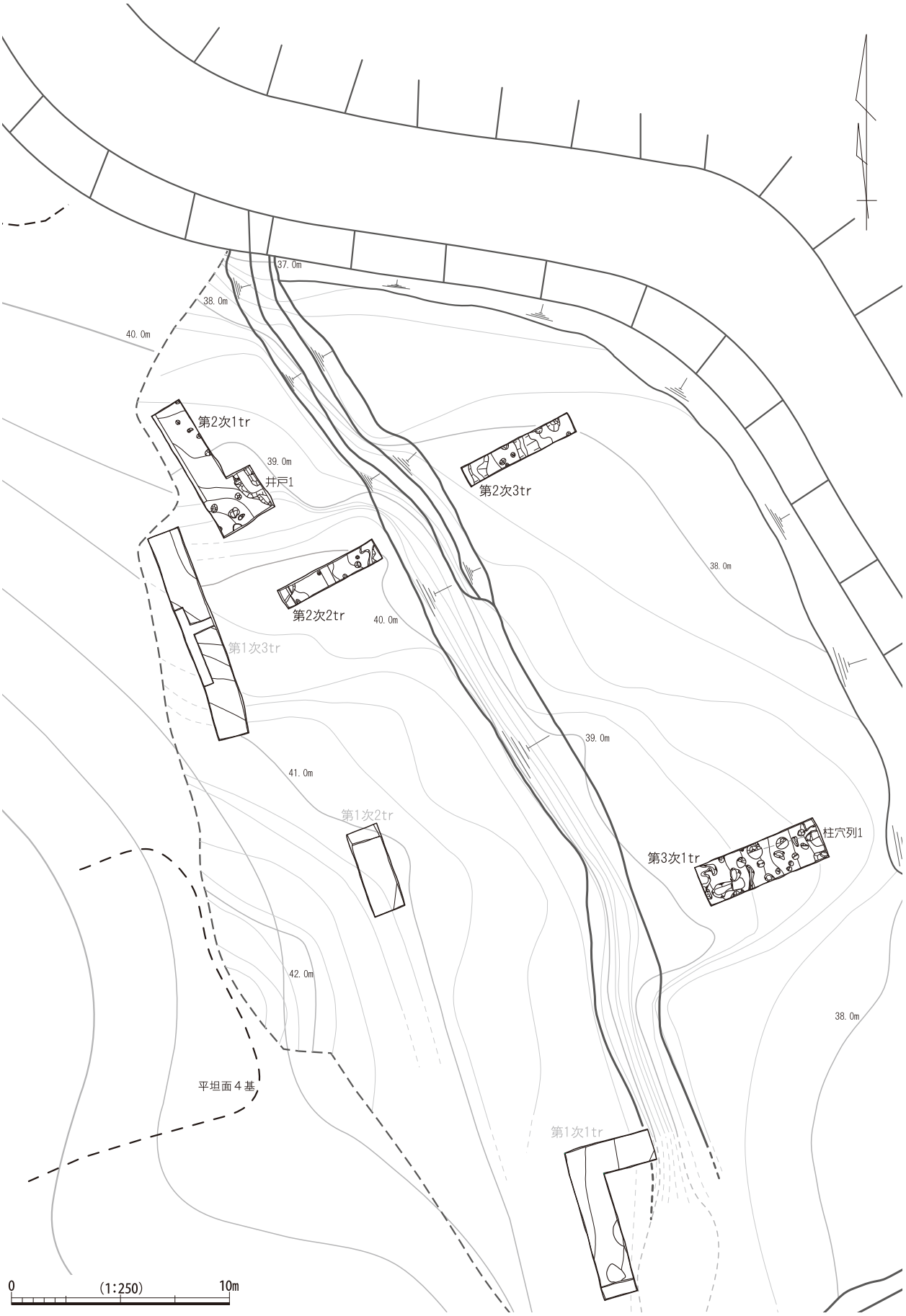
第２項　　現地調査の手続き、方法

文化財保護法に関する手続きについて、調査の実施にあたって文化財保護法第 99 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査通知書を福井県教育委員会に提出した上で調査に着手した。調査終了後は、遺失物法第 13 条の規定により敦賀警察署長に対して埋蔵文化財発見届を速やかに提出するとともに、福井県文化財保護条例第 57 条の２第１項の規定により福井県教育委員会に対して埋蔵文化財保管証を提出した。第２次調査については、福井県教育委員会から敦賀警察署長に対する文化財認定を経た後、福井県教育委員会から埋蔵文化財の譲与を受けている（第３次調査については手続き中）。

発掘調査は、調査地が狭小で、水路などもあり、パワーショベルなどの掘削機械の搬入が困難なため、第１次調査以後、表土の掘削から埋め戻しまで全て人力作業で行った。調査区の設定は土地の地割に沿っているため、東西軸、南北軸に斜交している。第３次調査では遺構の掘削は半裁に留めたが、第２次調査では遺構検出面での湧水が激しかったため、土層断面図化、写真撮影の上、完掘した。

遺構の記号として、柱穴列…SA、井戸…SE、土坑…SK、溝…SD、柱穴・小穴…P など、遺構種別ごとにそれぞれ略号を付した。本書収録の遺構図などは基本的に略号で表示した。遺構番号は興道寺廃寺の発掘調査と同様、調査次数の２桁＋トレンチ番号＋遺構番号という６桁の遺構番号の表示とした。

遺構平面図、遺構土層断面図、トレンチ土層断面図など調査図面の作成は、調査担当者と作業員が協力して進めた。トレンチ幅の中央に２点の基準点を設定し、それを図根点として遣り方測量を基本



第 22 図　高善庵遺跡第２・３次調査トレンチ配置図（縮尺 1/250）

として、一部は平板測量を併用して原則として1/20の縮尺の平面図、土層断面図などを作成した。

写真は、記録用として35㎜一眼レフデジタルカメラを使用して撮影した。基本的にはトレンチごとに遺構の検出段階、遺構の掘削（半裁）段階、調査の最終段階で全体の写真撮影を行い、必要に応じて、個別遺構の詳細写真、遺構の土層断面、遺物等出土状況の写真撮影を行った。

第３項　　整理作業の方法と報告書の作成

前章で述べたように、興道寺廃寺第17～19次調査において実施した内容と同一であり、本項では再述しない。

第２次調査３トレンチ出土の土製品（第30図４）は、株式会社太陽測地社福井支店が実測したものを使用したことを付記する。

第３節　　高善庵遺跡第２・３次調査の概要

第１項　　第１次調査の概要

第１次調査は３か所のトレンチを設定し、平成15年(2003)６月23日から７月18日まで面積36.0㎡の発掘調査を実施した。以下に、第１次調査の調査区設定の根拠と調査の内容について述べる。

〔第１次調査（平成15年度・2003)〕

前述のとおり調査地は大きく上下２面の平坦面からなり、その間には法面と細い通路がある。高善庵遺跡での調査事例がない中、過去の分布調査では下側の平坦面で瓦片、須恵器片が採集されていることから、上側の平坦面に何らかの遺構があることを想定し、調査の取り掛かりとして基礎データを得るために、畑地の中でも最も標高が高い40～42mのあたりに１～３トレンチを設けた。

発掘調査ではいずれのトレンチでも表土の耕作土の下、極めて浅いところで暗褐色系の砂質土からなる地山面を検出したが、遺構、遺物ともに確認されなかった。最も北側に位置する３トレンチで表土と地山面の間に黒褐色系の堆積土が分布していたが、遺物の包含は全く見られなかった。

第２項　　第２・３次調査の概要

前述のとおり、第１次調査後、今日まで瓦窯の未確認という課題が残ったままであったため、瓦窯を検出し、興道寺廃寺との関係性を明らかにすることを目的として、平成29年度(2017)と令和元年度(2019)に内容確認調査を実施した。

第２・３次調査は第１次調査と同様、美浜町興道寺77号高達３番に４か所のトレンチを設定した。第２次調査は平成30年(2018)１月31日から同３月23日まで、第３次調査は令和元年11月12日から同11月29日まで発掘調査を行っている。第１次調査の面積が36.0㎡、第２次調査の面積が22.6㎡、第３次調査の面積が11.5㎡、合わせて70.1㎡の調査面積である。

第４節　　高善庵遺跡第２・３次調査

第１項　　第２・３次調査の目的

第１次調査では全く瓦窯の痕跡を確認することができず、またそれ以後、長く調査が行われていな

かったことから、第２次調査では第１次調査が行われた標高 40～42m付近の地点から一段低く、かつ日枝神社に近い標高 38～40mの地点にトレンチを設けた。現地に残る上下２面の平坦面のうち、２トレンチが上の平坦面、下の平坦面が３トレンチ、１トレンチはその傾斜面に位置する。第３次調査は、第２次調査３トレンチと同様、下の平坦面に１トレンチを設けた。第２次調査の南方に位置する。

第２・３次調査は、①旧地形の把握、②遺構・遺物の存否および様相確認を目的として調査を行った。

①について、調査地付近は北や東に向けて標高が低くなる山裾の緩斜面で、前述のとおり中央の小道を挟んで西側が一段高く、逆に東側が一段低い平坦地であるなど、一定程度の土地改変が認められる。小道の一部では山肌の地山土や軟岩盤が露頭している場所もあり、小道を挟んで西側は盛土、東側は削平によって現地形が形成されたものと考えられるが、旧地形とその造営時期を把握することで、瓦窯の存否の痕跡を明らかにすることを目指した。

②については、かつて瓦片や須恵器片が採集された地点の近接地で瓦窯を含めた遺構・遺物の存否、様相を確認することで、寺院と瓦窯との関係性の一端を明らかにすることを目指した。

第２項　　第２次調査１トレンチの調査（第 23～25 図）

（１）基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 38.85～39.6mである。地表面の地形が北に向かって窪地状になっていたため、調査前は瓦窯の存在も想定された。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚 0.1～0.3m）下、トレンチの南端では標高 39.25m付近で地山面となる黒褐色土層の上面に、トレンチの中央付近では標高 38.9m付近で地山面となる明黄褐色土層の上面に、またトレンチの北端では標高 38.65m付近で地山面となる明黄褐色土層の上面に至る。地山面は北に向かって大きく傾斜し、0.6mの比高差をもつ。トレンチ西壁に沿って地山層を断ち割ったところ、明黄褐色土層は 0.3mほどの厚みがあり、その下は浅黄橙色粘土からなる軟岩盤層となり、この境から湧水する。

トレンチの南端付近には表土下に水分が多い黒色土・黒褐色土（層厚 0.1～0.2m）からなる堆積層が分布し、その下の地山層は黒褐色土、にぶい黄橙色粘土であるが、この地山層上面から湧水があり、全体的に粗砂が多く含まれている。

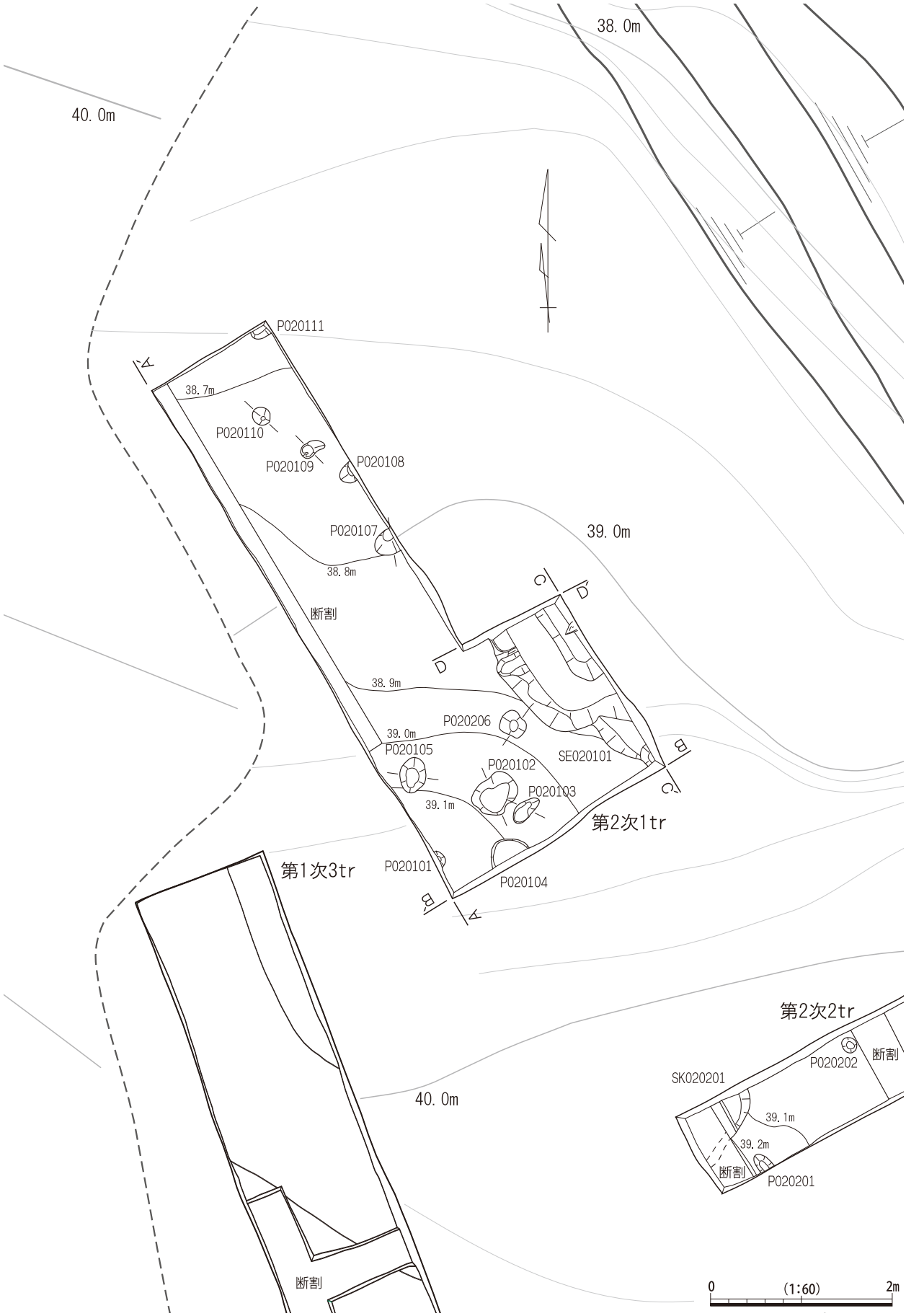
表土から土師器皿片１点、砥石片１点が、堆積層の黒褐色土層からは土師器皿８点・土師器の細片２点が出土。

（２）検出遺構の概要

地山面で井戸１基(SE020101)、柱穴・小穴 11 基（P020101～P020111）を検出した。

（３）井戸跡

SE020101 は西側が部分的に検出された。全体の規模は不明であるが、北東－南西の検出長 2.09m、北西－南東の検出長 0.99mを測る。深さ 0.47mで、断面形状は箱形となる。井戸の掘り方は方形で、井戸枠材は既に除かれているが、方形木枠であったものと考えられ、底面に井戸枠の痕跡がわずかに残る。地下水位が高く、調査時は一晩経つとある程度の高さまで冠水した。黒褐色土、黒色土を埋土にもつ。埋土は一括での埋め戻し堆積であり、トレンチの南東隅からの掘り込みは人為的な井戸の破壊に伴うものと考えられ、埋土の上位に認められる撹乱はこれに伴う再堆積土であろう。



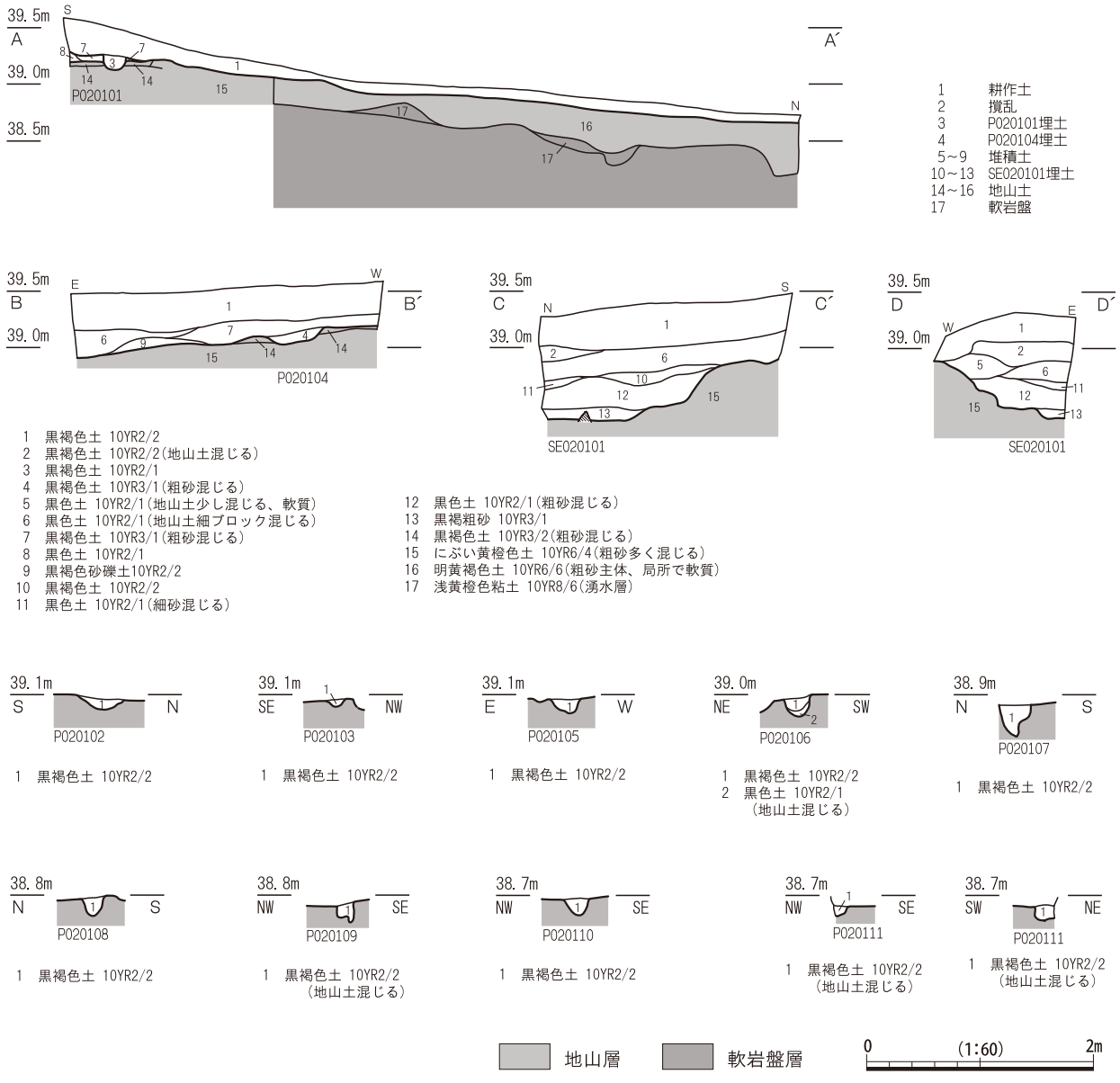
第 23 図　高善庵遺跡第２次調査１トレンチ遺構平面図（縮尺 1/60）

井戸枠の部分の埋土から土師器皿片１点（第 25 図１）・土師器の細片２点が出土し、埋土の黒褐色土層から土師器皿片１点・土師器の細片３点が出土した。また、上位の撹乱土から須恵器細片１点、灰釉陶器細片１点、土師器甕片３点・皿片 30 点（同２～５）・土師器の細片７点が出土した。

（４）柱穴・小穴

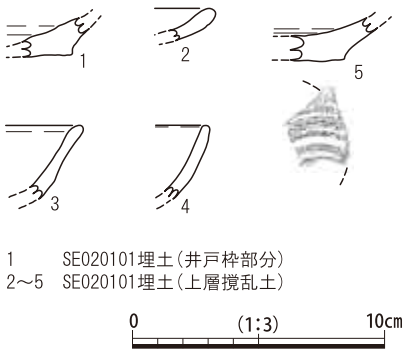
柱穴を構成すると考えられるものはなく、いずれも規模が小さく、底面まで浅い小穴群である。

P020101 の平面形態は円形で、南北 0.15m、東西検出長 0.07m、深さ 0.14m。断面形状は半円形である。P020102 の平面形態は崩れた円形で、北東－南西 0.49m、北西－南東 0.41m、深さ 0.14m。断面形状は弧状をなす。P020103 の平面形態は楕円形で、北東－南西 0.35m、北西－南東 0.17m、深さ 0.08m。断面形状は半円形。P020104 の平面形態は円形で、南北 0.23m、東西 0.44m、深さ 0.20m。断面形状は船底状をなす。P020105 の平面形態は楕円形で、南北 0.39m、東西 0.30m、深さ 0.13m。断面形状はいびつな半円形。P020106 の平面形態は崩れた楕円形で、北東－南西 0.26m、北西－南東 0.30m、深さ 0.19m。断面形状は半円形。P020107 の平面形態は楕円形で、南北 0.28m、東西検出長



第 24 図　高善庵遺跡第２次調査１トレンチ遺構土層断面図（縮尺 1/60）

0.24m、深さ 0.28m。断面形状は尖底状をなす。P020108 の平面形態は円形で、南北 0.21m、東西検出長 0.14m、深さ 0.17m。断面形状は半円形。P020109 の平面形態は崩れた楕円形で、南北 0.17m、東西 0.28m、深さ 0.18m。断面形状は箱形で、一部が深くなる。P020110 の平面形態は円形で、南北 0.20m、東西 0.20m、深さ 0.15m。断面形状は半円形。P020111 の平面形態は楕円形で、南北検出長 0.13m、東西検出長 0.20m、深さ 0.10m。断面形状は箱形。



第 25 図　高善庵遺跡第２次調査１トレンチ
出土遺物実測図（縮尺 1/3）

（５）出土遺物

第 25 図１は SE020101 埋土のうち井戸枠の部分から、２～５は同じく埋土上位の撹乱土から出土した。

１～５は土師器皿。１の底部は平らで、外面に糸切り痕が残る。口縁部の外面には強い横ナデを施す。２の口縁端部は肥厚し、丸く収める。３の口縁部は外上方にまっすぐ立ち、口縁端部を丸く収める。口縁部の内外面に丁寧な横ナデを施す。４の口縁部は内弯して立ち、口縁端部は面をなす。口縁部の内外面に横ナデを施す。５の底部外面に糸切り痕を残し、口縁部の外面に強い横ナデを施す。

第３項　　第２次調査２トレンチの調査（第 26～28 図）

（１）基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 39.9～40.1mである。地表面の地形はほぼ平坦である。

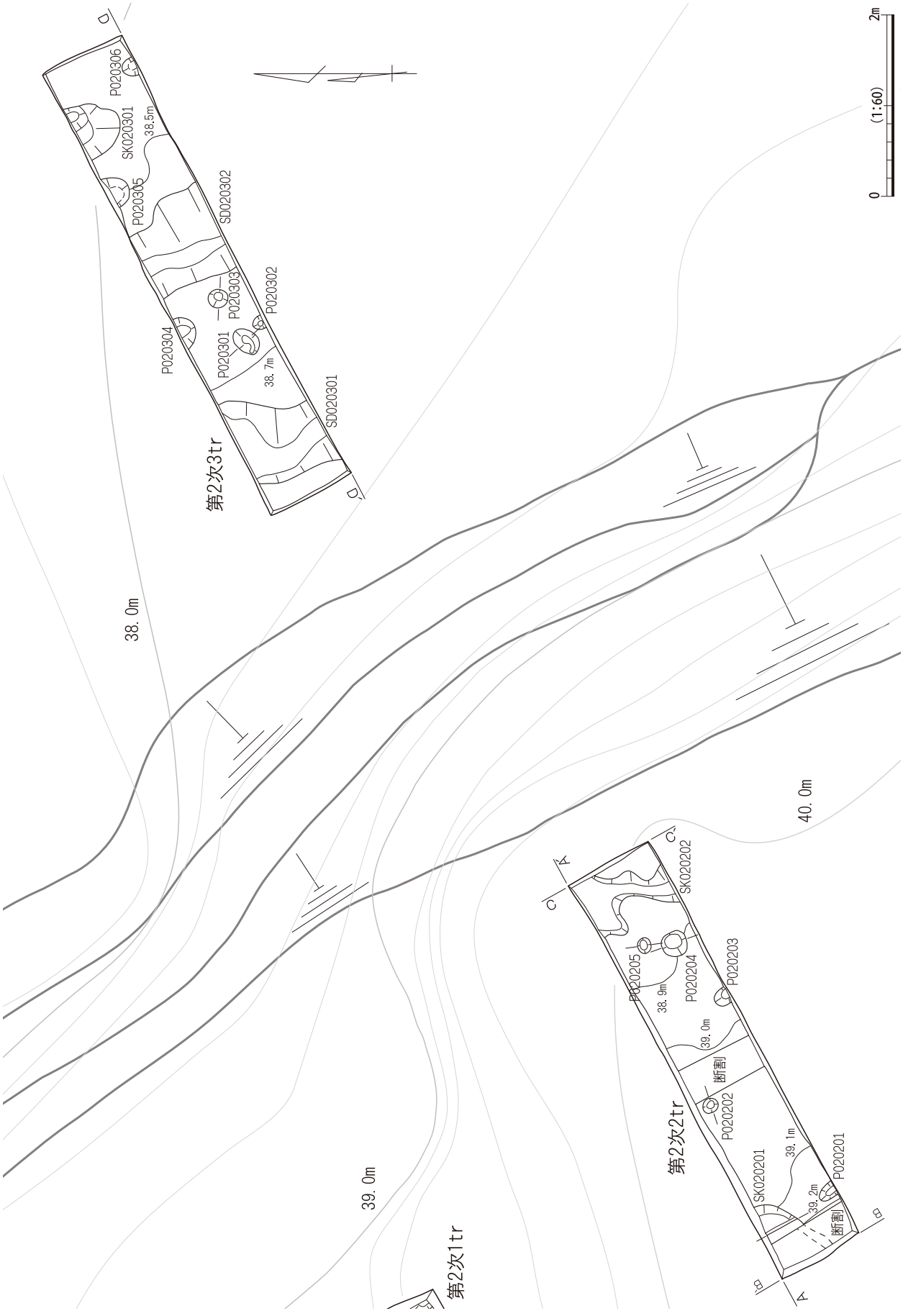
表土の耕作土となる黒褐色土（層厚 0.2～0.35m）下、トレンチの西端では標高39.15m付近で、トレンチの東端では標高 38.8m付近で地山面となるにぶい黄褐色土層の上面に至る。地山面は東に向かって緩やかに傾斜し、0.35mの比高差をもつ。地山土は粗砂質で湧水が激しい。表土から須恵器細片１点、土師器皿片９点・台付皿１点・土師器の細片９点、近代陶磁器の細片１点、現代の瓦片５点、鉄片１点が出土した。

表土下に黒褐色土（層厚 0.2mほど）が水平に堆積するが、その下には黒色土、黒褐色土、暗褐色土が 0.1～0.2mほどの厚みをもちながら東側から積み上げたように堆積している。この堆積層は現地形に見られる高低差のある平坦面が造成された際に盛土された整地土にあたる。この盛土された土から須恵器壺類と思われる破片１点(第 28 図１)・須恵器の細片２点、土師器甕片２点（うち１点は把手)・皿片 114 点(同２・３)・土師器の細片 17 点、近代の陶磁器細片１点が出土した。標高が低い部分に分布していた遺物が盛土の際に混入したものと考えられる。

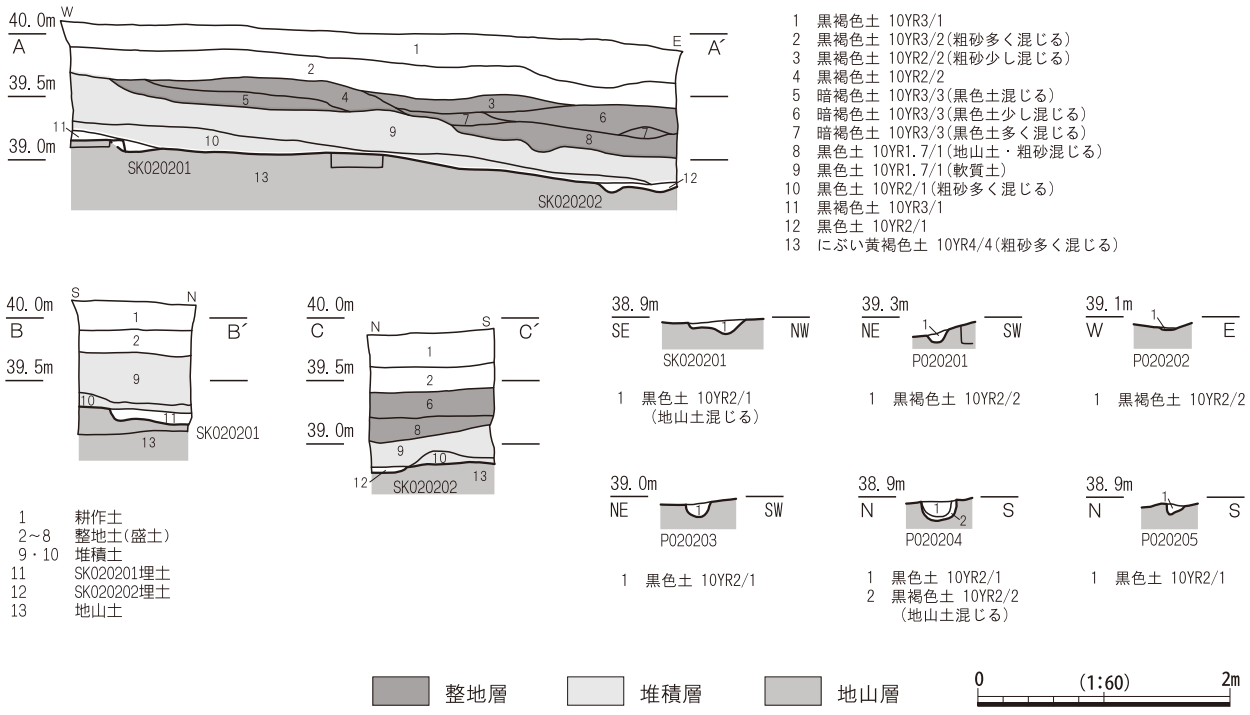
その下位には 0.2～0.3mほどの厚みがある黒色土が地山面の傾斜に沿って東に向かって傾斜しながら堆積する。破片で土師器甕１点・皿 21 点（同４～６)、台付皿１点（同７)・土師器の細片５点などが出土するとともに、堆積土には粗砂が一定程度含まれており、周辺からの流れ込みによる堆積があったものと考えられる。

（２）検出遺構の概要

地山面で土坑２基（SK020201・SK020202）、柱穴・小穴５基（P020201～P020205）を検出した。



第 26 図　高善庵遺跡第２次調査２・３トレンチ遺構平面図（縮尺 1/60）



第 27 図　高善庵遺跡第２次調査２トレンチ遺構土層断面図（縮尺 1/60）

（３）土坑

SK020201 の平面形態は円形を呈するものと思われ、南北検出長 0.43m、東西検出長 0.43m、深さ 0.10m。断面形状は箱形。黒褐色土を埋土にもつ。SK020202 の平面形態は崩れた溝状をなし、南北 0.61m、東西検出長 1.00m、深さ 0.12m。断面形状は弧状をなし、一部が深くなる。黒色土を埋土にもつ。

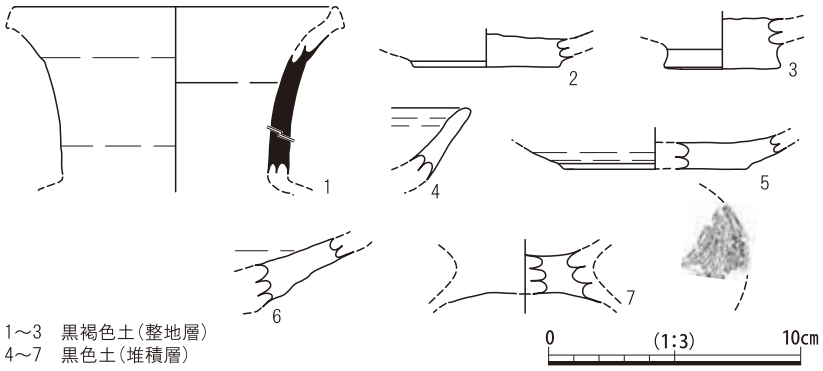
（４）柱穴・小穴

P020201 の平面形態は長楕円形で、北東－南西 0.16m、北西－南東検出長 0.22m、深さ 0.10m。断面形状は半円形。P020202 の平面形態は円形で、南北 0.16m、東西 0.17m、深さ 0.03m。断面形状は弧状をなし、極めて浅い。P020203 の平面形態は楕円形で、南北検出長 0.19m、東西 0.20m、深さ 0.12m。断面形状は半円形。P020204 の平面形態は円形で、南北 0.28m、東西 0.27m、深さ 0.17m。断面形状は半円形。P020205 の面形態は円形で、南北 0.15m、東西 0.17m、深さ 0.08m。断面形状は尖底状をなす。

（５）出土遺物

第28図１～３は整地層（盛土層）のうち黒褐色土から、４～７は堆積層の黒色土から出土した。

１は須恵器壺か瓶の頸部。口縁部はまっすぐに立ち、内外面ともに強い横ナデを施す。２・３は土師器皿。２は底部外面に



第 28 図　高善庵遺跡第２次調査２トレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3）

糸切り痕を残す。３は土師器皿。底部径 3.8㎝。底部には円柱状の高台を備え、底部の外面にわずかに糸切り痕を残す。

４・５は土師器皿。４の口縁部は外上方にまっすぐ立ち、口縁端部を丸く収める。口縁部に横ナデを施す。５は外方に口縁部が立ち、底部外面には明瞭な糸切り痕を残す。

６は大型の土師器皿か。器壁は厚く、外面に強い横ナデを施し、指頭圧痕を残す。

７は土師器台付皿。外に開く低い脚台が付くものと思われる。底部内面にナデを施す。

第４項　　第２次調査３トレンチの調査（第 26・29・30 図）

（１）基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 38.0～38.2ｍである。２トレンチの地表面の標高とは 1.9ｍほど低い。地表面の地形はほぼ平坦である。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.2～0.3m）下、トレンチの西端では標高 37.9m付近で、トレンチの東端では標高 37.4m付近で、にぶい黄橙色の軟岩盤層の上面に至る。２トレンチの土層断面で確認されたように、土地造成時に地山面が大規模な削平を受け、元々は存在したであろう粘土層の地山層が失われ、軟岩盤層の面が現れているものと考えられる。軟岩盤層は凹凸をもちながら東に向かって緩やかに傾斜し、0.5ｍの比高差をもつ。

２トレンチ東端の地山面の標高が約38.8ｍで、３トレンチ西端の軟岩盤層の標高が約 37.9ｍと、その比高差は 0.9ｍに収まり、３トレンチで粘土の地山層が削平されていることを勘案すると、元来は比較的緩やかな山裾の緩斜面の地形であったものと考えられる。

表土下に黒褐色土が 0.2ｍほどの厚みをもちながら東側に流れるように堆積する。地山面の削平を受けた後に軟岩盤層の上に堆積したものと考えられる。

表土から須恵器杯蓋片１点、土師器皿片 10 点・台付皿片１点・土師器の細片６点、陶磁器細片４点が出土し、堆積層から須恵器杯片２点・甕の胴部片１点・須恵器の細片３点、土師器皿片 16 点（第 30 図１～３）、土師器の細片 17 点、土製品１点（同４）が出土した。

（２）検出遺構の概要

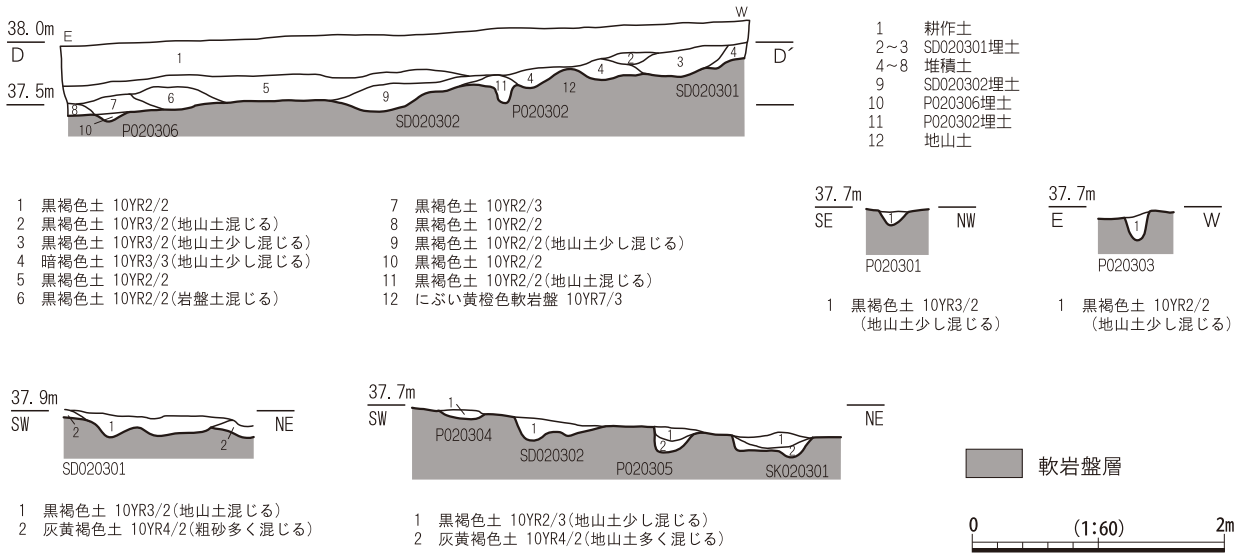
地山面で溝２条（SD020301・SD020302）、土坑１基（SK020301）、柱穴・小穴６基（P020301～P020306）を検出した。なお、これらの遺構は軟岩盤層に掘り込まれたもので、堆積層と遺構の埋土が同質のものもあり、地山層の削平時に軟岩盤層の上面に残された土取り痕跡である可能性も少なからずある。

（３）溝

SD020301、SD020302 ともに南北に延び、断面形状は弧状をなす。黒褐色土を埋土にもつ。SD020301 は南北検出長 0.94ｍ、東西 0.98ｍ、深さ 0.22ｍ。SD020302 は南北検出長 0.96ｍ、東西 1.00ｍ、深さ 0.19ｍ。SD020302 の埋土から土師器椀１点（第 30 図５）・皿５点が破片で出土。

（４）土坑

SK020301 の平面形態は崩れた円形で、南北検出長 0.51ｍ、東西 0.62ｍ、深さ 0.20ｍ。断面形状は箱形。



第 29 図　高善庵遺跡第２次調査３トレンチ遺構土層断面図（縮尺 1/60）

（５）柱穴・小穴

P020301 の平面形態は楕円形で、北東－南西 0.34m、北西－南東 0.22m、深さ 0.10m。断面形状は尖底状をなす。P020302 の平面形態は円形で、北東－南西 0.15m、北西－南東検出長 0.11m、深さ 0.22m。断面形状は船底状をなす。P020303 の平面形態は円形で、南北 0.22m、東西 0.20m、深さ 0.23m。断面形状は尖底状をなす。P020304 の平面形態は円形で、南北検出長 0.19m、東西 0.37m、深さ 0.08m。断面形状は弧状をなす。P020305 の平面形態は円形で、南北検出長 0.21m、東西 0.33m、深さ 0.21m。断面形状は箱形をなす。埋土から土師器皿１点（第 30 図６）が破片で出土。P020306 の平面形態は円形で、南北検出長 0.15m、東西 0.20m、深さ 0.06m。断面形状は弧状をなす。

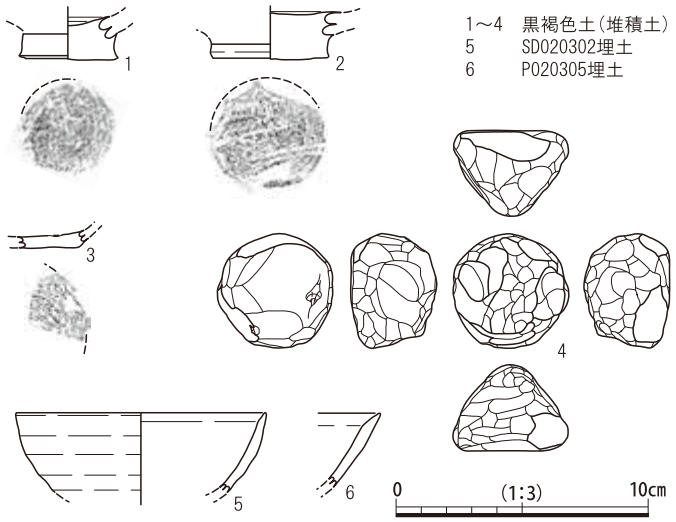
（６）出土遺物

第 30 図１～４は地山層削平後の堆積土、５は SD020302 埋土、６は P020305 埋土から出土した。

１～３は土師器皿。１・２は底部に円柱状の高台をもち、底部外面は糸切り痕をわずかに留める。１の高台径 2.4cm、２の高台径 4.6cm と法量差がある。３の器壁は薄く、底部外面に明瞭に糸切り痕を残す。４は把手状の土製品。平面は円形を呈し、側面は三角形もしくは半円形をなす。底部は平らで、上部２か所に指頭ほどのくぼみをもち、親指と人差し指で摘まむような形状をなす。表面には工具による不定方向のナデが残る。

５は土師器椀。器壁は薄く、丸みを帯びて立ち上がる。口縁部は内弯し、口縁端部は鋭く収める。口縁部の外面に弱い横ナデを施す。

６は土師器皿。器壁は薄く、口縁部は外上方にまっすぐ伸び、口縁端部を鋭く収める。口縁部の内外面に横ナデを施す。



第 30 図　高善庵遺跡第２次調査３トレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3）

第５項　　第３次調査１トレンチの調査（第 31～33 図）

（１）基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 38.5～38.85m。東側に向かってわずかに傾斜する地形である。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚 0.2～0.3m）下、トレンチの西端では標高 38.65m付近で、トレンチの東端では標高 38.05m付近で地山面となるにぶい黄褐色粘土層の上面に至る。地表面に対して地山面は東に向かって大きく傾斜し、0.6mの比高差をもつ。

表土下に黒色土・黒褐色土など（層厚 0.1～0.2m）からなる堆積層が地山面の傾斜に沿って分布する。

表土から土師器の細片 12 点、陶磁器細片１点、現代の瓦片１点、煉瓦片４点、鉄釘３点が出土し、堆積層から須恵器杯H蓋片１点（第 33 図１）、土師器の細片１点が破片で出土した。また古代の平瓦片１点を採集している。

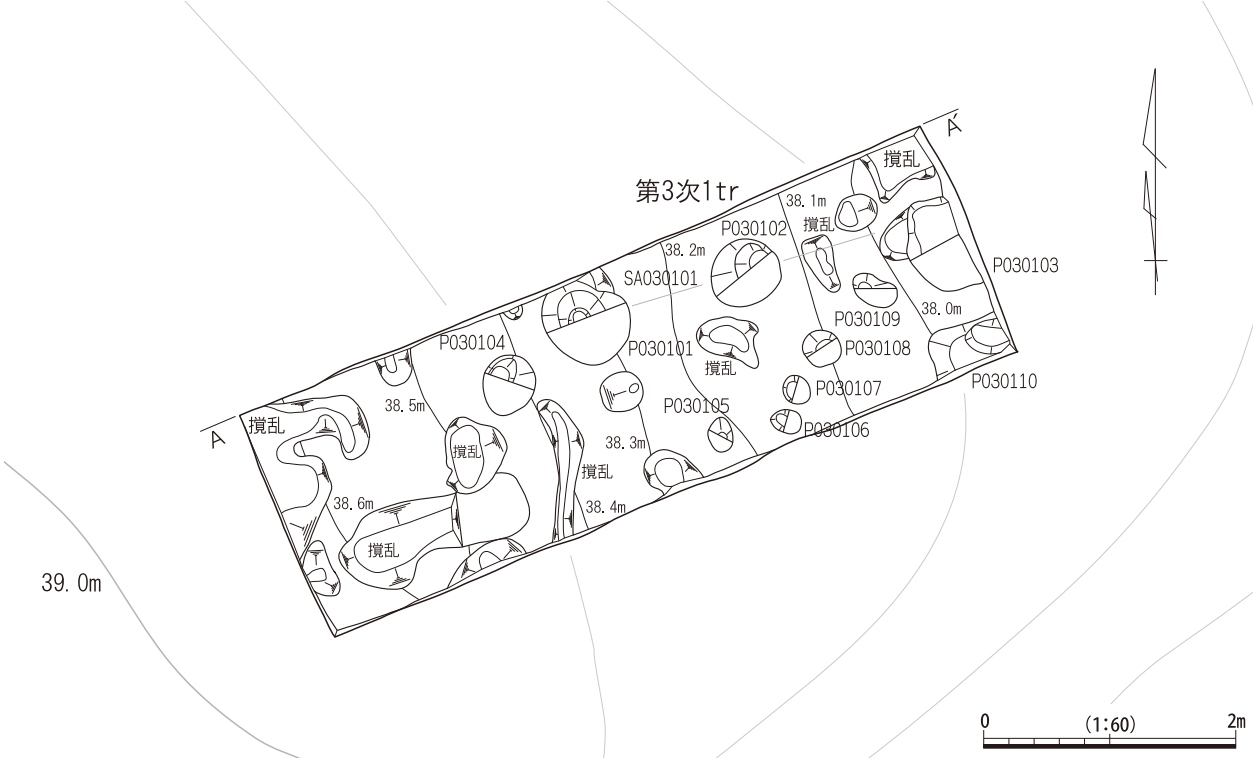
（２）検出遺構の概要

地山面で柱穴列１基（SA030101）、柱穴 10 基（P030101～P030110）を検出した。地山面に掘り込まれた撹乱 12 基が確認されている。

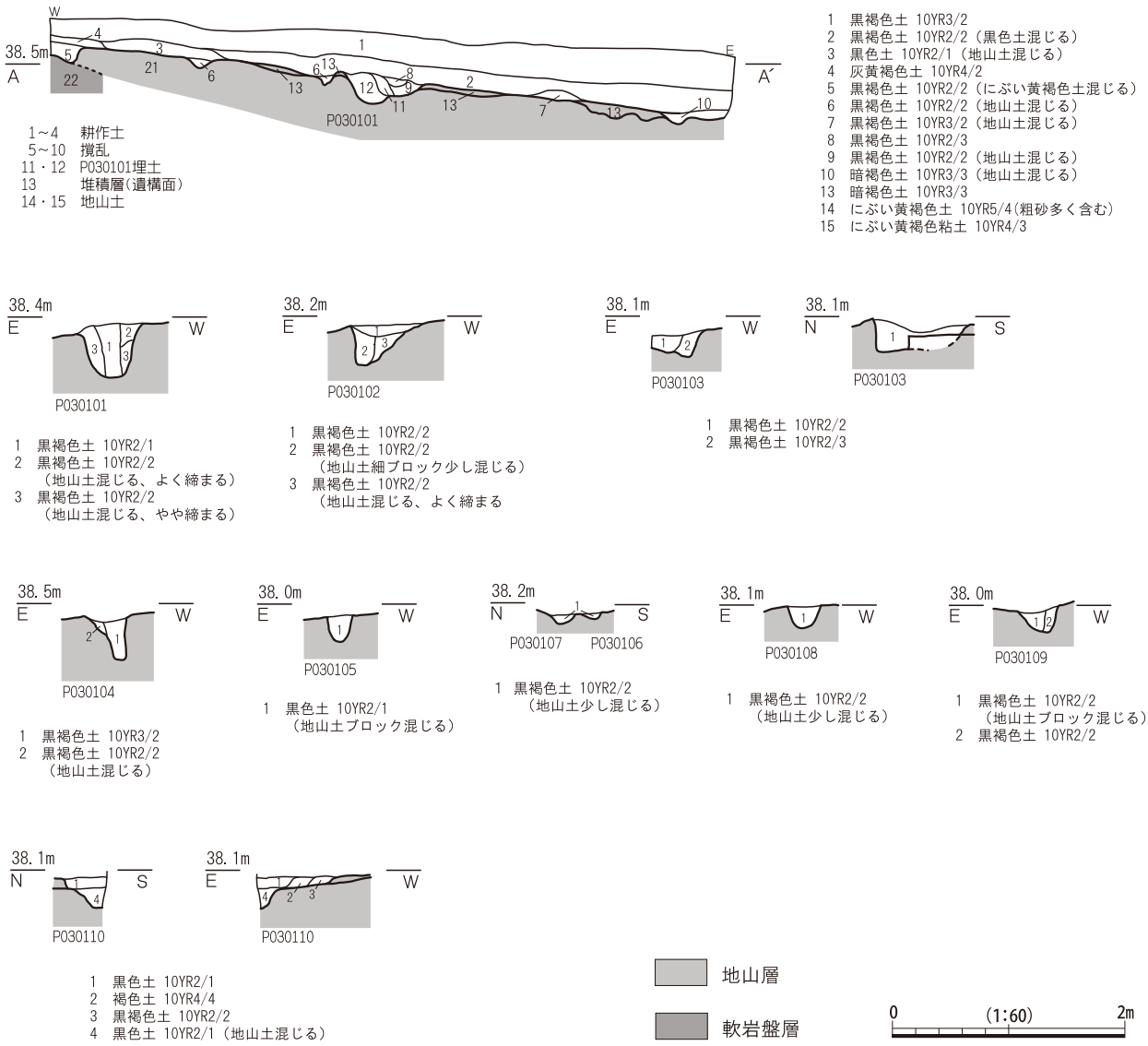
（３）柱穴列

柱穴列１基（SA030101）を検出した。P030101～P030103 の３基の柱穴が東西に並んで柱穴列を構成する。西側と南側には柱穴の延長が認められないが、調査地外を含めて掘立柱建物跡の一部を構成している可能性はある。

P030101 と P030102 の土層断面に柱穴の掘り方と柱当たりが認められる。SA030101 の柱筋の柱間は 1.5mほど、柱穴の掘り方の径は約 0.5～0.7mである。底面まで深く、断面形状は尖底状をなし、柱の部分が最も深くなる。底面の標高は 37.9m前後とよく揃う。



第 31 図　高善庵遺跡第３次調査１トレンチ遺構平面図（縮尺 1/60）



第 32 図　高善庵遺跡第３次調査１トレンチ遺構土層断面図（縮尺 1/60）

（4）柱穴・小穴

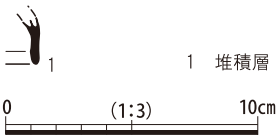
P030101～P030103 の３基の柱穴は柱穴列 SA030101 を構成する。

P030101 の平面形態は円形で、南北検出長 0.68m、東西 0.69m、深さ 0.47m。断面形状は半円形。P030102 の平面形態は円形で、南北 0.53m、東西 0.56m、深さ 0.36m。断面形状は尖底状をなす。P030103 の平面形態は崩れた方形で、南北 0.75m、東西検出長 0.63m、深さ 0.23m。断面形状は船底状をなし、一部が深くなる。

それ以外の柱穴、小穴を以下に述べる。

P030104 の平面形態は楕円形で、北東－南西 0.50m、北西－南東 0.41m、深さ 0.40m。断面形状は尖底状をなす。P030105 の平面形態は楕円形で、南北 0.27m、東西 0.19m、深さ 0.24m。断面形状は半円形。P030106 の平面形態は楕円形で、北東－南西 0.19m、北西－南東 0.25m、深さ 0.05m。断面形状は弧状をなす。P030107 の平面形態は楕円形で、北東－南西 0.24m、北西－南東 0.24m、深さ 0.08m。断面形状は弧状をなす。P030108 の平面形態は円形で、南北 0.28m、東西 0.30m、深さ 0.20m。断面形状は半円形。P030109 の平面形態は崩れた楕円形で、北東－南西 0.22m、北西－南東 0.37m、深さ 0.23m。断面形状は尖底状をなす。P030110 の平面形態は崩れた方形で、南北検出長 0.30m、

東西検出長 0.63m、深さ 0.26m。断面形状は浅い弧状をなし、一部が深くなる。



第 33 図　高善庵遺跡第３次調査
１トレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3）

（５）出土遺物

第 33 図１は堆積層から出土した。

１は須恵器杯H蓋。口縁部は短く、口縁端部は丸く収める。

第６項　　第２・３次調査の成果と課題

（１）古代の遺構、遺物の確認

第２次調査で井戸、土坑、溝、柱穴・小穴などの遺構を検出し、遺構内外から 11～12 世紀に伴うと考えられる土師器皿などの土器が多く出土した。第１次調査では遺構、遺物ともに未確認であり、標高 40m以下にこれらの遺構、遺物が分布するものと考えられる。若干の須恵器片も出土し、10 世紀以前まで遡る可能性はあるものの、主体を占める土師器皿のおよその年代が 11～12 世紀と考えられることから〔梅沢 2016〕、遺構の時期は古代でも後期から末期に求められるものと推測される。

これ以外に、第３次調査１トレンチで柱穴列１基が検出された。この帰属時期は不明であるが、検出遺構を覆う堆積層から古墳時代後期、６世紀末葉から７世紀初頭と思われる須恵器杯H蓋が１点出土している。この柱穴列が第２次調査で検出された遺構群と近い時期に伴うものであれば、集落がさらに南方に広がることとなり、また古墳時代後期に伴うものであれば、尾根の反対斜面にある興道寺窯跡との関連も考えられる。

（２）古代以後の土地造成を確認

山裾で地形の改変を伴う大規模な土地造成が行われたことが判明した。第２次調査３トレンチ付近、山裾東側の軟岩盤層や地山層、堆積層を削平して切土造成による平坦面を造り出し、その西側の同２トレンチ付近、標高の高い側の山裾の地山層や堆積層の上にそれらの土砂を積み上げて平坦面を造り出し、２面の平場を造成している様相を確認した。ただし、第３次調査１トレンチは標高が低い側の平坦面に位置するが、堆積層の下で地山層が確認されており、軟岩盤層まで達するような削平は受けていないので、場所によって切土の多い、少ないがあるようである。

現地形に見られる標高差がある上下２面の平坦面は、第２次調査で検出された遺構の時期である古代末期以後に造成されたものと考えられる。第２次調査２トレンチで確認された盛土層の下、地山層の直上に位置する堆積層に土師器皿などが含まれており、またこの盛土層には中世以後の遺物を含んでいないので、土地造成の具体的な時期は遺跡が廃絶してからさほど時間が経過していない古代末期から中世初頭の段階であるものと考えられる。

今回の調査で古代から中世にかけての大規模な土地造成が確認されたことで、付近に瓦窯が存在しても、瓦窯本体を探索する上で大きな制約があり、今後、瓦窯を発見するにはかなりの困難が見込まれることが明らかとなった。ただし、第３次調査においても古代の平瓦を採集しており、瓦窯が既に失われているという根拠もないため、今後も継続的な発掘調査が必要である。

第５節　　高善庵遺跡発掘調査の総括

高善庵遺跡では瓦窯の検出を目指して調査を進めてきたが、古代後期～末期を中心とする時期の遺構、遺物が確認された。高善庵遺跡の性格について、若干の検討を行っておきたい。

まず、遺跡の時期は 10 世紀以前に遡る可能性は高いが、中心の時期は 11～12 世紀と考えられるため、南方に所在する興道寺廃寺の廃絶が遅くとも 10 世紀初頭であることを考慮すると直接的な関係性は認めがたい。また、検出された遺構群が隣接の小字地名となっている高善庵と呼称された施設であるのか、判然としない。しかし、今回の調査で確認された遺構群と同時期に存在したと考えられるものとして天台宗寺院の興道寺がある。現在の大字地名の由来ともなった中世寺院で、興道寺廃寺の衰退と別の動きの中で成立したものと考えられており〔芝田 2005・2006〕、その所在は明らかになっていないが、『2016 年総括報告』でも概述したように興道寺廃寺の南方が想定されている。

文永２年（1265）、「若狭国惣田数帳」（『東寺百合文書』）記載の「天台宗四王院　興道寺十二町」が興道寺という名の初出で、鎌倉期には比叡山四王院所有の興道寺の田圃が 12 町あったことが理解でき、以後、中世にかけて天台宗興道寺が定着していく。

一方、高善庵遺跡の北側に鎮座する日枝神社に関しては、『三方郡誌』に「興道寺に鎮座す。」とあり、『耳村誌稿』には「興道寺に鎮座す。祭神大山咋命、社殿（竪七尺 横五尺）、境内四百〇五坪、附属地九百七十九坪、氏子区域興道寺一円とす。」と記載がある〔美浜文化叢書刊行会 2014〕。地誌には創建に関する記載はないが、祭神からして日枝神社総本社の日吉大社と比叡山との強い関係性を考えると、天台宗興道寺と日枝神社との関係性もある程度認めることができよう。

高善庵遺跡の遺構群が天台宗興道寺そのものを構成するとは考えがたいが、日枝神社と隣接して神仏習合の形態をとることや、井戸が検出されたように一定期間の居住があったこと、また出土遺物の中で土師器皿が占める割合がかなり高く、何らかの祭祀や悔過などの宗教行為があった可能性も想定されることから、中世寺院・興道寺に関係するような初期施設、あるいは山林修行に伴うような施設が存在した可能性についても考慮しておく必要がある。

第21・22 図にも示したが、今回の第２・３次調査地から有害獣防止柵を挟んで西側の山間部には４面からなる平坦面が確認されている（写真３・４）。いずれも南北に細長く、最上位の平坦面は 12.5ｍ×3.6ｍの規模で３つの礎石が地表面に見え、上から２段の平坦面は同じく 10.5ｍ×2.2ｍで１つの礎石があり、南北棟の建物があったことがうかがえる。今回の調査区に見られた平坦面まで段々の地形として連続していたものか確証はないが、この山間部の平坦面が古代末期まで遡るものであれば、山間部にかけてある程度の広がりをもった宗教施設が存在したこととなる。瓦窯の確認に留まらず、高善庵遺跡と中世寺院・天台宗興道寺との関わりについても視野に、今後も継続的な発掘調査が望まれる。

写真３　高善庵遺跡の山間部に見られる平坦面

写真４　高善庵遺跡の山間部平坦面に見られる建物礎石

遺跡名	調査次数 調査区	遺　構・層　位	挿図 番号	遺物 番号	種　　別	器　種	法　量　(cm)			残存部位	製作技法・調整・施文・文様	焼　成	色　調	備　　考
							口径	器高	その他					
高善庵 遺跡	第2次1tr	SE020201埋土 (井戸枠部分)	第25図	1	土師器	皿		(1.5)		底部片	底部外面：ヘラ切り痕	良	明黄褐色	
		SE020201埋土 (上層撹乱)		2	土師器	皿		(1.1)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	良	にぶい橙色	
				3	土師器	皿		(2.9)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	良	にぶい褐色	
				4	土師器	皿		(2.9)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	やや不良	にぶい黄橙色	
				5	土師器	皿		(1.7)		底部片	底部外面：糸切り痕	良	橙色	
	第2次2tr	黒褐色土層	第28図	1	須恵器	壺か		(5.4)		頸部片	頸部内外面：横ナデ	不良	浅黄色	
				2	土師器	皿		(1.3)		底部片	底部外面：糸切り痕	良	にぶい橙色	
				3	土師器	皿		(2.1)	底部径3.5、底部高8.0	底部	底部外面：ヘラ切り痕	良	にぶい黄橙色	
				4	土師器	皿		(2.9)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	良	にぶい橙色	
				5	土師器	皿		(1.4)		底部片	底部外面：ヘラ切り痕	良	にぶい橙色	
				6	土師器	皿か		(2.8)		口縁部片	口縁部外面：強い横ナデ	良	にぶい黄橙色	
				7	土師器	台付皿		(20.1)		底部片	底部内面：ナデ	やや不良	にぶい黄橙色	
	第2次3tr	黒褐色土層	第30図	1	土師器	皿		(1.7)	底部径2.4	底部	底部外面：糸切り痕	良	にぶい褐色	
				2	土師器	皿		(1.8)	底部径2.5	底部	底部外面：糸切り痕	良	にぶい黄橙色	
				3	土師器	皿		(0.7)		底部片	底部外面：糸切り痕	良	にぶい橙色	
				4	土製品			3.4	底面径4.5	ほぼ完形		良	にぶい黄橙色	
		SD020302埋土		5	土師器	椀	(9.9)	(3.1)		口縁部片	口縁部・底部内外面：横ナデ	良	にぶい赤褐色	
		P020305		6	土師器	皿		(2.9)		口縁部片	口縁部内外面：横ナデ	良	にぶい黄橙色	
	第3次1tr	堆積層	第33図	1	須恵器	杯H蓋	(10.7)	(3.4)		口縁部1/8	口縁部内外面：横ナデ	良	緑黒色	

第４表　高善庵遺跡第２・３次調査出土遺物観察表

第３章　町内遺跡試掘調査

第１節　　興道寺遺跡

第１項　　遺跡の概要

興道寺遺跡（福井県遺跡番号 30073）は福井県三方郡美浜町興道寺に所在する。現在の美浜町興道寺地籍の大半を占める範囲に遺跡があり、弥生時代から中世までの複合遺跡である。遺跡は耳川下流域の左岸の低位河岸段丘に立地し、この段丘面には興道寺遺跡だけでなく、古墳時代後期の群集墳である興道寺古墳群や古代寺院遺跡である興道寺廃寺など、特に古墳時代から古代にかけての遺跡が分布する。

興道寺廃寺の北方、北西方にあたる遺跡の北縁部を中心に開発事業に伴う発掘調査、試掘調査などが継続的に行われ、６世紀後半から８世紀前半を中心とした竪穴建物跡、掘立柱建物跡などが確認されるなど、古墳時代後期から奈良時代を主体とした集落が展開していることが明らかとなっている。

広域農道を挟んだ今回の試掘調査地の南隣では美浜町教育委員会による民間企業の社屋建築に伴う発掘調査（土井ノ上１区）が実施されており、標高 19.0～20.0m付近の地山面で８世紀前半を中心とした須恵器、土師器、製塩土器などとともに、竪穴建物跡４棟、掘立柱建物跡 12 棟が検出されている〔美浜町教育委員会 1998〕。また、調査地のすぐ南隣の広域農道の部分でも福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによる発掘調査（以下、「県調査区」という。）が実施され、Ａ区では標高約 20.3mの地山面で土坑１基、柱穴 35 基などが検出され、古墳時代後期から古代にかけての土器などが出土している〔福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003〕。

また、試掘調査地の東側では地山面の標高が高くなることが判明しており、例えば県調査区Ｂ区では最高位で標高 21.5mであり、また興道寺廃寺の一連の発掘調査でも微高地であることが判明するなど、今回の試掘調査地の付近では浅い谷状に標高が低くなることが明らかな反面、このような低地面にも遺構、遺物が展開しているという特徴がある。

第２項　　試掘調査の経緯と経過

今回の試掘調査の原因となった事業は、民間企業の事務所建築工事計画である。興道寺遺跡の北縁部の遺跡境界付近にあり、調査地の住所は福井県三方郡美浜町興道寺 11 号１番。事業地はかつて水田であったが、一部が過去に盛土造成されている。事務所の建設はその東側に計画され、その場所は水田であることから南側で検出されている遺構、遺物が調査地まで展開している可能性が高いと考えられた。

このため、遺跡の存否、範囲、深度、性格などを確認することを目的として、事業地の東端付近に南北に長さ約 15.0m、幅 1.6mのトレンチ１か所（１トレンチ）と、中央付近に南北長さ 2.4m、幅 1.6mのトレンチ１か所（２トレンチ）を設定し、約 27.8 ㎡において試掘調査を実施した。調査日は平成 30 年(2018)10 月 23・24 日である。

重機で基本的に地山層上面までの掘り下げを行い、土層断面の確認、遺物の検出を行った。遺構保護のため、今回の試掘調査では遺構の掘削は行っていない。遺構の形状、規模、埋土については、今後、記録保存のための発掘調査が行われる場合、改めて調査を行う予定である。

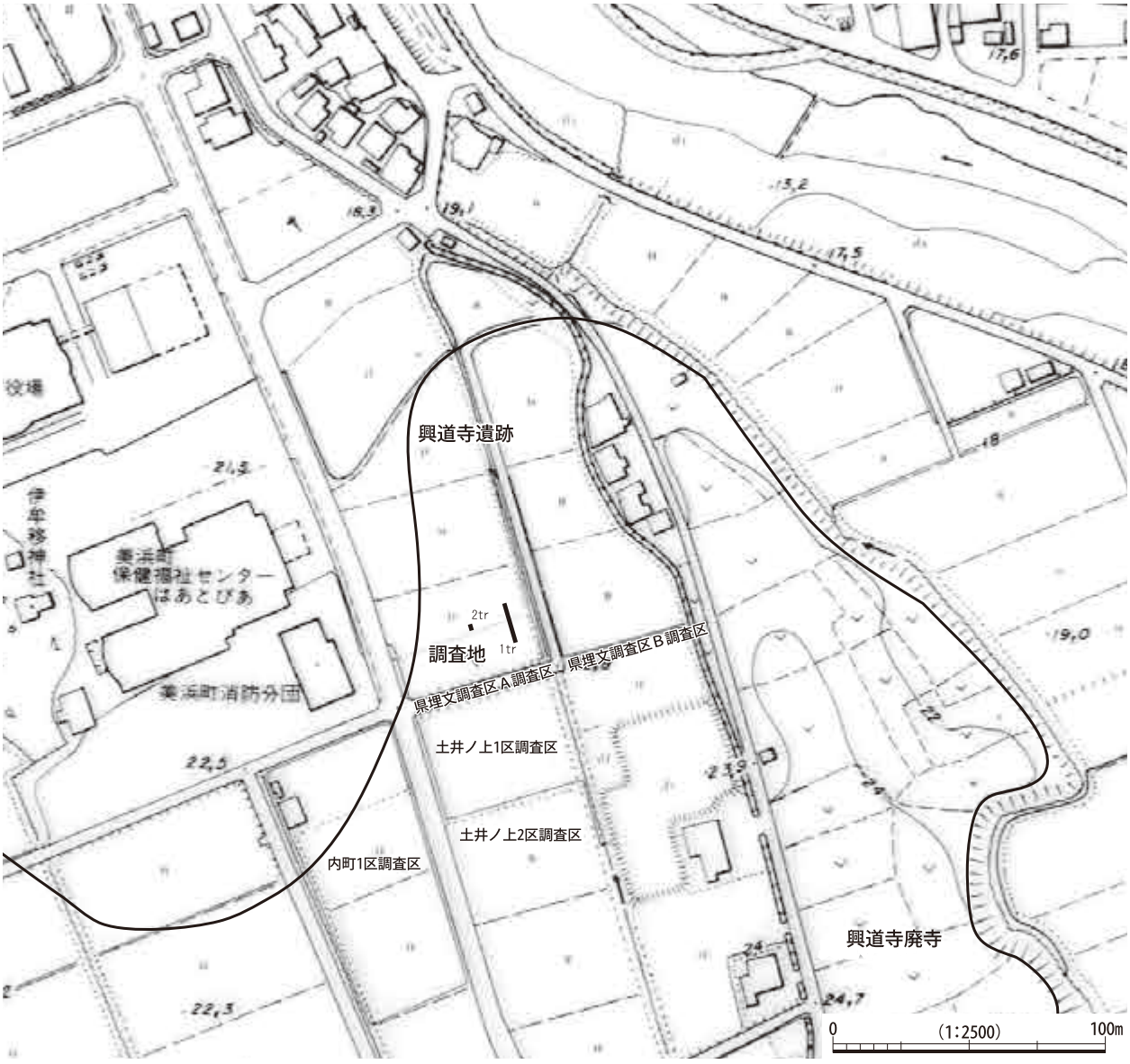
第３項　　試掘調査の内容（第 34・35 図）

トレンチの位置は第 34 図、各トレンチの標準土層を第 35 図に示す。

１トレンチの基本層序は、地表面から約 0.4～0.55ｍまで水田の耕作土にあたる灰褐色土があり、その下に層厚約 0.25～0.4m、摩耗した土器片や粘土塊、樹木の枝などをわずかに含み、周辺から流れ込んだと考えられる黒色土が堆積する。１トレンチ南端で地表面から 0.7ｍ下、北端で 0.8ｍ下に地山層の黄褐色土の上面に至る。地山面は北に向けてわずかに標高が低くなる。地山面の最高位で標高 20.2m、最低位で標高 20.0ｍであり、試掘調査地の南隣、県調査区Ａ区と一体的な地山面の傾斜が認められる。

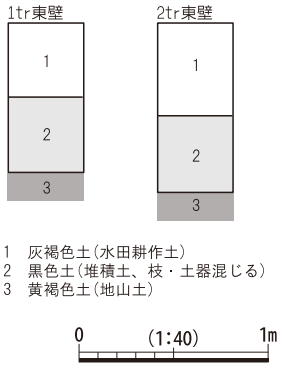
地山層の上面で竪穴建物跡とみられる遺構１基、土坑８基、柱穴 15 基などを検出した。黒色土から破片で須恵器杯Ａ１点、土師器甕３点、平高台の土師器皿１点、製塩土器１点、土塊 10 数点が出土した。

２トレンチの基本層序は、現在の地表面から約 0.5ｍまで同様に耕作土の灰褐色土があり、その下に層厚約 0.4ｍの黒色土が堆積する。地表面から 0.9ｍ下、標高 20.0ｍに地山層の黄褐色土の上面に



第 34 図　興道寺遺跡試掘調査位置図（縮尺 1/2,500）

至る。溝１条、小穴１基を検出し、堆積土の黒色土から土師器甕８点が破片で出土した。



第 35 図　興道寺遺跡試掘調査土層断面模式図（縮尺 1/40）

第４項　　試掘調査の成果

調査地の南側で確認されている律令期の遺構、遺物が今回の試掘調査地まで広がるものと考えられ、周辺に遺構、遺物が良好に残っている可能性は高い。調査地は遺跡の北縁部に位置するが、遺跡はさらに北方に展開する可能性もある。周辺の旧地形は浅い谷状をなすが、古墳時代後期から古代にかけての集落が展開しているというこれまでの周辺での調査成果を改めて確認することができた。

第２節　　藤ノ木遺跡

第１項　　遺跡の概要

（１）遺跡の概要

藤ノ木遺跡（福井県遺跡番号 30077）は福井県三方郡美浜町郷市に所在する。遺跡は耳川下流域の左岸の低位河岸段丘の末端付近に位置し、国道 27 号を挟んでさらに北側には沖積地が広がっている。藤ノ木遺跡の南方、低位河岸段丘に興道寺廃寺や興道寺遺跡、興道寺古墳群などの遺跡が所在しているのは前述のとおりであり、藤ノ木遺跡の北東近くには獅子塚古墳が所在する。

藤ノ木遺跡は遺物散布地として『福井県遺跡地図』に収録されているものの、遺跡の様相はあまり明らかではなかった。しかし、美浜町郷市の集落と遺跡の範囲がほぼ重複していることもあって、近年、個人住宅や民間企業の建物建築などに伴う試掘調査や立会調査が継続的に行われており、古墳時代後期から平安時代にかけての遺構や遺物が断片的に確認されている。

今回の試掘調査地の付近でも複数件の試掘調査が実施されており、国道27 号や宅地、店舗などがある造成面から 0.6～1.0mほど下に褐色系の粘土、砂礫土からなる地山層が分布し、場所によっては散在的に遺構、遺物が確認されていた。

（２）2017 年試掘調査の内容

今回の事業計画地の北寄りでは、公共事業の計画に伴う試掘調査を実施している（以下、「2017 年試掘調査」という）。今回の試掘調査地と隣接しており、以下にその内容を概述しておく。

いずれも幅 1.0m、南北方向に１か所、東西方向に３か所、計４か所のトレンチを設定し、平成 29 年(2017) 5 月 16～18 日に約 130 ㎡において試掘調査を実施した。１トレンチは約 22.0m、２トレンチは約 35.0m、３トレンチは約 37.0m、４トレンチは約 36.0m。地山層の上面まで重機で掘り下げを行い、土層断面の確認、遺構や遺物の検出を行った。

調査地の基本層序は、水田耕作土にあたる灰褐色土（層厚 0.2～0.4m、表土）の下に遺物を包含する黒褐色土（層厚 0.2～0.4m、堆積土）が分布する。１トレンチの南側と２・３トレンチの中央付近にはこの黒褐色土が認められず、またその付近の地山層は砂礫土からなり、遺構の分布密度も低く、

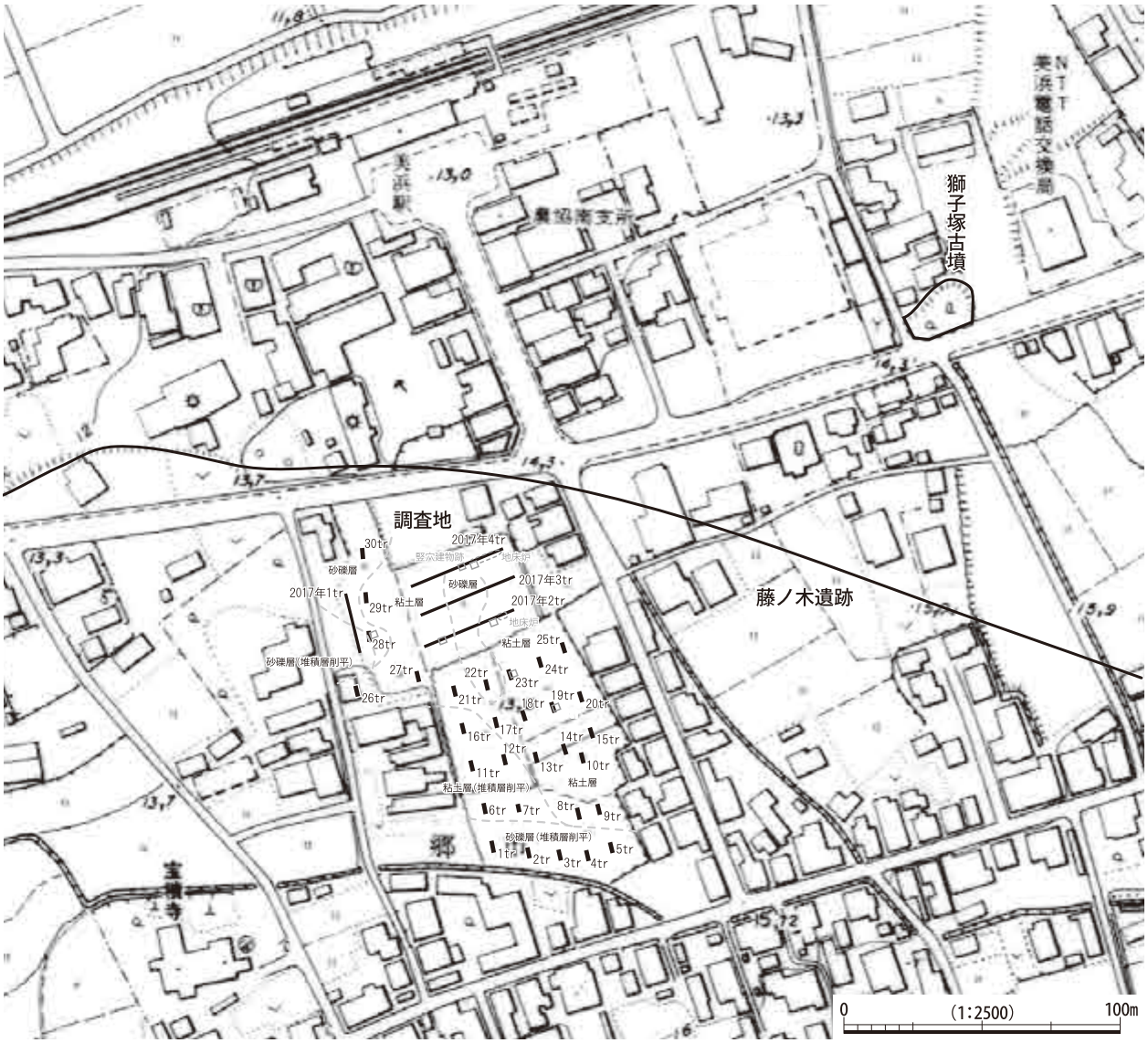
地山層そのものが削平を受けており、旧地形として南方からこの地点まで舌状に微高地が延びていたものと考えられた。

地表面下 0.2～0.7ｍで褐色・黄褐色・暗黄褐色系の粘土、もしくは砂礫土の層からなる地山面に至り、１トレンチの北側半分では地山面の標高が他より高いので、全体的に西側は微高地となる。一方で１トレンチと２～４トレンチの西端までの間、２～４トレンチの東側では地山面の標高が低く、この上層に黒褐色土の堆積土がある。

遺構はいずれのトレンチでも地山層の上面で検出され、特に地山層が粘土であるところには多くの遺構が認められ、遺構の切り合いが多い。調査では遺構の掘削は行っていない。

１トレンチで土坑５基、小穴 15 基を検出し、地山面から破片で須恵器杯Ｂ１点、土師器皿５点が出土した。これ以外に土師器細片３点が出土している。

２トレンチで竪穴建物跡２棟、鍛冶炉（地床炉）を含む土坑 16 基、小穴 24 基を検出した。いずれも破片で、土坑 10 の検出面から須恵器甕１点(第 37 図１)、土坑 13 の検出面から須恵器杯類１点、土師器杯１点、土師器甕１点、鉄滓 10 点、トレンチ東端の地床炉付近から土師器甕１点、砥石１点(同４)、黒褐色土層から須恵器杯類１点、土師器椀４点(同２)、製塩土器４点、土壁１点、排土から須恵器杯Ｂ１点(同３)、土師器甕２点、製塩土器６点が出土した。これ以外に黒褐色土から土師器細片４



第 36 図　藤ノ木遺跡試掘調査位置図（縮尺 1/2, 500）

点、排土から土師器細片４点、陶磁器細片２点が出土している。

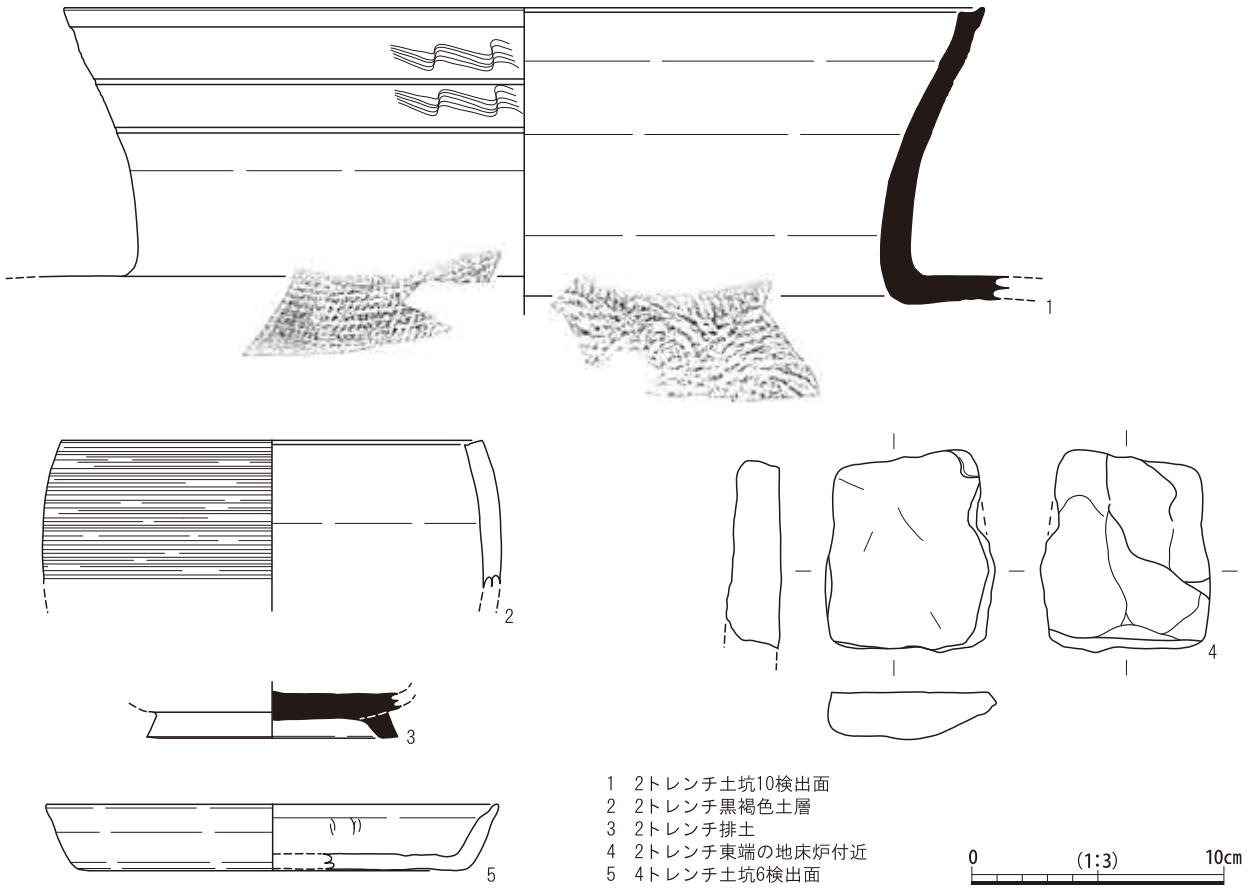
３トレンチで土坑５基、小穴24基を検出し、土師器甕の破片４点・土師器の細片２点、製塩土器１点が出土した。

４トレンチで竪穴建物跡２棟、土坑７基、小穴22基を検出し、いずれも破片で竪穴建物跡１の検出面から土師器甕１点、擦り痕の残る炭化した土器片１点、土坑１検出面から赤彩の土師器杯Ｂ蓋１点、土師器甕１点、土坑６から赤彩の土師器皿１点（同５）が出土した。地山面から土師器細片２点、砥石片１点、鉄滓１点が出土している。

第37図１は２トレンチ土坑10検出面、２は２トレンチ黒褐色土層、３は２トレンチ排土、４は２トレンチ東端の地床炉付近、５は４トレンチ土坑６検出面から出土した。

１は須恵器甕の口縁部。外面に緩やかに立ち上がり、口縁端部に凹面をもつ。口縁部外面の上部に３つの沈線と２条の波状文を、胴部外面に平行叩きとカキメ調整を施す。胴部内面に当て具痕を残す。２は土師器椀。口縁部は内弯し、口縁端部は面取りする。口縁部の外面はカキメを施し、内面は強く横ナデする。３は須恵器杯Ｂの底部。高台はやや高く、外に張る。底部外面に自然釉が付着する。４は砥石片。自然礫を半裁し、裁断面を叩打によって平滑にして砥面にしたものと思われる。石種は砂岩。５は土師器皿。復元口径は17.4㎝。全体的に赤彩を施す。磨滅が著しいが、口縁部の内面に一段の螺旋暗文がわずかに残る。口縁部は厚く、口縁端部は丸く収める。口縁部の内外面に横ナデを施し、底部外面は指頭圧痕を残す。

一定程度の期間に渡って営まれた鍛冶工房を付属する集落の一部と考えられ、特に奈良時代の土器片が黒褐色土や地山面の直上から出土し、集落の中心の時期はこの頃と考えられた。



第37図　藤ノ木遺跡2017年試掘調査出土遺物実測図（縮尺1/3）

第２項　　試掘調査の経緯と経過

今回の試掘調査の原因となった事業は、民間の施設整備計画に伴うものである。藤ノ木遺跡の北縁部の遺跡境界付近にあり、調査地の住所は福井県三方郡美浜町郷市 14 号９・10・11・12－１・12－３番、同 19 号 25・26・28－１・29－１・29－６・30 番。計画地は水田である。

2017 年試掘調査において事業予定地の一部には埋蔵文化財が存在することは判明していたが、一定程度の規模の建物、工作物などの建設を希望する一方で、事業計画そのものが試掘調査の時点でほとんど決定していなかった。しかし、試掘調査の結果に基づいて盛土や建物等の設計を行うことで遺跡に影響がないように保存を図る旨の方針が示されたため、遺跡の存否、範囲、深度、性格などを確認することを目的として、計画地の全体に南北に長さ約 5.0m、幅 1.6mの計 30 か所のトレンチ（１～30 トレンチ）をなるべく等間隔に設定し、約 240.0 ㎡において試掘調査を実施した。調査日は令和元年(2019)11 月 21 日、22 日、24 日である。

重機で基本的に地山層上面までの掘り下げを行い、土層断面の確認、遺物の検出を行った。遺構保護のため、今回の試掘調査では遺構の掘削は行っていない。遺構の形状、規模、埋土については、今後、記録保存のための発掘調査が行われる場合、改めて調査を行う予定である。

第３項　　試掘調査の内容(第 36・38・39 図)

トレンチの位置は第 36 図、各トレンチの標準土層を第 38 図に示す。

試掘調査地の基本層序は、地表面から約 0.1～0.3mまで水田の耕作土にあたる灰褐色土があり、その下に層厚 0.2m程度の黒褐色土、一部は灰褐色土・暗褐色土が堆積する。８・９・13～15・17～30 トレンチにおいてこの堆積層が面的に分布する。堆積土には若干の土器片が含まれるが、９トレンチの灰褐色土には多くの土器が混入していた。試掘調査地の中央付近には表土と堆積層の間に、水田造成時の造成土にあたる灰黄褐色土（層厚 0.05～0.2m程度）が分布している。

水田耕作土の上面から下に 0.15～0.75mの深さで地山面に至る。調査地の南側では地山面の標高が高く、表土直下で地山面に至ることに対して、調査地の北側では地山面の標高が低いため、表土下に造成土や堆積土が分布する傾向が強い。地山層は黄褐色土、褐色土、暗黄褐色土からなり、粘土質の土壌が多くを占め、調査区の南縁では砂礫層が中心となる。元々の表層地質として砂礫層の上に粘土層が覆って地山層を形成し、微起伏があった旧地形であったものと考えられるが、22・28・30 トレンチのように砂礫層の上面に堆積層が分布していることを考えると、ある程度地山層を削平した上で遺跡が形成されたものと想定される。

ただし、2017 年試掘調査では１トレンチの南側と２・３トレンチの中央付近で砂礫土の地山層が検出されており、堆積層の黒褐色土が見られず、遺構の分布密度も低いので、この部分では後世に地山層そのものが削平を受けているものと考えられる。

地山層の上面で竪穴建物跡３基、土坑 26 基、柱穴 20 基を検出した。検出遺構、出土遺物は以下のとおりである。遺構埋土を掘削していないので、遺物の出土量は多くない。一部の堆積層などから８～10 世紀に伴う須恵器、土師器などが出土しており、特に８世紀から９世紀前半のものが多い傾向がある。

１トレンチは溝または土坑２基、小穴１基を検出し、表土から赤彩の土師器高杯片１点(第 39 図１)が出土。２トレンチは小穴１基を検出し、表土から煉瓦片１点が出土。３トレンチ表土から現代の瓦片１点が出土。４トレンチ表土から陶磁器細片１点が出土。５トレンチは小穴１基を検出。６トレンチは土坑４基、小穴１基を検出し、黄褐色土層から土師器甕片１点、赤彩の土師器細片１点が出土。

７トレンチは土坑３基を検出、表土から須恵器甕片１点が出土。８トレンチ表土から破片で須恵器杯Ｂ蓋１点、土師器甕１点、陶器擂鉢１点、陶磁器細片７点が、黒褐色土層から土師器皿片１点(同２)が出土。

９トレンチは土坑１基を検出し、表土から現代の瓦片３点、陶磁器細片１点が出土した。灰褐色土層からいずれも破片で、須恵器杯Ｂ蓋３点（同３～５)、杯Ａ３点・杯Ｂ５点（同６～８)・杯Ａまたは杯Ｂの口縁部４点・皿４点（同９)・甕４点（同 10・11)・壺類４点、赤彩の土師器杯Ｂ蓋１点（同 12)・杯Ａ４点・杯Ｂ３点・皿１点、土師器甕９点、糸切り痕を残す土師器皿２点（同 13)、近世の土師器皿１点、製塩土器６点、陶器甕１点・擂鉢２点、砥石４点（同 14～16）が出土し、須恵器の細片 10 点、土師器の細片 23 点も出土している。

10 トレンチ表土から須恵器甕片１点が出土。11 トレンチは土坑１基を検出。12 トレンチ表土から須恵器細片１点が出土。13 トレンチは土坑２基、小穴１基を検出。14 トレンチは土坑１基、小穴４基を検出し、表土から土師器細片２点が、黒褐色土層から土師器細片１点が出土。15 トレンチは小穴１基、16 トレンチは土坑１基、17 トレンチは土坑２基を検出。17 トレンチは黒褐色土層から須恵器杯Ｂ片１点（同 17)、土師器甕片１点が出土。18 トレンチは土坑１基、小穴１基を検出し、黒褐色土層から須恵器細片１点が出土。19 トレンチは竪穴建物跡１基、土坑１基を検出し、黒褐色土層から須恵器杯Ａ片１点、土師器甕片２点が出土。20 トレンチは土坑２基、小穴１基を検出し、黒褐色土層から須恵器壺の口縁部片１点、鉄滓３点が出土。

21 トレンチは土坑２基、小穴１基を検出し、表土から須恵器細片３点、赤彩の土師器細片２点が、黒褐色土層から須恵器杯類の破片２点・甕４点(同 18)、須恵器の細片２点、赤彩の土師器杯Ｂ蓋片１点(同 19)・杯Ａ片１点(同 20)・椀片１点(同 21)・器種不明のもの２点、土師器甕片 13 点、土師器の細片６点、製塩土器片８点、鉄滓１点、鞴羽口の破片１点(同 22)が出土した。

22 トレンチ表土から陶器細片１点が出土。23 トレンチは竪穴建物跡１基、小穴１基を検出し、黒褐色土層から土師器甕片２点・土師器の細片２点、製塩土器片３点、鞴羽口の破片１点が出土。24 トレンチは小穴６基を検出し、黒褐色土層から須恵器甕片１点が出土。26 トレンチ表土から須恵器細片１点、土師器細片３点、陶器細片２点が出土。27 トレンチは土坑１基を検出し、表土から須恵器細片１点が出土。

28 トレンチは竪穴建物跡１基、土坑１基を検出し、暗褐色土層から破片で須恵器杯Ｂ蓋１点、土師器甕９点、赤彩の土師器皿２点、近世の土師器皿３点、製塩土器１点、土壁３点が出土。29 トレンチ表土から須恵器甕片１点・須恵器の細片１点、土師器の細片９点が出土。30 トレンチは土坑１基を検出し、黒褐色土層から土師器甕片１点が出土。

第 39 図１は１トレンチ表土、２は８トレンチ黒褐色土層、３～16 は９トレンチ灰褐色土層、17 は 17 トレンチ黒褐色土層、18～22 は 21 トレンチ黒褐色土層から出土。

１は土師器高杯の脚部。脚部はハの字状に開き、全体に赤彩を施す。

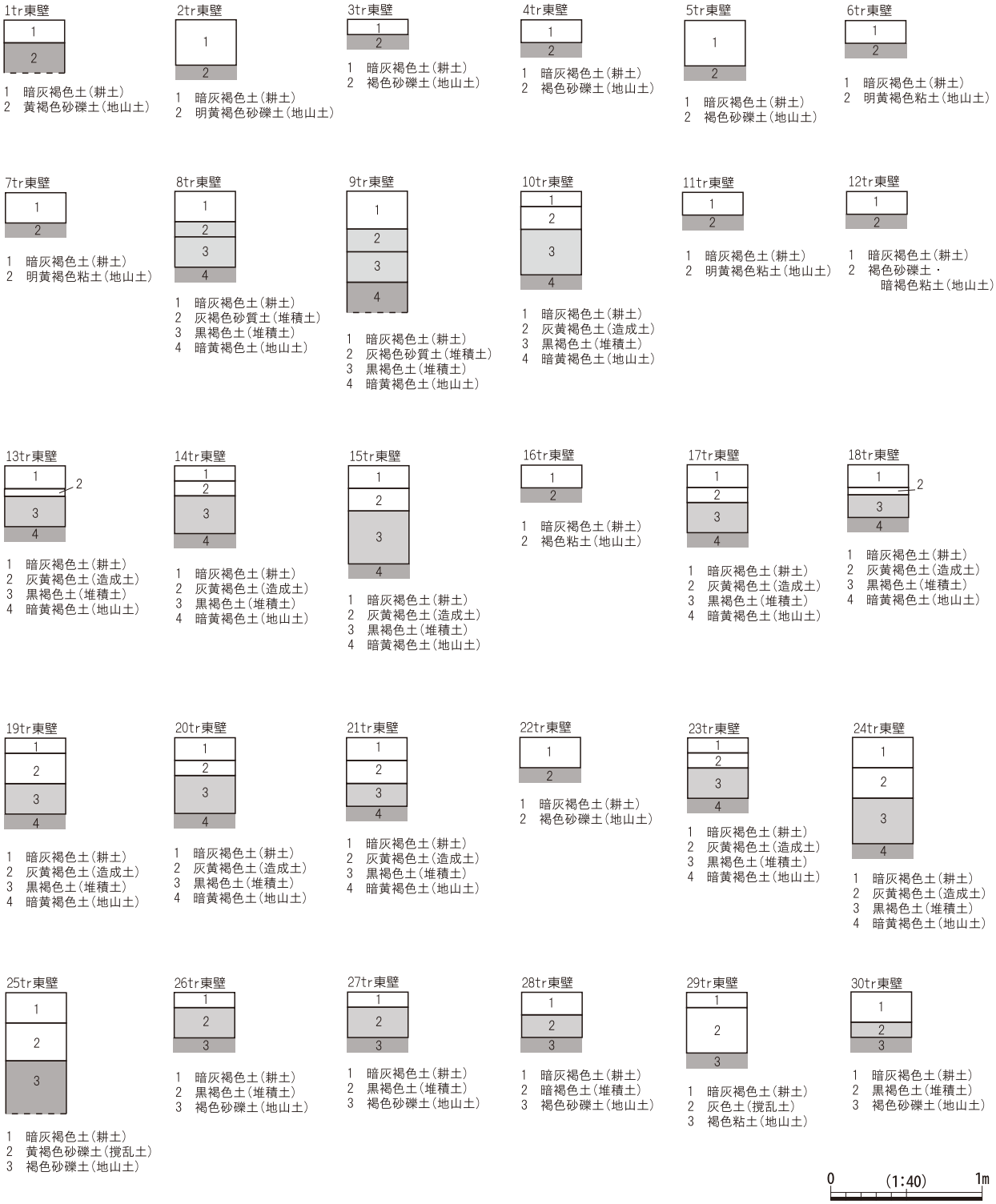
２は土師器皿の底部。口縁部は外方に広がり、底面は回転糸切り痕を残す。

３～５は須恵器杯Ｂ蓋。３の復元口径14.4 ㎝。天井部は平らで、口縁部は鈍く折り返す。４の復元口径 14.2 ㎝。天井部は低く、笠状を呈し、口縁部は短く折り返す。いびつなつまみをもつ。５の復元口径 13.5 ㎝。天井部は平らで、口縁部を鋭く折り返す。扁平なつまみをもつ。６～８は須恵器杯Ｂ。６は高台がわずかに張り、７は高台が外に張り、内側で接地する。８は小型品で、復元口径は 10.7 ㎝。口縁部は外上方にまっすぐ立ち上がり、口縁端部は鋭く収める。高台はやや厚く、鈍い。９は須恵器皿。復元口径 16.2 ㎝。口縁部は薄く、短く立ち上がる。10・11 は須恵器甕の胴部。10 は底部外

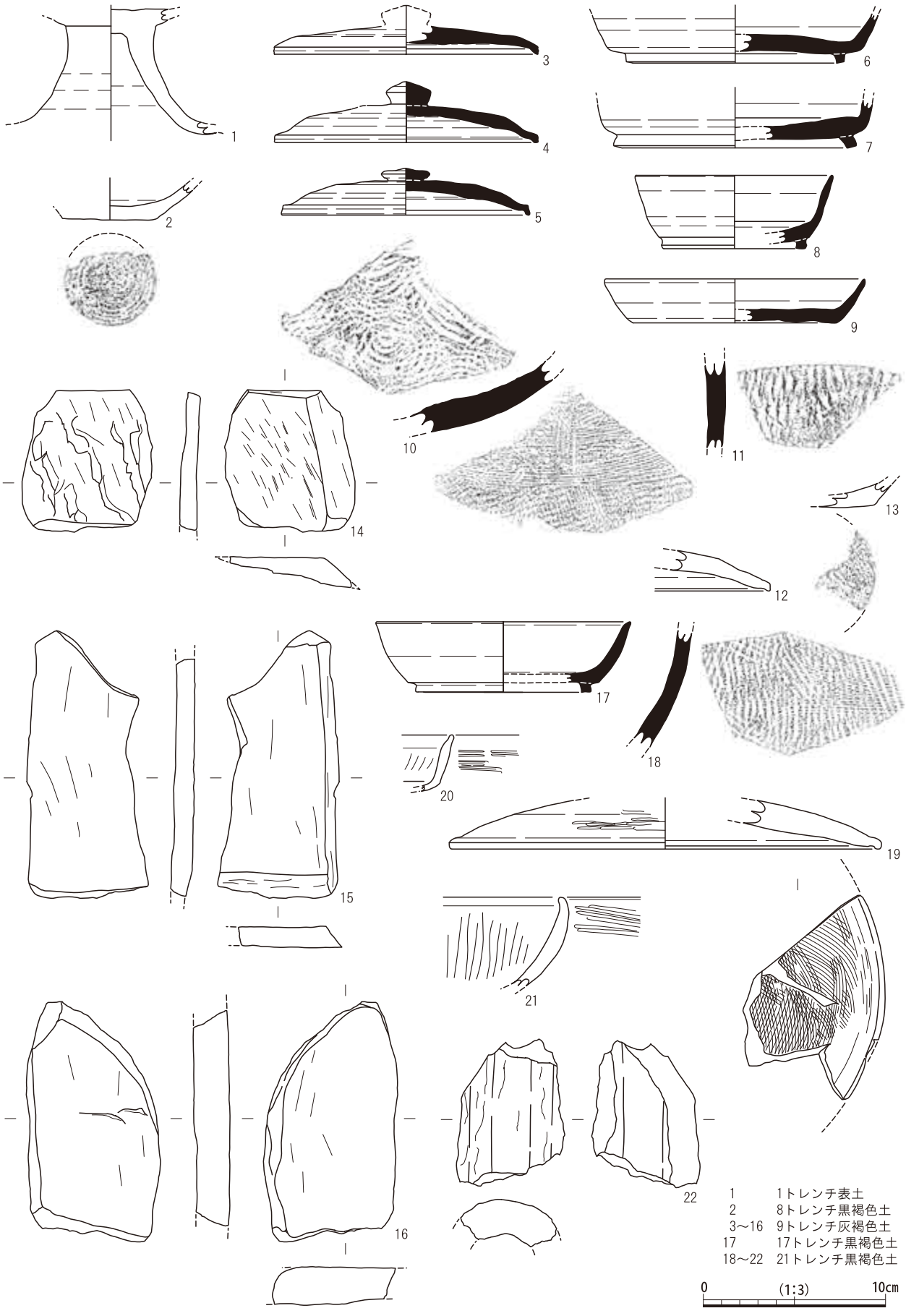
面を平行叩きの後、カキメを施し、内面は当て具痕が残る。11の外面は平行叩きを施すが、叩き目が交差し、格子目状をなす。内面は当て具痕をナデ消す。

12は土師器杯Ｂ蓋。口縁部は厚く、下方に鈍く折り返す。内外面に赤彩を施し、天井部外面にヘラミガキの痕跡をわずかに残す。13は土師器皿。底部外面に回転糸切り痕を残す。

14～16は砥石。いずれも中砥と推定される。14は短辺7.0㎝、厚さ1.4㎝。横断面が薄い三角形の形状をなし、広い２面と側面１面と上端面を砥面として用いる。１面には溝状の擦痕が多く残り、



第38図　藤ノ木遺跡試掘調査土層断面模式図（縮尺1/40）



第 39 図　藤ノ木遺跡試掘調査出土遺物実測図（縮尺 1/3）

裏側の１面は粗い叩打である程度平滑にする。側面と上端面は平坦で、擦痕がある。石種はチャート。15 は厚さ 1.1 ㎝。残存する３面が砥面で、側面はやや粗いが叩打で整える。石種は花崗岩。16 は厚さ 1.7 ㎝。広い２面が砥面で、うち１面に平坦な擦痕が残る。石種は砂岩。

17 は須恵器杯Ｂ、復元口径は 13.8 ㎝、口縁部は厚く、口縁端部は鋭く収める。高台はわずかに外に張る。

18 は須恵器甕の胴部。外面は平行叩きを施し、内面は当て具痕をナデ消す。19 は土師器杯Ｂ蓋。復元口径 23.5 ㎝。器壁は厚く、口縁部を鈍く折り返す。内外面に赤彩を施し、天井部外面にヘラミガキの痕跡を残し、内面に不定方向の細かい刷毛目を施す。20 は土師器杯Ａ。口縁部は厚く、口縁端部を丸く収める。内外面に赤彩を施し、口縁部外面にヘラミガキの痕跡を残し、内面に一段の放射暗文を施す。21 は土師器椀。口縁部が強く内弯し、口縁端部は内側に折り返す。内外面に赤彩を施し、口縁部外面はヘラミガキの痕跡を顕著に残し、内面は一段の放射暗文を施す。22 は鞴羽口。大型で器壁は厚く、長石、石英を多く含む。

第４項　　試掘調査の成果

多くのトレンチで遺構が検出され、試掘調査地の全面に遺構が分布していることが判明した。遺構と微地形の関係を見ると、地山層の構成（砂礫層、粘土層など）、堆積層のあり方や遺構の有無などを勘案すれば、調査地の南端と、西端の一部、中央付近の南北方向の島状の部分に微高地があり、遺跡が廃絶した後に地山面が削平されて地山面が平坦化したものと考えられる。元々は南西側から緩やかに傾斜する微地形があったものと考えられる。

今回の調査地は、竪穴建物跡４棟、土坑 33 基、小穴 85 基が検出され、鍛冶を伴う集落が存在すると想定されていた 2017 年試掘調査の南側と西側にあたり、今回の試掘調査においても竪穴建物跡２棟が検出され、８世紀から９世紀前半を中心とした時期の須恵器、土師器などが出土した。藤ノ木遺跡が確認された竪穴建物跡６棟はいずれも平面形が方形で、遺跡南方の興道寺遺跡などで検出されている竪穴建物跡と平面形態では共通するが、藤ノ木遺跡では規模が一辺３ｍ程度と小規模であり、2017 年試掘調査で確認されたように竪穴建物跡付近に地床炉と考えられる鍛冶炉が存在することは、当地における鍛冶関連施設のあり方の一つを示している可能性がある。また、今回の試掘調査のうち、特に９トレンチから砥石、20 トレンチから鉄滓、21・23 トレンチから鞴羽口、28 トレンチから炉壁と考えられる土壁が出土するなど、調査地周辺に鍛錬鍛冶に関連する遺構が広く分布している可能性が高まった。

９トレンチの堆積層を中心に土師器食膳具が一定量出土したことも注目される。若狭地方では律令期の土師器食膳具が出土する遺跡はあまり多くなく、藤ノ木遺跡の近郊に官衙関連施設が存在する可能性も想定される。

第３節　　中長浜遺跡

第１項　　遺跡の概要

中長浜遺跡（福井県遺跡番号 30006）は福井県三方郡美浜町丹生に所在する。敦賀半島西岸の先端付近、関西電力株式会社美浜原子力発電所や美浜町丹生集落がある小さな湾の東側に遺跡があり、この小湾には西から東奥浦遺跡、田ノ口遺跡、長浜畑遺跡、中長浜遺跡といったようにいくつかの土器

第 40 図　中長浜遺跡試掘調査位置図（縮尺 1/2, 500）

製塩遺跡が連なるように分布し、その背後の山麓にいくつかの古墳群が所在している。

中長浜遺跡は、これまで丹生小学校遺跡Ａ・Ｂ遺跡と周知されてきたが、平成 12 年度(2000)の「福井県遺跡地図」改訂時に小字地名に基づいて中長浜遺跡と改称された。美浜町丹生の出身である古川登氏が少年期に採集したという丹生小学校Ａ・Ｂ遺跡の出土品が福井県立歴史博物館に所蔵されているが(第 41 図)、多くが製塩土器片で、その年代観から７～８世紀に盛行した土器製塩遺跡であるものと推定される〔松葉 2009〕。昭和 39 年（1964）発行の『美浜町文化財調査台帳』には丹生小学校の校庭から多くの土器片が出土した旨の記載があり、当時、古川氏がこれらを採集し、また『美浜町遺跡台帳』にその旨が記載されたことがうかがえる。

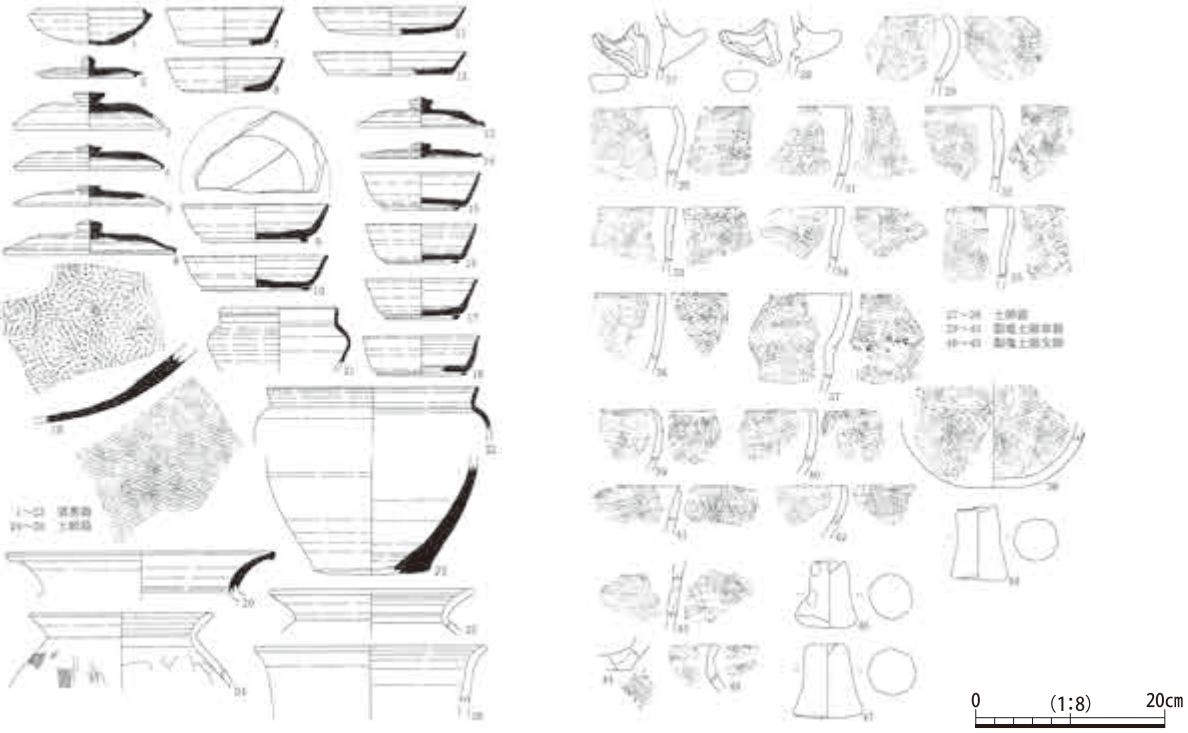
中長浜遺跡における既往の調査として、美浜町エネルギー環境教育体験施設きいぱす建設工事に伴って旧丹生小学校の校庭部分で６か所の試掘調査を平成 27 年度(2015)に実施しており、近代に伴うと考えられる塩田施設の一部を検出しているが、古代まで遡る製塩遺構は確認されていない。

第２項　　試掘調査の経緯と経過

今回の試掘調査の原因となった事業は、民間企業の駐車場整備計画である。中長浜遺跡の北縁部の遺跡境界付近にあり、調査地の住所は福井県三方郡美浜町丹生 24 号 48 番、49 番１・２、50 番、51 番、56 番。

計画地はかつて水田であったところが近年に盛土造成され、西側に隣接する県道とほぼ同標高の造成地となり、試掘調査時には雑地化していた。しかし、かつて水田が広がっていた頃には製塩土器片が採集されていたようであり、この造成地を未舗装の駐車場として使用するにあたり、地中の埋蔵文化財の状況が不明であったことから埋蔵文化財に対する影響がないことを確認するために、遺跡の存否、範囲、深度、性格などを確認することを目的として、東西約 2.0m、幅 1.5mのトレンチ 10 か所を設定し、約 30 ㎡において試掘調査を実施した。調査日は平成 30 年(2018) ３月 15・16 日である。

重機で基本的に地山層上面までの掘り下げを行い、土層断面の確認、遺物の検出を行ったが、掘削

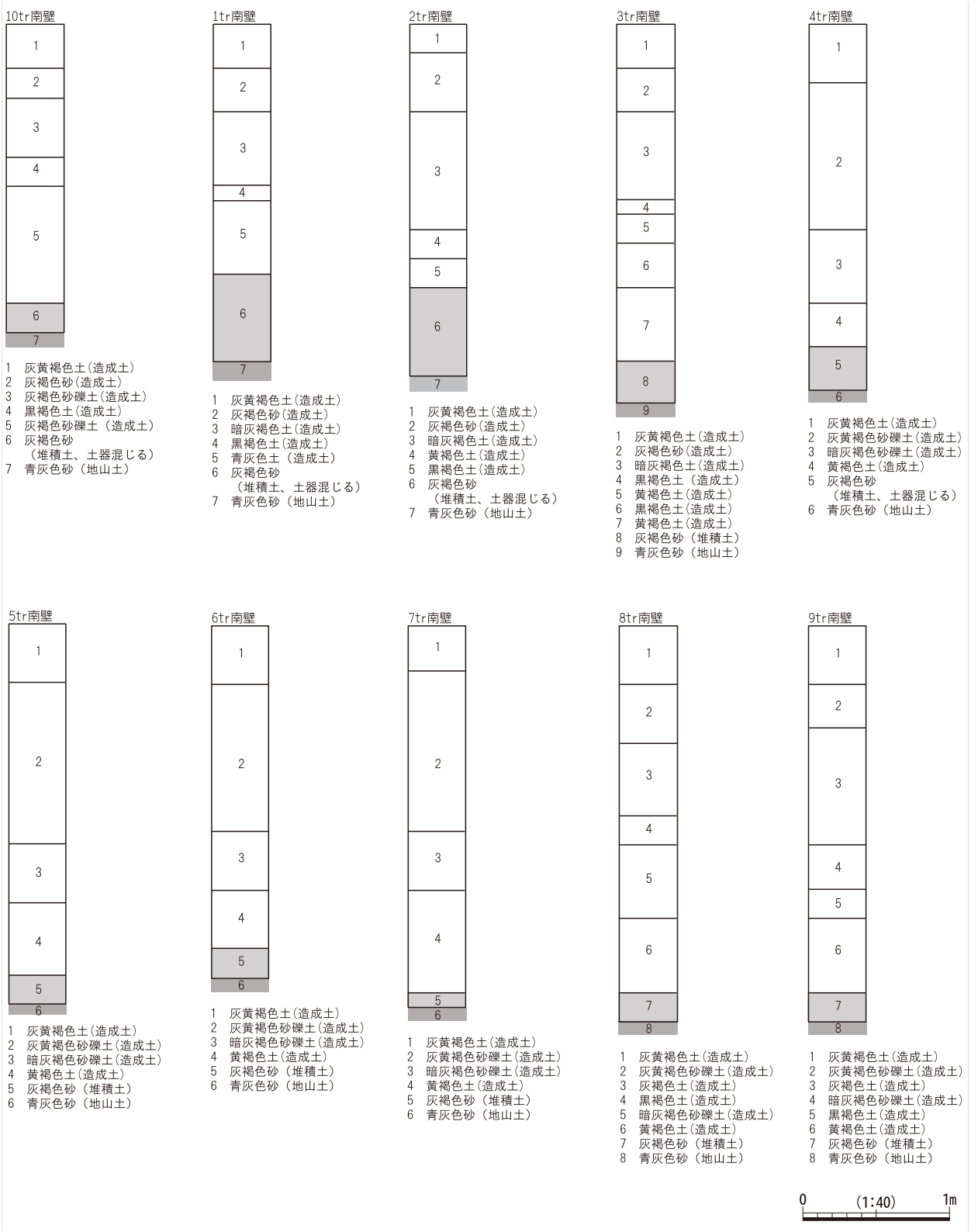


第 41 図　中長浜遺跡（丹生小学校遺跡Ａ地区）採集遺物実測図（縮尺 1/8）

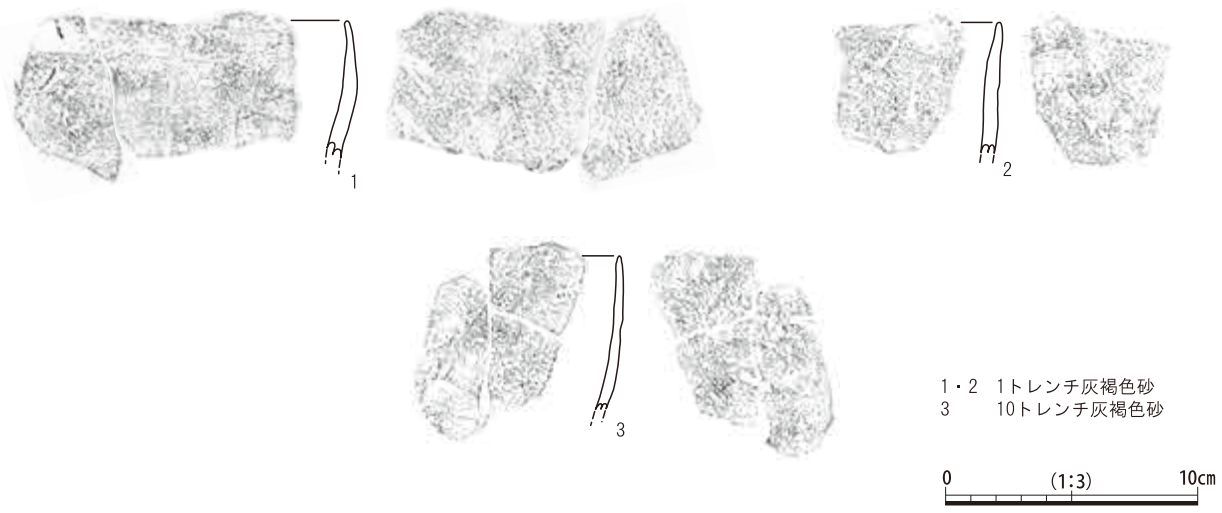
深が大きかったため、安全確保のためトレンチ壁面や地山面の人力による精査は行っていない。また、出土遺物の採集も重機で掘削した土の中から人の手によって行っている。

第３項　　試掘調査の内容（第 40・42・43 図）

トレンチの位置は第 40 図、各トレンチの標準土層を第 42 図に示す。



第 42 図　中長浜遺跡試掘調査土層断面模式図（縮尺 1/40）



第 43 図　中長浜遺跡試掘調査出土遺物実測図（縮尺 1/3）

調査地の基本層序は、東側の山裾寄りでは現在の地表面から約 2.0m前後の深さまで、また西側の海岸寄りではそれ以上の深さまで造成土が堆積しており、その下に灰褐色砂、そして最下層には青灰色砂の層が全てのトレンチに分布している。

１・２・４・10 トレンチでは、灰褐色砂層から製塩土器片が出土した。１トレンチが 174 点(第 43 図１・２)、２トレンチが８点、４トレンチが５点、10 トレンチが 160 点(同３)と、特に１・10 トレンチからの出土が多い。10 トレンチでは土師器甕片２点が出土している。

第 43 図の１～３の製塩土器は器壁が５～８㎜ 程度と薄く、口縁部は上方に鋭く収めている。口縁端部から体部にかけて外面は整っておらず、指頭圧痕をよく残しているなど、図化していないものも含めてよく似た整形である。総じて丸底の深椀形をなすものと考えられ、歪みがあるものの１の製塩土器の口径は 20～25㎝ 程度に復元できる。当地の製塩土器編年で言えば浜禰ⅡＢ式の中でも古相のものに該当する。

いずれのトレンチでも青灰色砂層の上面から湧水したが、調査地西側の県道の海抜が 2.0m前後であるので、いずれのトレンチにおいても海抜０m以下まで達したものと考えられる。最下層の青灰色砂は、かつての汀線を構成する砂層であるものと考えられ、製塩土器が出土した特に南東側に分布する灰褐色土層は堆積層にあたり、さらに東側の山寄りの山麓に集落あるいは土器製塩施設があり、低地に向かって製塩土器の流れ込みがあったものと考えられる。

青灰色砂層の上面を検出した段階で遺構の存否を確認したが、石敷炉などの製塩遺構は確認されていない。

第４項　　試掘調査の成果

調査地は全体的に古代の汀線にあたると考えられ、特に調査地の南東寄りの堆積層から製塩土器片が多く出土したことを考えると、遺跡の中心はさらに東側の山寄りの山麓に所在するものと考えられる。古川登氏が発見した丹生小学校Ａ・Ｂ遺跡は旧丹生小学校の校庭グラウンドの東側の山麓に所在していることから考えると、周辺の土器製塩遺跡は山麓を拠点に製塩活動に従事していたことが特徴であるものと考えられる。

第４節　　丹生砦跡

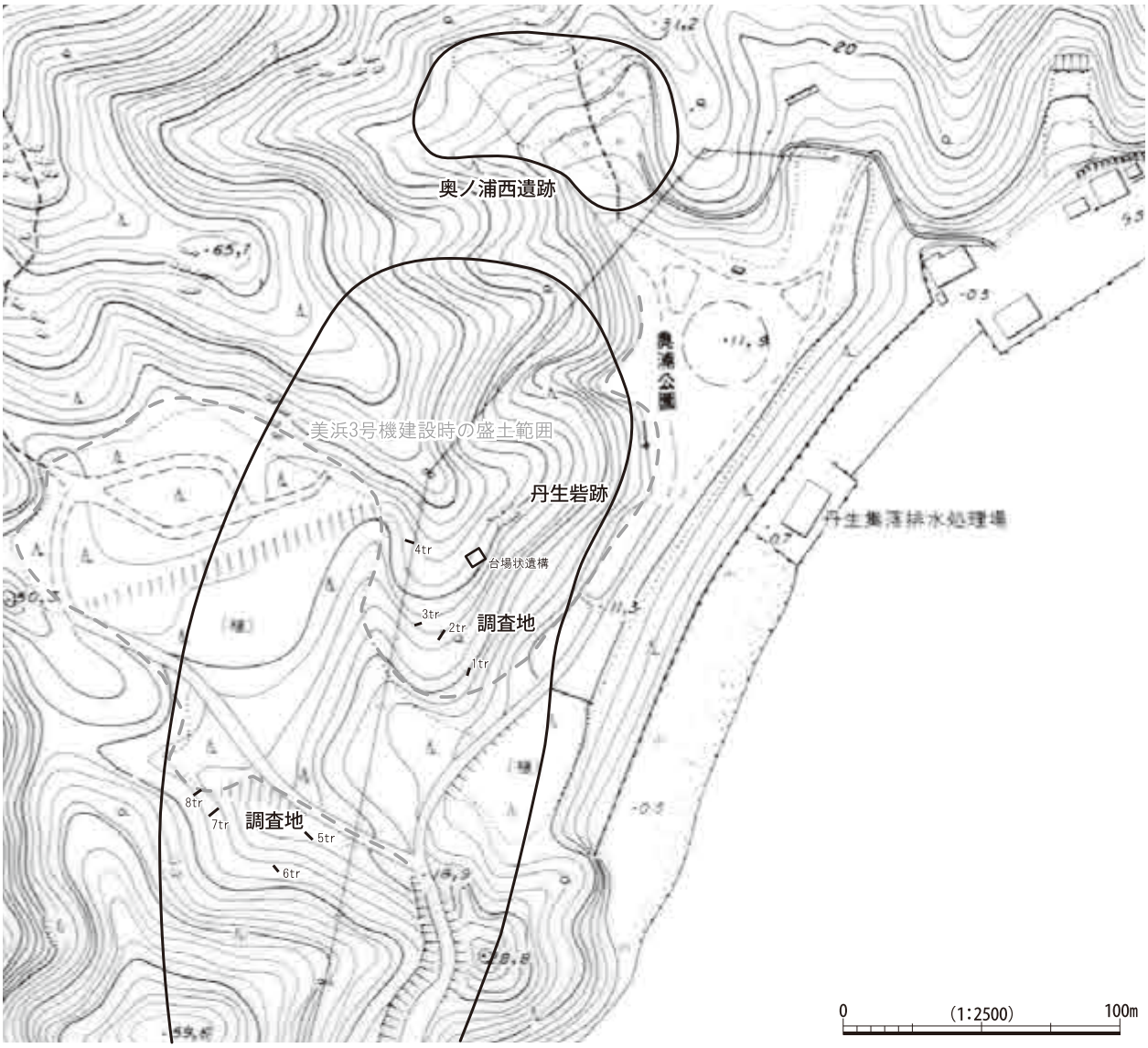
第１項　　遺跡の概要

丹生砦跡（福井県遺跡番号 30003）は福井県三方郡美浜町丹生に所在する。敦賀半島西岸の先端付近にある小湾の北側の山麓から山裾にかけて遺跡があり、この小湾を望む支尾根と谷筋に遺跡が立地する。遺跡周辺では段地形が確認されており、植林に伴う可能性もあるものの砦跡として周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。

今回の調査地の近くの尾根先端には、方形区画をもつ台場状、見張り台のような遺構が存在する。また、現代の石垣などが点在しており、美浜原子力発電所建設前後の時期に急傾斜崩落の対策として法面保護の措置が取られ、一定程度の土地改変がなされているものと考えられる。

第２項　　試掘調査の経緯と経過

今回の試掘調査の原因となった事業は、民間企業の土地造成計画である。丹生砦跡の尾根から谷筋にかけての広範囲が事業地となっており、一部は公園として整備されている。調査地の住所は福井県三方郡美浜町丹生 65 号長尾山４－５・４－17、同 66 号川坂山５－３。



第 44 図　丹生砦跡試掘調査位置図（縮尺 1/2,500）

今回の土地造成は、かつての美浜原子力発電所３号機建設時に山裾や谷筋などで盛土された範囲を中心として、さらに広範囲にわたって恒常的な盛土を計画したことに起因する。盛土の範囲は以前と同様に山裾や谷部が中心であり、遺跡名称となっている砦跡が尾根筋に分布すると想定すれば、埋蔵文化財に対する直接的な影響はさほど高くないと考えられる一方で、近年、土器製塩遺跡が海浜部のみでなく、背後の山麓まで展開している浦入遺跡などのような発掘事例も見受けられ、調査地付近でかつて大幅な盛土造成が行われているにせよ、今回の事業計画地に土器製塩遺跡の遺構、遺物が及んでいる可能性は否定できない状況にあった。

このことから埋蔵文化財に対する影響がないことを確認するために、既に盛土された範囲外の山裾、谷部において遺跡の存否、範囲、深度、性格などを確認することを目的として、幅 1.0m、斜面に沿って細長いトレンチ８か所を設定し､約 28.74 ㎡において試掘調査を実施した｡各トレンチの長さは、１トレンチ 3.0m、２トレンチ 4.35m、３トレンチ 2.8m、４トレンチ 3.5m、５トレンチ 4.0m、６トレンチ 3.0m、７トレンチ 4.6m、８トレンチ 3.5m。調査日は平成 29 年(2017) ８月９・10・16 日である。

調査地に重機の搬入は困難であったことから基本的には人力で地山層（岩盤）の上面まで表土を掘り下げ、堆積土層の観察、遺構や遺物の検出を行った。

第３項　　試掘調査の内容

トレンチの位置は第 44 図に示す。

調査地の基本層序は、いずれのトレンチにおいても数㎝の腐葉土の下、表層に暗黄褐色土が５～10㎝ほど堆積し、この下に地山土にあたる黄褐色土～淡黄褐色土があり、３・５・６・８トレンチでは地山土が粗砂であり、５・８トレンチでは部分的に軟岩盤層が露頭していた。

地山面は現在の地形に沿って傾斜しており、人為的な削平、造営痕跡は認められなかった。また、遺構、遺物ともに確認されなかった。

遺跡名	調査区	遺　構・層　位	挿図番号	遺物番号	種　別	器　種	法　量　(cm)			残存部位	製作技法・調整・施文・文様	焼　成	色　調	備　考
							口径	器高	その他					
藤ノ木遺跡 2017年試掘	2tr	SK10検出面	第37図	1	須恵器	甕	(36.4)	(11.7)	頸部径 (30.8)	口縁部片	口縁部外面：波状文・沈線、口縁部内面：横ナデ、胴部外面：平行叩き 胴部内面：当て具痕	良	灰色	
		黒褐色土層		2	土師器	椀	(16.6)	(6.8)		口縁部1/6	口縁部外面：カキメ、口縁部内面：横ナデ	良	褐色	
		排土		3	須恵器	杯B		(1.8)	高台径10.0	底部片	底部外面：自然釉付着	やや不良	灰白色	
		地床炉付近		4	砥石					破片	砂岩			重さ189.9ｇ
	4tr	SK6検出面		5	土師器	皿	(17.4)	2.7	底部径 (15.4)	1/6	赤彩、口縁部内外面・底部内面：横ナデ、口縁部内面：螺旋暗文 底部外面：指頭圧痕	良	赤褐色	
藤ノ木遺跡 2019年試掘	1tr	表土	第39図	1	土師器	高坏脚部		(6.8)		脚部1/4	赤彩、内外面：横ナデ	良	褐色	
	8tr	黒褐色土層		2	土師器	皿		(2.0)	底部径5.2	底部4/5	底部外面：回転糸切り痕、口縁部内外面：横ナデ	やや不良	淡い黄色	
	9tr	灰褐色土層		3	須恵器	杯B蓋	(14.4)	(1.5)		1/6	天井部・口縁部内外面：横ナデ	良	灰色	
				4	須恵器	杯B蓋	(14.2)	3.3	つまみ径2.6	1/10	天井部・口縁部内外面：横ナデ	良	灰色	
				5	須恵器	杯B蓋	(13.5)	2.6	つまみ径2.5	1/8	天井部・口縁部内外面：横ナデ	良	灰色	
				6	須恵器	杯B		(2.7)	底部径 (11.9)	底部1/8	底部内外面：ナデ	良	灰色	
				7	須恵器	杯B		(2.7)	底部径 (13.3)	底部1/4	底部内外面：ナデ	良	灰色	
				8	須恵器	杯B	(10.7)	4.0	底部径 (8.9)	1/8	口縁部内外面：横ナデ	良	淡灰色	
				9	須恵器	皿	(16.2)	2.4		1/8	口縁部・底部内外面：横ナデ	良	灰色	
				10	須恵器	甕胴部		(3.9)		胴部片	胴部外面：平行叩き・カキメ、胴部内面：当て具痕	良	灰色	
				11	須恵器	甕胴部		(2.8)		胴部片	胴部外面：平行叩き、胴部内面：当て具痕ナデ消し	やや不良	灰黄色	
				12	土師器	杯B蓋		(2.2)		口縁部片	赤彩、口縁部内外面：横ナデ	良	褐色	
				13	土師器	皿		(1.3)		底部片	底部外面：回転糸切り痕	やや不良	淡い黒褐色	
				14	砥石					破片	チャート			重さ88.0ｇ
				15	砥石					破片	花崗岩			重さ197.0ｇ
				16	砥石					破片	砂岩			重さ318.7ｇ
	17tr	黒褐色土層		17	須恵器	杯B	(13.8)	3.9		口縁部1/8	口縁部内外面：横ナデ	やや不良	灰色	
	21tr	黒褐色土層		18	須恵器	甕		(6.9)		胴部片	胴部外面：平行叩き、胴部内面：当て具痕ナデ消し	良	灰色	
				19	土師器	杯B蓋	(23.5)	(26.0)		1/8	赤彩、天井部外面：ヘラミガキ・横ナデ、天井部内面：横ナデ・刷毛目	良	褐色	
				20	土師器	杯A		(3.1)		口縁部片	赤彩、口縁部外面：ヘラミガキ・横ナデ、口縁部内面：横ナデ・放射暗文	良	褐色	
				21	土師器	椀		(4.8)		口縁部片	赤彩、口縁部外面：ヘラミガキ・横ナデ、口縁部内面：横ナデ・放射暗文	良	褐色	
				22	鞴羽口				器壁2.0	破片	長石・石英多く含む	良	にぶい黄橙褐色	
中長浜遺跡	1tr	灰褐色砂層	第43図	1	製塩土器			(6.9)		口縁部片	外面：指頭圧痕、内面：横ナデ、須恵質～半須恵質	やや不良	灰褐色	
	2	製塩土器						(5.4)		口縁部片	外面：指頭圧痕、内面：横ナデ、須恵質	やや不良	灰褐色	
	10tr	灰褐色砂層		3	製塩土器			(7.9)		口縁部片	外面：指頭圧痕、内面：横ナデ	良	黄橙色	

第５表　町内遺跡試掘調査出土遺物観察表

〔引用・参考文献〕

網谷克彦「松原遺跡の調査」『敦賀論叢　敦賀女子短期大学紀要』第 10 号　1995　敦賀女子短期大学
網谷克彦「福井県美浜町松原遺跡の土製模造品　－古墳時代後期の地域首長祭祀の一様相－」『敦賀論叢』第 23 号　2009　敦賀短期大学
入江文敏「興道寺窯跡・獅子塚古墳」『福井県史』資料編 13 考古　1986　福井県
入江文敏「第一部　考古編　第四章　美浜の古墳時代」『わかさ美浜町誌』第六巻　掘る・使う　2009　美浜町
梅澤あゆみ「平安時代後期の越前国における土師器の編年的考察」『越前町織田文化歴史館研究紀要』第１集　2016　越前町教育委員会
門井直哉「興道寺廃寺から見た交通路」『美浜町歴史シンポジウム記録集５　ここまで分かった！興道寺廃寺　～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』　美浜町教育委員会編　2011
門井直哉「若狭周辺における交通路の変遷」『美浜町歴史シンポジウム記録集８　古代若狭の交通、往来、地域社会』　美浜町教育委員会編　2014
小宮輝之『哺乳類の足型・足跡ハンドブック』2013　文一総合出版
芝田寿朗「序章 わかさ美浜の寺社の変遷　第二節 美浜の古代寺院と寺社の記録　一 美浜町の古代文化　二 美浜町の古代郷と式内社」『わかさ美浜町誌』第三巻　拝む・描く　2005　美浜町
芝田寿朗「興道寺廃寺のその後」『美浜町歴史シンポジウム記録集３　興道寺廃寺と興道寺遺跡　～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』　美浜町教育委員会編　2006
高橋美久二「弥美駅家と古代の道」『平成 12 年度生涯学習講座　ふるさとむかしよもやま話レジュメ』　2000　美浜町教育委員会
田中完一・大森宏「二　各説　（六）三方郡」『福井県史』資料編 16 下　条里復元図　1992　福井県
田中完一「第四章　律令制下の若越　第四節　開発と土地管理　四　嶺南地方の条里」『福井県史』通史編１　原始・古代　1992　福井県
独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター『地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）　西津地域の地質』　2002
初村武寛・福山博章「資料二　獅子塚古墳出土の金属製品」『わかさ美浜町誌』第六巻　掘る・使う　2009　美浜町
菱田哲郎「興道寺廃寺から見た寺院経営」『美浜町歴史シンポジウム記録集５　こまで分かった！興道寺廃寺　～興道寺廃寺をとりまく地域、風景、人々～』　美浜町教育委員会編　2011
廣嶋一良「72　寄戸遺跡」『福井県史』資料編 13 考古　1986　福井県
福井県教育委員会『重要遺跡緊急確認調査報告』（Ⅰ）1978
福井県教育委員会『重要遺跡緊急確認調査報告』（Ⅱ）1978
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『興道寺遺跡　－県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う調査－』　2003
福井県埋蔵文化財調査センター『南伊夜山銅鐸出土地』　2005
福井県立若狭歴史民俗資料館『塩　―生産の歴史三千年―』　1989
北陸古瓦研究会『北陸の古代寺院　その源流と古瓦』　1987
真柄甚松「第４章　北陸道　第２節　若狭国」『日本古代の交通路』Ⅱ　1978　藤岡謙二編　大明堂
松葉竜司「第一部　考古編　第五章　美浜の古代社会に生きた人々」『わかさ美浜町誌』第六巻　掘る・使う　2009　美浜町
松葉竜司「若狭国遠敷郡における律令期の瓦生産　～丸瓦・平瓦を中心に～」『館報　平成 25 年度』　福井県立若狭歴史民俗資料館　2015
水野和雄「若狭周辺の古代寺院と出土瓦」『美浜町歴史シンポジウム記録集３　興道寺廃寺と興道寺遺跡　～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』　美浜町教育委員会編　2006
美浜町教育委員会『興道寺窯跡発掘調査概報』　1978
美浜町教育委員会『興道寺遺跡』　1998
美浜町教育委員会『興道寺古墳群　県営中山間地域総合整備事業美方地区に伴う発掘調査報告書』　2002
美浜町教育委員会『美浜町内遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　2003
美浜町教育委員会『美浜町内遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　2007
美浜町教育委員会『美浜町内遺跡発掘調査報告書』Ⅲ　2012
美浜町教育委員会『興道寺廃寺発掘調査報告書』　2016
美浜文化叢書刊行会『美浜文化叢書９　耳村誌』　2014
山口充「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」『福井考古学会会誌』第２号　1984　福井考古学会
立命館大学文学部『立命館大学文学部学芸員課程研究報告第 13 冊　姫路見野古墳群発掘調査報告』　2011

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ全景（東から撮影）

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ全景（西から撮影）

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ北壁土層断面１

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ北壁土層断面２

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ南壁土層断面

写真図版２

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ西端北壁土層断面

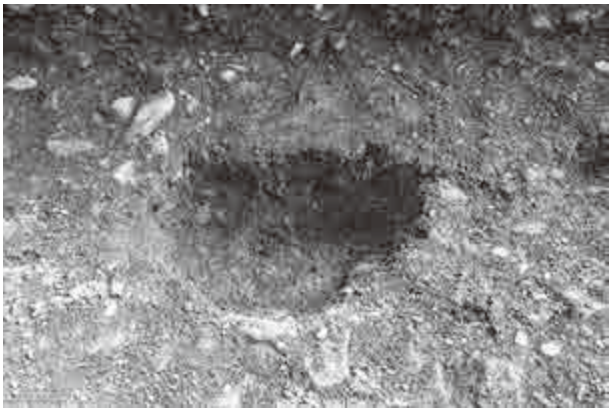
興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ整地面

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ整地面断割土層断面

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ SD170101

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ SA170101

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ P170101 土層断面



興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ P170102 土層断面

興道寺廃寺第 17 次調査１トレンチ P170103 土層断面

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ全景(南から撮影)

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ南半(南から撮影)

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ北半(南から撮影)

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ全景(南西から撮影)

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ東壁土層断面

写真図版４

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SZ180101 北側(南から撮影)

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SZ180101-SD1 検出状況

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SZ180101-SD1(南から撮影)

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SZ180101-SD1(北から撮影)

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SZ180101-SD1 礫出土状況

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SZ180101-SD1 土層断面１

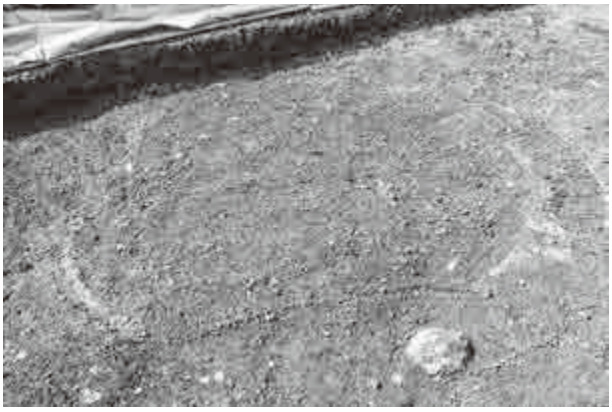
興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SZ180101-SD1 土層断面２

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SZ180101-SD1 断割土層断面

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SK180101・SK180102

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SK180102

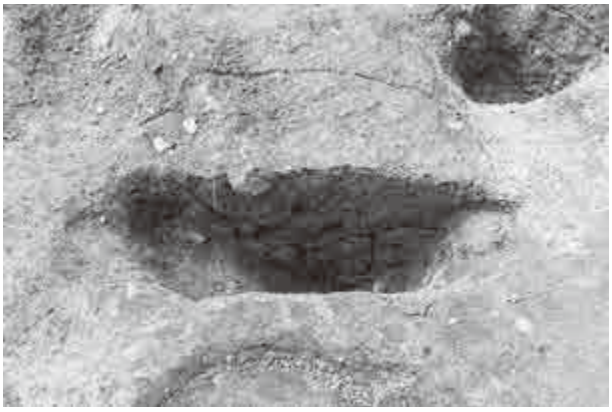
興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SK180102 土層断面



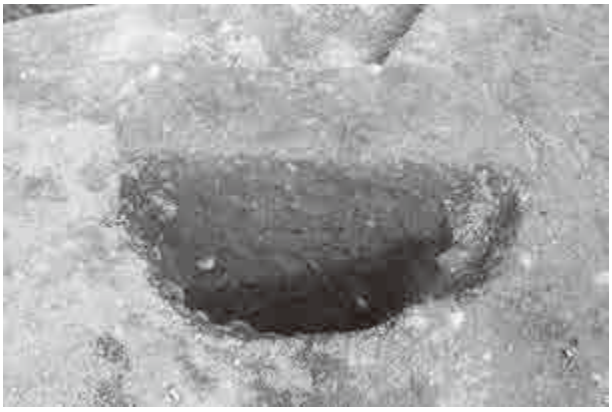
興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SK180102 検出状況

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SK180102
礫・土壁出土状況

興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ SA180101



興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ P180101 土層断面



興道寺廃寺第 18 次調査１トレンチ P180102 土層断面

写真図版６

興道寺廃寺第 19 次調査１トレンチ全景(南西から撮影)

興道寺廃寺第 19 次調査１トレンチ全景(西から撮影)

興道寺廃寺第 19 次調査１トレンチ全景(東から撮影)

興道寺廃寺第 19 次調査１トレンチ北壁土層断面

興道寺廃寺第 19 次調査１トレンチ SZ190101-SD1(西から撮影)

興道寺廃寺第 19 次調査 1 トレンチ SZ190101-SD1（北から撮影）

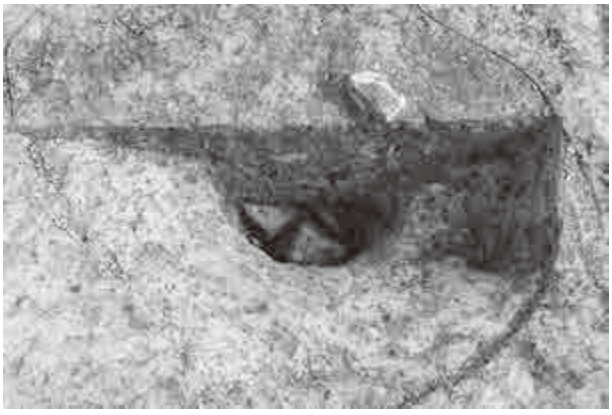
興道寺廃寺第 19 次調査 1 トレンチ SZ190101-SD1 礫出土状況

興道寺廃寺第 19 次調査 1 トレンチ SZ190101-SD1 土層断面

興道寺廃寺第 19 次調査 1 トレンチ SZ190101-SD1 断割土層断面

興道寺廃寺第 19 次調査 1 トレンチ SK190101 土層断面

興道寺廃寺第 19 次調査 1 トレンチ SK190103 土層断面



興道寺廃寺第 19 次調査 1 トレンチ P190101 土層断面

興道寺廃寺第 19 次調査 1 トレンチ P190102 土層断面

写真図版８

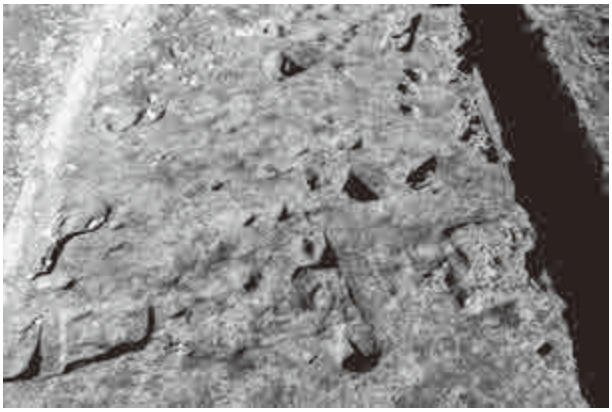
興道寺廃寺第 19 次調査２トレンチ全景（西から撮影）

興道寺廃寺第 19 次調査２トレンチ全景（東から撮影）

興道寺廃寺第 19 次調査２トレンチ北壁土層断面

興道寺廃寺第 19 次調査２トレンチ SH190201（東から撮影）

興道寺廃寺第 19 次調査２トレンチ SH190201（北から撮影）



興道寺廃寺第 19 次調査２トレンチ SH190201（西から撮影）

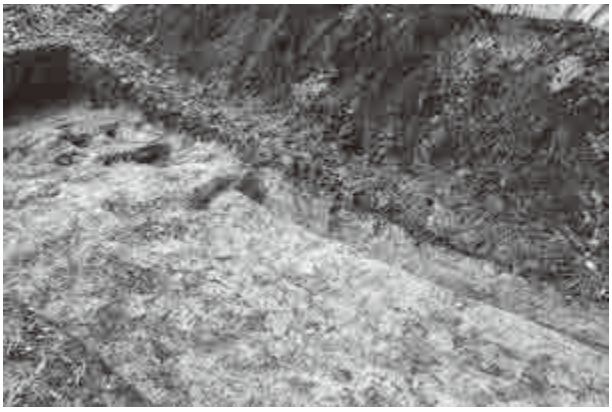
興道寺廃寺第 19 次調査２トレンチ SH190201-SD2

興道寺廃寺第 19 次調査２トレンチ SH190201 焼土

高善庵遺跡第２次調査１トレンチ全景（南から撮影）

高善庵遺跡第２次調査１トレンチ全景（北から撮影）

高善庵遺跡第２次調査１トレンチ南半（南から撮影）



高善庵遺跡第２次調査１トレンチ西壁土層断面

高善庵遺跡第２次調査１トレンチ南壁土層断面

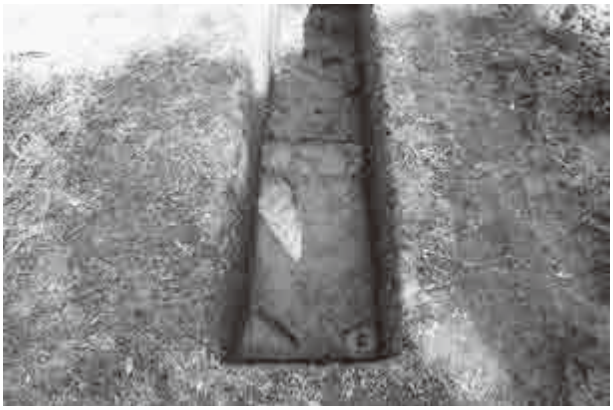
高善庵遺跡第２次調査１トレンチ SE020101（南西から撮影）

高善庵遺跡第２次調査１トレンチ SE020101（北から撮影）

高善庵遺跡第２次調査１トレンチ SE020101 土層断面

写真図版 10

高善庵遺跡第２次調査２トレンチ全景（西から撮影）

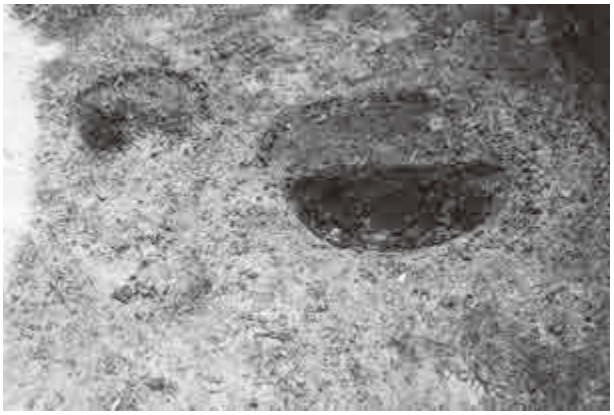


高善庵遺跡第２次調査２トレンチ西半（西から撮影）

高善庵遺跡第２次調査２トレンチ東半（東から撮影）

高善庵遺跡第２次調査２トレンチ北壁土層断面

高善庵遺跡第２次調査２トレンチ北壁土層断面（西端）



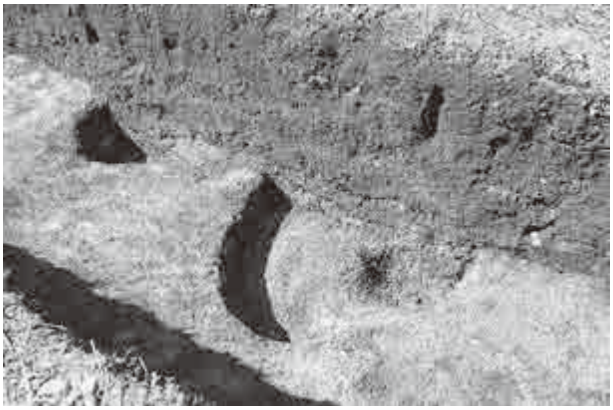
高善庵遺跡第２次調査２トレンチ P020204・P020205 土層断面

高善庵遺跡第２次調査３トレンチ全景（東から撮影）

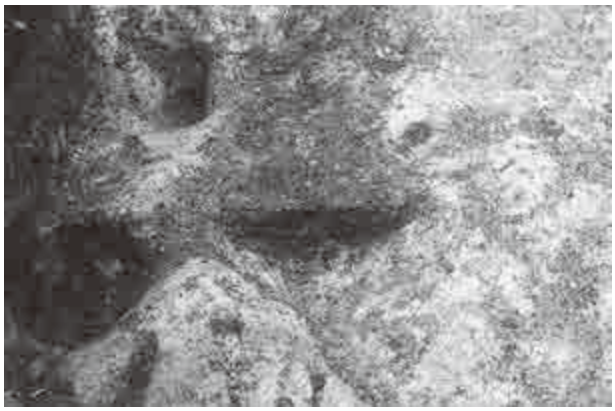
高善庵遺跡第２次調査３トレンチ西半（西から撮影）

高善庵遺跡第２次調査３トレンチ東半（東から撮影）

高善庵遺跡第２次調査３トレンチ南壁土層断面



高善庵遺跡第２次調査３トレンチ
SK020301・P020305 土層断面



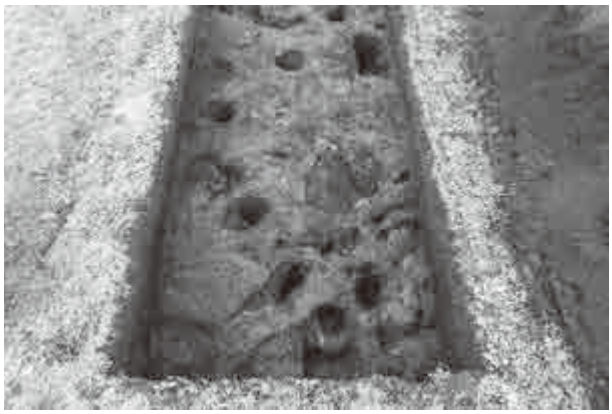
高善庵遺跡第２次調査３トレンチ
P020301・P020302 土層断面

高善庵遺跡第３次調査地全景

写真図版 12

高善庵遺跡第３次調査１トレンチ全景（西から撮影）

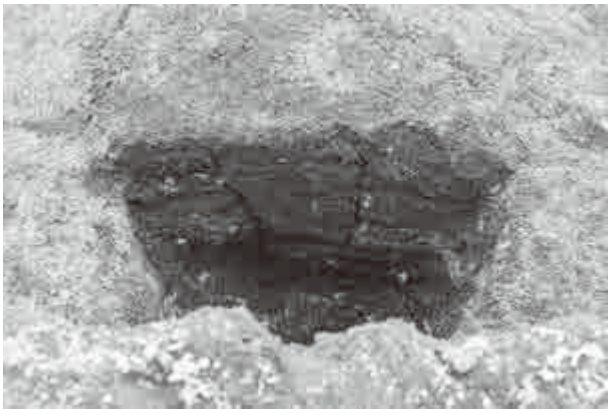
高善庵遺跡第３次調査１トレンチ西半（西から撮影）



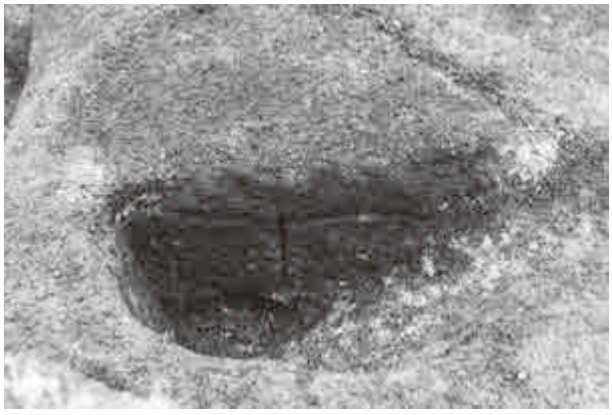
高善庵遺跡第３次調査１トレンチ東半（東から撮影）

高善庵遺跡第３次調査１トレンチ南壁土層断面

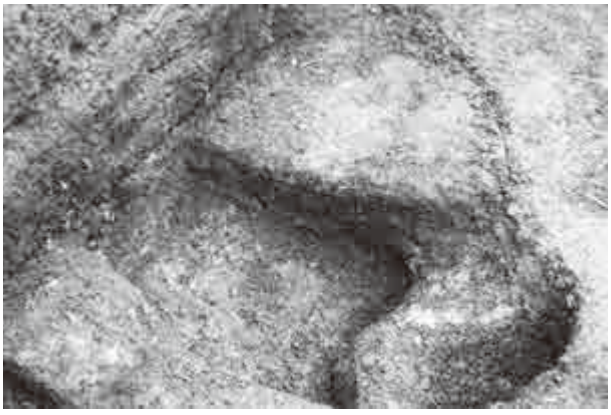
高善庵遺跡第３次調査１トレンチ SA030101



高善庵遺跡第３次調査１トレンチ P030101 土層断面



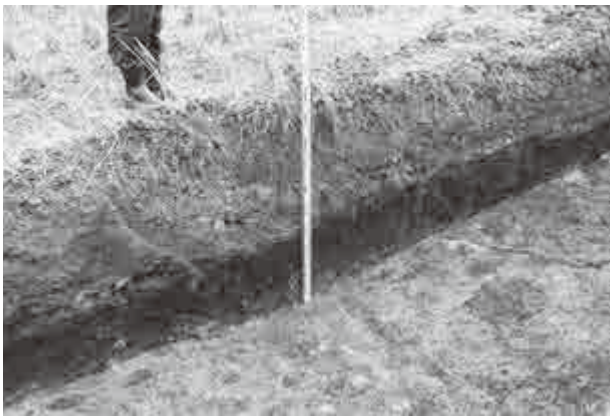
高善庵遺跡第３次調査１トレンチ P030102 土層断面



高善庵遺跡第３次調査１トレンチ P030103 土層断面

興道寺遺跡試掘調査１トレンチ遺構検出状況（南から撮影）

興道寺遺跡試掘調査　調査前現況（東から撮影）



興道寺遺跡試掘調査１トレンチ東壁土層断面

興道寺遺跡試掘調査２トレンチ遺構検出状況（北から撮影）

興道寺遺跡試掘調査２トレンチ東壁土層断面

藤ノ木遺跡試掘調査９トレンチ土層断面

藤ノ木遺跡試掘調査 17 トレンチ土層断面

写真図版 14

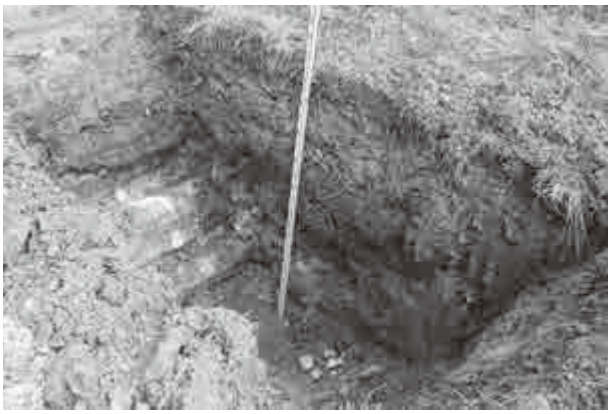
藤ノ木遺跡試掘調査 21 トレンチ遺構検出状況（北から撮影）

藤ノ木遺跡試掘調査 21 トレンチ土層断面

藤ノ木遺跡試掘調査 23 トレンチ遺構検出状況（北から撮影）

藤ノ木遺跡試掘調査 28 トレンチ遺構検出状況（北から撮影）

中長浜遺跡試掘調査１トレンチ土層断面

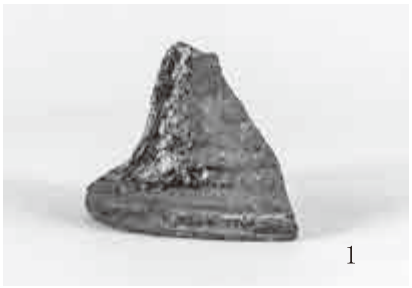


中長浜遺跡試掘調査 10 トレンチ土層断面

丹生砦跡試掘調査２トレンチ

丹生砦跡試掘調査６トレンチ

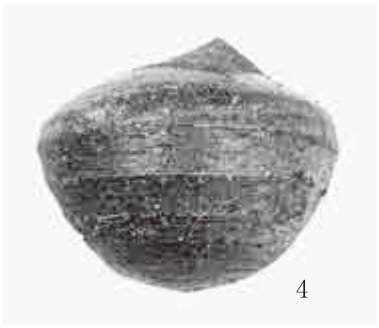
第11図


1

2

3

9


4

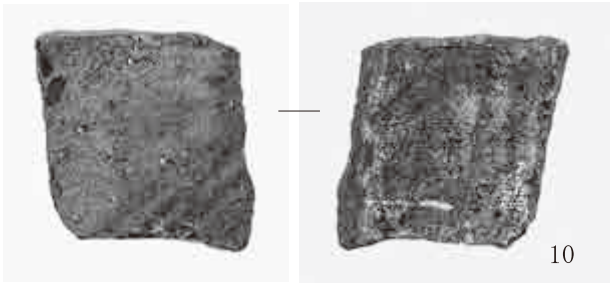
5

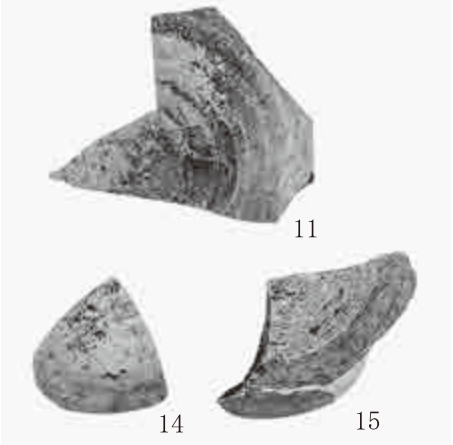
7

8

6

13




10

11

14

15

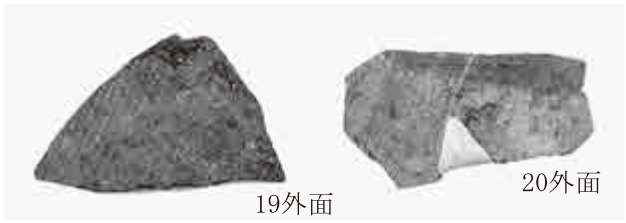
12

16

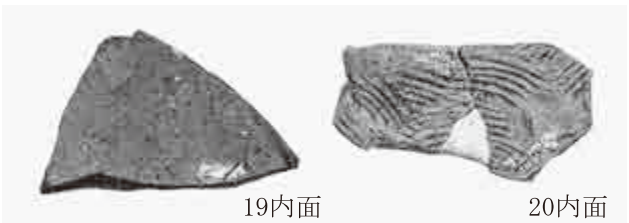
17

18

21


19外面

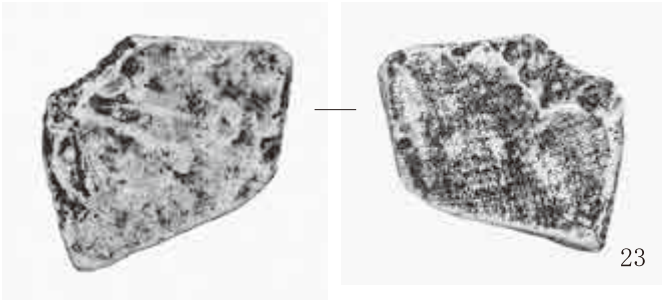
20外面

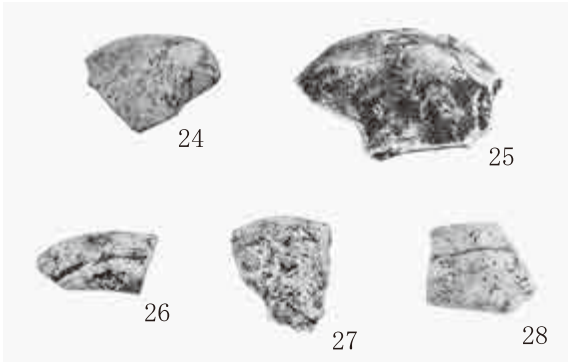

19内面

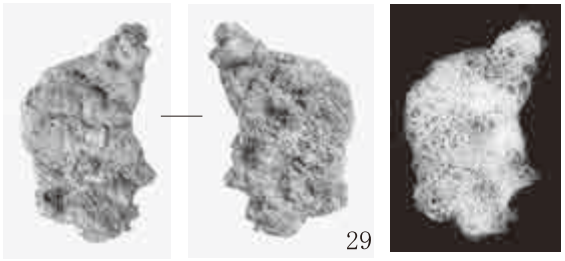
20内面

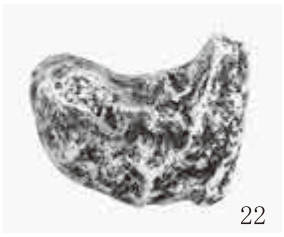
写真図版 16

第11図

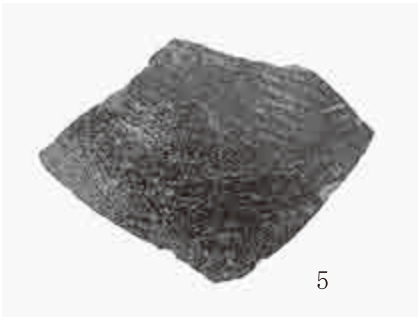


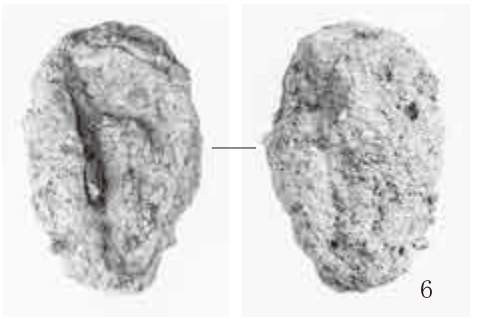






第15図

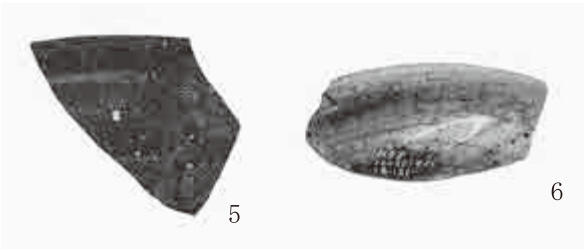


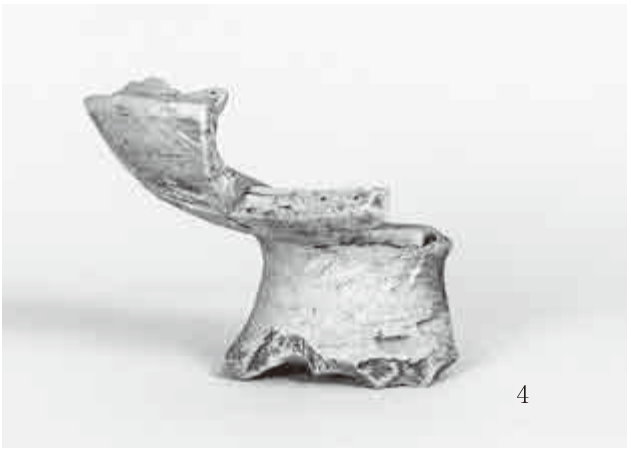


SK180102出土チャノキ近似種の種子

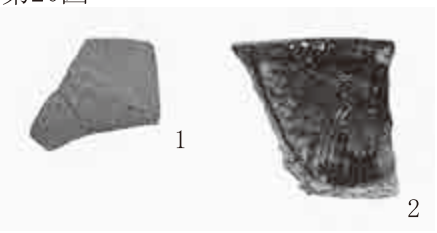
SK180102出土土壁

第18図



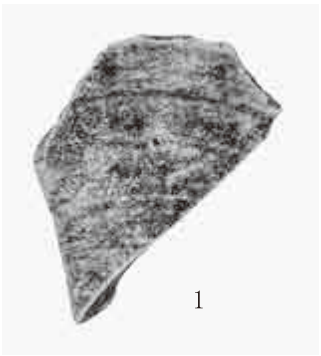


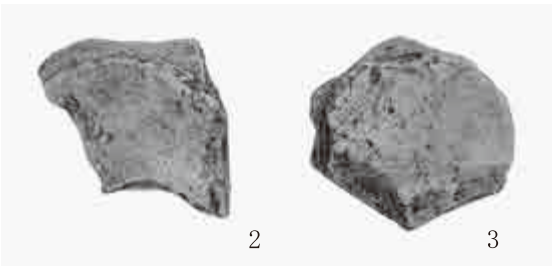
第20図



第25図

第28図

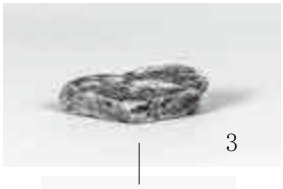




写真図版 18

第30図

1


3

2

4

5

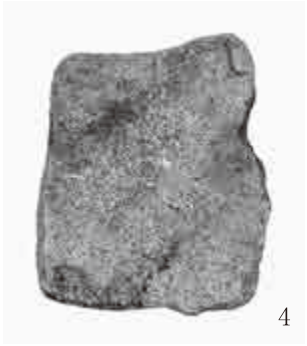
6

第33図

1

第37図

1


4

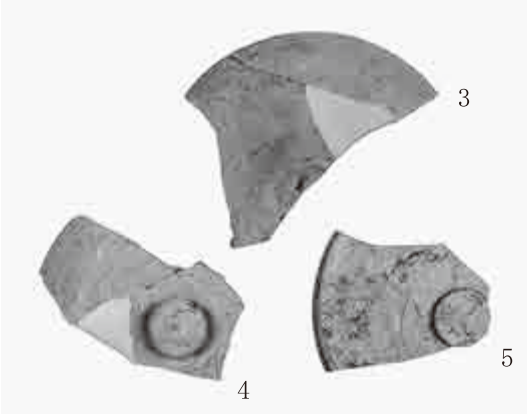
2

1

第39図

3

5


3
4
5

第39図

2

3

4

5

6

7

9

6

7

9

8

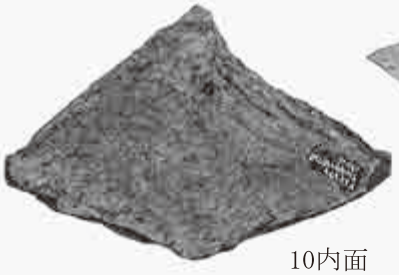
12

10外面

11外面

17

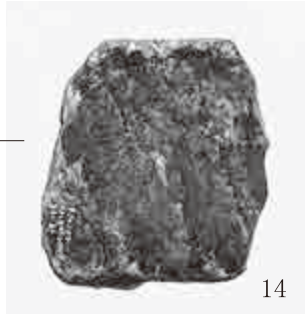
18

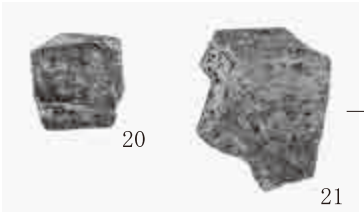

10内面

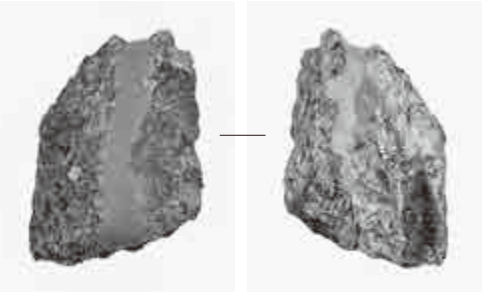
11内面

写真図版 20

第39図







第43図

中長浜遺跡１トレンチ灰褐色砂層
出土製塩土器

報　告　書　抄　録

ふりがな	みはまちょうないいせきはっくつちょうさほうこくしょ　し
書　　名	美浜町内遺跡発掘調査報告書４
副 書 名	興道寺廃寺(第17～19次調査)・高善庵遺跡(第２・３次調査)・興道寺遺跡・藤ノ木遺跡・中長浜遺跡・丹生砦跡
シリーズ名	美浜町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第10集
編著者名	松葉竜司
編集機関	美浜町教育委員会
所 在 地	〒919-1192　福井県三方郡美浜町郷市25－25　　℡0770-32-6708
資料保管場所	美浜町教育委員会事務局　教育政策課　歴史文化館
	〒919-1138　福井県三方郡美浜町河原市８－８　　℡0770-32-0027
発行年月日	西暦2020年（令和２年）３月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
こうどうじはいじ 興道寺廃寺 (興道寺遺跡)	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうこうどうじ 美浜町興道寺	18442	30071 (30073)	35度 35分 52秒	135度 56分 39秒	170207～170314 180131～180323 181016～181213	130.1	内容確認調査 （第17～19次調査）
こぜんないせき 高善庵遺跡	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうこうどうじ 美浜町興道寺	18442	30068	35度 35分 28秒	135度 56分 50秒	180131～180323 191112～191129	34.1	内容確認調査 （第２・３次調査）
こうどうじいせき 興道寺遺跡	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうこうどうじ 美浜町興道寺	18442	30073	35度 35分 54秒	135度 56分 34秒	181023・181024	27.8	開発事業計画に伴う 存否確認試掘調査
ふじのきいせき 藤ノ木遺跡	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうごいち 美浜町郷市	18442	30077	35度 36分 12秒	135度 56分 9秒	191121・ 191123・191124	240.0	開発事業計画に伴う 存否確認試掘調査
なかながはまいせき 中長浜遺跡	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうにゅう 美浜町丹生	18442	30006	35度 42分 26秒	135度 58分 25秒	180315・180316	30.0	開発事業計画に伴う 存否確認試掘調査
にゅうとりであと 丹生砦跡	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうにゅう 美浜町丹生	18442	30003	35度 42分 30秒	135度 57分 42秒	170809・ 170810・170816	28.74	開発事業計画に伴う 存否確認試掘調査

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
興道寺廃寺 (興道寺遺跡)	古代寺院 (集落跡)	白鳳～平安 (弥生～中世)	古墳、柱穴列、竪穴建物跡等	須恵器、土師器、製塩土器、瓦など	大きく２時期からなる古代寺院であることが判明
高善庵遺跡	散布地	古墳・平安	井戸跡、土坑、小穴、柱穴列	須恵器、土師器	11～12世紀の土師器皿が多く出土
興道寺遺跡	集落跡	弥生～中世	竪穴建物跡、土坑、小穴	須恵器、土師器	古代の集落の一部か
藤ノ木遺跡	散布地	古墳～中世	竪穴建物跡、土坑、小穴	須恵器、土師器、製塩土器、鉄滓、鞴羽口、砥石	８～９世紀の鍛冶関連集落か
中長浜遺跡	製塩跡	縄文～平安	なし	製塩土器	堆積層から製塩土器が出土
丹生砦跡	城郭跡	中世	なし	なし	

要　　約

『興道寺廃寺発掘調査報告書』刊行以後に実施した第17～19次調査の成果を本書に収録した。寺院外の北方で発掘調査を行い、古墳、柱穴列、竪穴建物跡など古墳時代後期から古代の遺構、遺物を確認した。

瓦窯の所在が推定されている高善庵遺跡では第２・３次調査を実施し、11～12世紀を中心とした遺構、遺物が確認された。瓦窯の検出には至らなかったが、古代後期の遺構が検出され、特に土師器皿の出土が多かったことはこの時期には創建されていると考えられる天台宗寺院、興道寺との関連性がうかがえる。

これ以外に平成28～30年度、令和元年度に実施した試掘調査の成果を本書に収録した。

『美浜町内遺跡発掘調査報告書４
興道寺廃寺（第 17～19 次調査）・高善庵遺跡（第２・３次調査）・
興道寺遺跡・藤ノ木遺跡・中長浜遺跡・丹生砦跡』

2020 年 3 月 17 日発行

発　行　　美浜町教育委員会
〒919-1138　福井県三方郡美浜町郷市 25-25
印　刷　　若越印刷株式会社 美浜営業所
〒919-1145　福井県三方郡美浜町金山 19-7-1

この電子書籍は、2020 年３月 17 日、美浜町教育委員会が発行した『美浜町内遺跡発掘調査報告書４　興道寺廃寺(第 17～19 次調査)・高善庵遺跡(第２・３次調査)・興道寺遺跡・藤ノ木遺跡・中長浜遺跡・丹生砦跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遺跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとしています。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：美浜町内遺跡発掘調査報告書４
興道寺廃寺(第 17～19 次調査)・高善庵遺跡(第２・３次調査)・興道寺遺跡・藤ノ木遺跡・中長浜遺跡・丹生砦跡
発行：美浜町教育委員会
〒919-1138　福井県三方郡美浜町河原市８号８番地（美浜町歴史文化館）
電話：0770-32-0027
電子書籍制作日：令和２年(2020)３月 17 日